太井遺跡発掘調査概要・Ⅱ

大阪府教育委員会・河内長野市教育委員会

太井遺跡発掘調査概要・Ⅱ

大阪府教育委員会
河内長野市教育委員会

序　　文

河内地域の南部は、近年「奥河内」の名称で観光地として広く知られるようになりました。金剛山、葛城山などの山並には、毎日多くの登山者が訪れています。

しかし山深い金剛山の麓の村々では、耕作地の確保はむずかしく狩猟や炭焼きなどの山仕事を主要な生業としてきた時代が長く続きました。

金剛山に水源をもち深い谷底を流れる石見川、その河岸の段丘の狭い平坦地に太井遺跡は所在します。現在はひな壇状に造成された水田や畑が広がっていますが、田畑の耕作土を取り除くと、その下から岩盤があらわれるような悪い条件の中で耕地化がはかられてきたのです。また田へ引く用水も安定的に供給するためには、かなり上流から水を引かねばなりません。これは近世から近代になってのことで大変な作業が伴ったと考えられます。現在の景観が形成される以前、どのような世界が広がっていたか大変興味深いものです。

この地に最初に現れた人の痕跡は、今からおよそ4000年前の縄文時代後期のことです。今のところ、少量の土器が発見されているだけで詳しいことは今後の調査を待たねばなりません。石見川の上流域に人々が定住し始めるのは、中世になってからと思われます。鎌倉時代にさかのぼる仏像などが、村々に伝えられているのがその証拠と言えます。そして、今回報告する太井遺跡の中世の墓地遺構があります。石見川上流に暮らした人々の、人と村、村と村をつなぐ関係など、多くのことを考えさせます。

一昨年11月、太井遺跡の発掘調査の時に開催した説明会には、多くの皆様に参加いただきました。また、現地調査の時にも地域のいろいろなお話をうかがう事ができ大変に参考になりました。

今回の調査の成果はこのような皆様方、さらに大阪府環境農林水産部、河内長野市産業振興部農林課はじめ関係機関からも多くのご協力に負っています。ここに厚くお礼申し上げます。

そして、今後とも本府の文化財保護行政にご理解いただきますようお願い申し上げます。

平成25年３月

大阪府教育委員会　事務局
文化財保護課長　荒井 大作

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、緑豊かな山々や清らかな河川に恵まれ、旧石器時代から人々の活動の痕跡が認められています。古代では中央政権で活躍する高向玄理がこの地から出ており、今に続く文化の香り高いまちと言えます。中世には、真言宗の一山寺院である観心寺、金剛寺が隆盛を極め、海外にも紹介された烏帽子形城が築城されます。また、近世には、高野山と京都・大坂・堺を結ぶ高野街道の要衝として発展してきました。このことから、市内には数多くの文化財が遺され、国の指定を受けた建造物、美術工芸品等が84件、史跡が３件にのぼります。

これら先人達のメッセージである文化財を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。本市においては、教育立市宣言の一つの柱として「文化財の町」を位置づけ、重要な課題であるまちの発展と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は、太井地区にある太井遺跡の発掘調査の成果を収録しています。皆様の文化財への理解を深めていただくと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用していただければ幸いです。

発掘調査に協力していただきました方々の埋蔵文化財への深いご理解に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成25年３月

河内長野市教育委員会

教育長　和田　栄

例　　言

1．本書は、大阪府環境農林水産部が実施する府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」に伴って、大阪府教育委員会が大阪府環境農林水産部の依頼を受けて実施した、河内長野市太井・小深に所在する太井遺跡の発掘調査概要である。

2．本調査は、本府教育委員会と河内長野市教育委員会が締結した「府営農村振興総合整備事業『河内長野和泉地区』にかかる埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」にもとづいて共同で実施した。

3．現地調査は、小深地区と太井地区で実施した。小深地区の調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ　副主査　西川寿勝が担当し、平成23年６月８日から９月６日までの期間で実施した。

　太井地区の発掘調査は、河内長野市教育委員会ふるさと文化課　島津知子、寺川史郎、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ　主査　小林義孝、副主査　西川寿勝、副主査　杉本清美が担当し、平成23年９月１日から平成23年11月18日までの期間で実施した。

　遺物整理は大阪府教育委員会文化財調査事務所および河内長野市立ふるさと歴史学習館において、調査管理グループ主査 三宅正浩、同副主査 藤田道子と島津、西川、杉本が担当し、平成23年度・24年度に実施した。

4．本調査の調査番号は、11016（小深地区）、11038（太井地区）である。

5．本調査の基準点測量、写真測量については、株式会社南紀航測センター大阪支店に委託して実施した。撮影フィルムは同社が保管している。

6．本書に掲載した遺物の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

7．調査で製作した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。

8．本書の執筆・編集は、西川・小林が担当した。

9．発掘調査、遺物整理及び本書の作成に要した経費は、事業者である大阪府環境農林水産部と本事業にかかる地元負担分相当額を文部科学省の補助を得て大阪府教育委員会が負担した。

10．本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、557円である。

本文目次

序文（大阪府教育委員会）
序文（河内長野市教育委員会）
例言
第Ⅰ章　調査に至る経過……1（小林）
　1節　事情実施の経過
　2節　太井遺跡発掘調査の経過
　3節　調査方法

第Ⅱ章　位置と環境……5（小林）
　1節　河内長野市内に分布する中世遺跡
　2節　太井遺跡の歴史環境
　3節　太井地区周辺の現在墓地……6（西川）

第Ⅲ章　小深地区の調査（集落域の調査）……11（西川）
　1節　調査区と基本層序
　2節　拡張区の調査
　3節　出土遺物

第Ⅳ章　太井地区の調査（中世墓の調査）……19（西川）
　1節　調査区の基本層序
　2節　中世墓
　3節　その他の遺構
　4節　出土遺物
　　a中世の遺物
　　b縄文時代の遺物 ……36（大野）

中世墳墓計測表……38（西川・杉本）
出土遺物対照表……40（西川・杉本）

第Ⅴ章　まとめ……43（西川）

図版
報告書抄録

挿図・挿写真目次

図1　地区割図……3
図2　周辺遺跡分布図……7
図3　試掘トレンチ配置図……8
図4　小深地区調査区位置図……12

図５　拡張区平面図…… 14
図６　小深地区出土土器１…… 15
図７　小深地区出土土器２…… 16
図８　小深地区出土土器３…… 17
図９　上段西部の墓群…… 18
図10 太井地区平面図 …… 21・22
図11 上段東部の墓群 …… 23
図12 下段西部の墓群 …… 24
図13 下段中部の墓群 …… 25
図14 下部南部の墓群 …… 26
図15 下段東部の墓群 …… 27
図16 中段の墓群１ …… 28
図17 中段の墓群２ …… 29
図18 火葬墓002周辺…… 30
図19 湊焼大甕・砥石 …… 31
図20 太井地区出土土器１ …… 33
図21 太井地区出土土器２ …… 34
図22 太井地区出土土器３ …… 35
図23 太井地区出土縄文土器 …… 35
図24 太井地区出土鉄製品 …… 36
挿写真１　小深墓地と太井墓地…… 9
挿写真２　小深墓地の一列に並んだ墓群…… 10
挿写真３　小深墓地の自然石による墓群…… 44

図版目次

図版　墓002調査状況
図版１　小深地区調査区全景１
図版２　小深地区調査区全景２
図版３　小深地区調査区全景３
図版４　小深地区地区拡張区全景
図版５　太井地区全景１
図版６　太井地区各種遺構
図版７　太井地区上段西部の墓群
図版８　太井地区上段東部の墓群
図版９　太井地区下段西部の墓群
図版10　太井地区下段中部の墓群
図版11　太井地区下段南部の墓群
図版12　太井地区下段東部の墓群
図版13　太井地区中段の墓群
図版14　太井地区上段墓002
図版15　小深地区出土遺物
図版16　小深地区拡張区出土遺物
図版17　太井地区出土遺物１
図版18　太井地区出土遺物２
図版19　太井地区出土遺物３
図版20　太井地区出土遺物４
図版21　太井地区出土遺物５
図版22　太井地区出土遺物６
図版23　太井地区出土遺物７
図版24　太井地区出土遺物８
図版25　太井地区出土遺物９

第Ⅰ章　調査に至る経過

１節　事業実施の経過

大阪府環境農林水産部が実施する府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」に伴って平成15年度から埋蔵文化財についての調査を実施している。

平成14年度　高木遺跡（河内長野市日野所在）の埋蔵文化財調査について、環境農林水産部から依頼（平成15年３月24日付）を受け、平成15年度に高木遺跡の確認調査を実施した。確認調査結果を環境農林水産部へ回答した（平成16年１月28日付）。

平成15年度　環境農林水産部からの依頼をうけて河内長野市高向で試掘調査を実施し、高向神社南遺跡が新規に発見される。

平成19年度　河内長野市小深･太井地区の埋蔵文化財調査について環境農林水産部から依頼（７月５日付）を受ける。当該地の一部は太井遺跡に含まれており、その範囲内における確認調査と付近の事業対象地について試掘調査を実施（平成19年９月）。試掘調査の結果により太井遺跡の範囲が拡大する。太井遺跡の試掘・確認調査結果について環境農林水産部へ回答（平成20年３月31日付）。

高向神社南遺跡については、河内長野市教育委員会と「高向南神社遺跡発掘調査に関する協定書」を締結し（10月11日付）、共同で発掘調査（第１次）を実施した

平成20年度　高向神社南遺跡の発掘調査、河内長野市川上・鳩原地区の埋蔵文化財調査について環境農林水産部から依頼を受け（７月24日付）、調査経費等について環境農林水産部と覚書締結した上で、鳩原遺跡の確認調査と付近の事業対象地の試掘調査を実施した。その結果、鳩原東端遺跡と鳩原西端遺跡が新規に発見され、鳩原遺跡は範囲が拡大する。この試掘・確認調査結果を環境農林水産部へ回答する。

平成21年度　河内長野市鳩原所在奥田井遺跡と、高向神社南遺跡の埋蔵文化財調査について環境農林水産部から依頼を受け､調査経費等について覚書締結する。奥田井遺跡の発掘調査を実施。高向神社南遺跡の発掘調査（第２次）と遺物整理事業を実施し、『高向神社南遺跡』（大阪府埋蔵文化財調査報告2009－６）（大阪府教育委員会・河内長野市教育委員会）を刊行する。

平成22年度　奥田井遺跡、太井遺跡、高木遺跡の埋蔵文化財調査について環境農林水産部から依頼を受ける（平成22年３月10日付）。

府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」事業予定地の発掘調査を共同で実施することについて河内長野市教育委員会と協定書を締結する（７月１日付）。

環境農林水産部と調査経費等についての覚書締結し、奥田井遺跡、太井遺跡（小深地区）、高木遺跡の３件の発掘調査を実施した。河内長野市教育委員会との協定により、高木遺跡の発掘調査を河内長野市教育委員会が主に実施し、ほかの２件を本府教育委員会が実施した。

また平成21年度に実施した奥田井遺跡の発掘調査の遺物整理事業を実施し、『奥田井遺跡発掘調査概要Ⅰ』（大阪府教育委員会）を刊行した。

平成23年度　太井遺跡等の埋蔵文化財調査について、環境農林水産部から依頼を受け（平成23年３月17日付）、調査経費等についての覚書を締結（平成23年５月12日付）した。

太井遺跡（小深地区）では、前年度の成果を受けて事業地全体について確認調査を実施し、遺構が検出された地点について発掘調査を実施した。太井遺跡（太井地区）の発掘調査は河内長野市教育委員会が共同で実施した。

平成22年度に実施した奥田井遺跡、太井遺跡、高木遺跡の遺物整理を実施した。奥田井遺跡、太井遺跡については本府教育委員会が、高木遺跡は主に河内長野市教育委員会が実施し、その成果を『奥田井遺跡Ⅱ･太井遺跡Ⅰ発掘調査概要』（大阪府教育委員会）と『太田遺跡発掘調査概要』（大阪府教育委員会・河内長野市教育委員会）として刊行した。

平成24年度　本年度は、太井遺跡等の埋蔵文化財調査について環境農林水産部から依頼を受け（平成24年３月23日付）、調査経費等についての覚書を締結（４月10日付）した。

当初、太井遺跡と鳩原遺跡の発掘調査を予定していたが、環境農林水産部の太井遺跡における事業の見直しにより調査面積が拡大することとなり、本年度は太井遺跡のみ発掘を実施することとなった。調査は河内長野市教育委員会と共同で実施した。また平成23年度に実施した太井遺跡の遺物整理を実施し、その成果が本書である。

２節　太井遺跡発掘調査の経過

太井遺跡は、古くから中世の遺物などの遺物散布として周知されていたが、発掘調査等が実施されることは近年までなかった。

平成10年度、太井地区の「五見農道」建設に伴い、河内長野市教育委員会が発掘調査を実施した（平成10年12月21日～11年２月５日）。多数の土坑と縄文土器や瓦器椀などの中世土器を検出している（『太井遺跡・観心寺遺跡』（〈河内長野市遺跡調査会報XXⅡ〉平成12年）。また、翌平成11年度も、河内長野市教育委員会が太井遺跡の調査（平成11年11月15日～12月20日）を引き続いて実施した。

平成19年度に実施した当該事業（府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」）に伴って実施した、太井遺跡確認調査と周辺地区における試掘調査の実施によって、太井遺跡の範囲は大きく拡大することとなった。

平成22年度は小深地区において、事業地への取り付け道路部分の発掘調査を実施し、二次堆積の遺物であるが、良好な縄文土器を検出することができた。

平成23年度は小深地区においては、事業によって削平を受ける部分について詳細に確認調査を実施、遺構が検出された地区において合計320㎡の発掘調査を実施した。さらに、太井地区にお

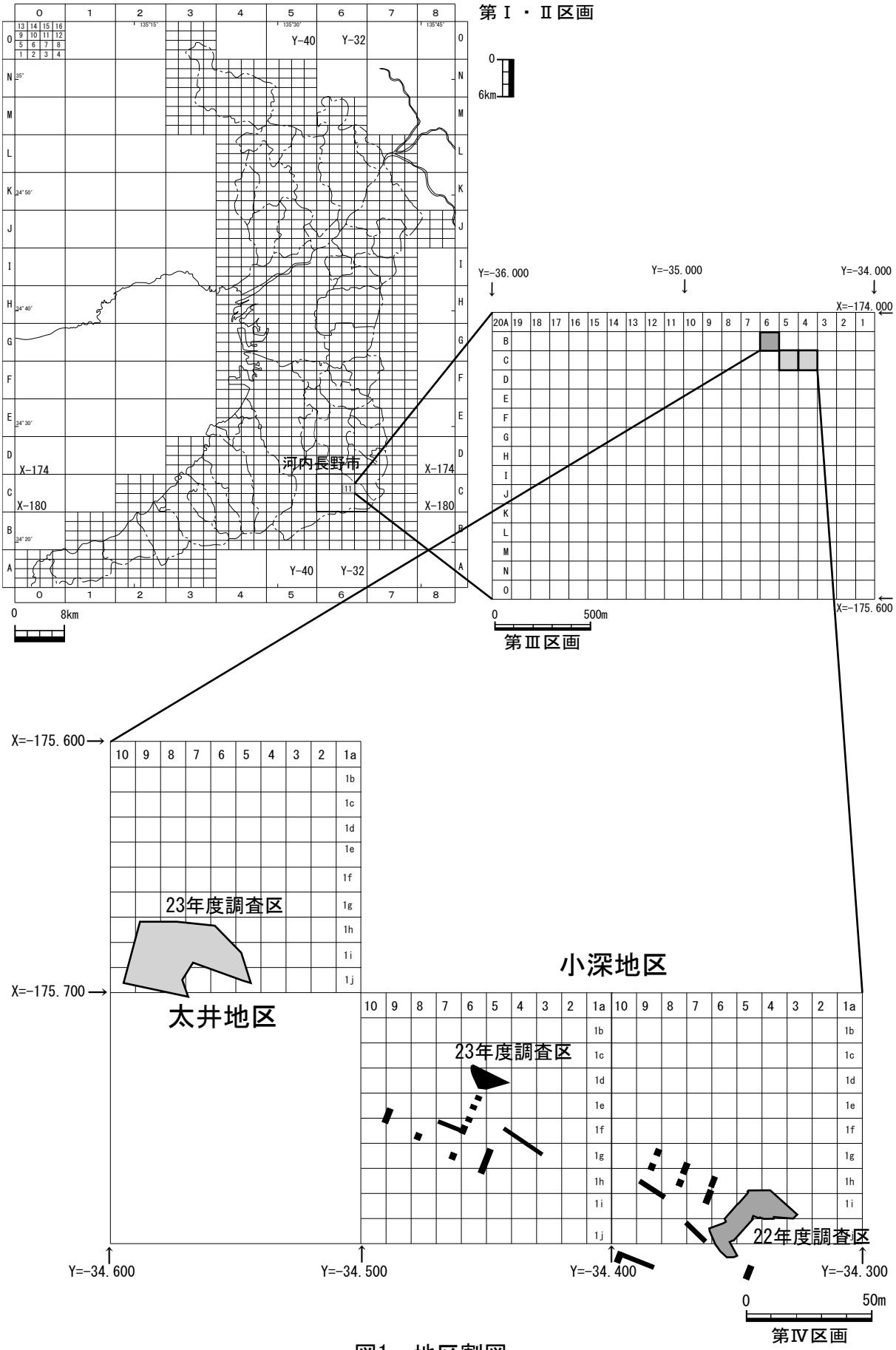

第Ⅰ・Ⅱ区画
河内長野市
Y-40
Y-32
X-174
X-180
0
8km
6km
Y=-36.000
Y=-35.000
Y=-34.000
X=-174.000
X=-175.600
0
500m
第Ⅲ区画
X=-175.600
X=-175.700
23年度調査区
太井地区
小深地区
23年度調査区
22年度調査区
Y=-34.600
Y=-34.500
Y=-34.400
Y=-34.300
0
50m
第Ⅳ区画

図1　地区割図

いて約834㎡の発掘調査を実施、中世前期を中心とする墓地にかかわる遺構を多数検出した。これらの発掘調査の成果について、平成24年に遺物調査を実施し、その成果を本書にまとめることとなった。

３節　調査方法

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行1／10000地形図を基準として４段階の区分を実施している（図１）。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０ ～ ８に区画する。太井遺跡は大阪府の東南隅に位置するＣ６区内にある。

第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500m、横2000mの範囲である。太井遺跡太井地区は15区に、小深地区は11区にあたる。

第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を１～20、横軸をＡ～Ｏに区分したものである。太井地区は15K・15L・16K区内に、小深地区は4C・5C区内にある。

第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をａ～ｊ、横軸を１ ～10に区分したものである。例えば、小深地区はC6－11－4C－5dなどと表すことができる。

小深地区で検出された遺構の図化は山間部に位置するため、航空写真測量が実施できず、1／20で手測量した。周辺の見通しが悪かったため、GPS測量による3級基準点(国土座標値=世界測地系　第Ⅵ系）から調査区周縁に4級基準点を設けて実施、水準は東京湾平均海水面（T.P.）を使用した。太井地区は航空写真測量による。

土層図・遺構図などは1/20で図化、太井地区の遺構番号は墓001・大土坑012など、遺構性格と番号を組み合わせて表記した。小深地区では水田面ごとに１区～ 20区の地区設定を行い、土坑1－1・溝4－1など、遺構性格と地区と番号の組み合わせで表記した。

第Ⅱ章　位置と環境

１節　河内長野市内に分布する中世遺跡

河内長野市は旧河内国の最南部に位置し、東は大和国、南は紀伊国、西は和泉国に接する。金剛葛城山系に発する天見川と石川は南北に流れ市内北部地区で合流し、石川として大和川に至る。市域は山地部を除くと、丘陵と両河川とその支流が形成した河岸段丘によって構成され、可耕地は多くない。しかし古くからの交通の要衝であり、とりわけ中世以降は、東高野街道沿いの地域として、遺跡数の推移からもできる。中世に入るとその数が急増し、これまで市内で発掘調査が実施された大部分の遺跡では、何らかの中世の遺構や遺物が検出されている。これは高野街道（京街道）の存在と金剛寺や観心寺という巨大な寺院の発展とが影響している。高野街道に沿って形成された集落遺跡や寺院跡では、輸入された陶磁器類が集中的に出土しており、当地域における活発な流通の様相を示している。

中世の集落遺跡では、三日市遺跡、高向遺跡、尾崎遺跡、上原北遺跡、向野遺跡、野作遺跡、市町遺跡、大日遺跡などで比較的大規模は発掘調査が実施され、多くの遺構と遺物が検出されている（図２）。

三日市遺跡と大日遺跡では、集落域と墓域がセットで確認されている。向野遺跡、野作遺跡では、集落内における生産活動の一部を示す遺構・遺物が確認されている。フイゴの羽口、鋳型の破片、鉄滓などが出土しており、これらの遺跡に鍛冶や鋳物の工房の存在が推定される。また上原北遺跡では、炭焼窯跡群とそれに伴う建物跡が検出されており、金剛寺との関わりも想定される。

河内長野の中世を代表する遺跡は、金剛寺と観心寺の二大寺院とそれに関わるものである。両寺は現在まで多くの堂塔を遺し、本尊をはじめ多くの文化財を現代に伝えている。

市域の南部に所在する現在の天野山金剛寺を中心に広がる天野山金剛寺遺跡では、多くの発掘調査の成果が蓄積されている。子院跡や墓地遺構、井戸、さらに地鎮のための土釜埋納遺構など多様な遺構が発見されている。遺物は13世紀以降増加し、大量に出土する瓦器や土師質土器などの日用雑器に加えて、備前焼、常滑焼、瀬戸美濃焼など遠隔地で生産された国産陶器と中国などから輸入された陶磁器類も多く出土しており、金剛寺をめぐるこの時期の活発な流通活動を垣間見ることができる。

また石川の支流である石見川の北岸に位置し太井遺跡と不可分な関係になる観心寺も、平安時代初期の如意輪観音坐像を本尊として、中世にさかのぼる多くの建物などが遺存している。観心寺とそれに隣接する寺元遺跡では、井戸や石垣など寺に関わる遺構、塔頭や観心寺寺辺領の領民の集落跡の一部が検出されている。また埋め立てられた谷地形からは平安から鎌倉時代の大量の遺物が出土しており、往時の観心寺の様子をうかがうことができる。

天見川上流に位置する千早口駅南遺跡からは、石組遺構、建物跡、溝などの遺構とともに、仏

具や大量の瓦が検出され、通常の集落とは大きく様相が異なる。出土した瓦には巴文の軒丸瓦のみならず複弁蓮華文軒丸瓦も含まれており、この遺跡は岩瀬旧薬師寺跡の遺構と推定されている。

南北朝内乱期、観心寺や金剛寺は南朝方の拠点として、南朝の天皇の行在所となった時期もある。この時期、この地域で畿内さらには日本の歴史が動かされていたのである。

石川と天見川の合流地点に所在する烏帽子形城跡は、南北朝期にも城郭として活用され可能性が指摘されているが、現在みることのできる郭跡などは戦国時代の遺構である。主郭からは瓦葺の建物跡などが検出されており、瀬戸美濃焼の天目茶碗をはじめ多くの遺物の出土をみた。烏帽子形城は南河内の南部を押える城として重要な意義をもった。また戦国時代末にこの城に入った伊地知文大夫はキリシタン領主として著名であり、烏帽子形城の周辺の集落に三〇〇人を越えるキリシタンがいたといわれる。

以上のように整理した河内長野市の中世の状況から、京都や堺をはじめ畿内の各地からの人と物と情報が、高野街道をはじめ河内長野に向かう古道によってこの地に集約されたことが理解できる。中世の河内長野はそのような歴史的環境をもつ。

河内長野市内に84件の国の史跡や国宝、重要文化財の所在が所在する。日本全国の地方自治体のなかでその数は14番目であるという。金剛寺や観心寺をはじめ市域に伝えられた多くの文化財は目を見張るものがある。このことは河内長野の豊かな歴史を象徴する。

２節　太井遺跡の歴史的環境

太井遺跡は、市内の東部、石見川の上流域に所在する。深い谷の底を流れる石見川が谷幅を広げる地点に位置する。現在は雛壇状に土地が造成され、法面に石垣を組んだ耕作地が造成されている。そのはじまりは中世にはさかのぼるが、現在のように一面に田畑が広がる景観はさほど古いものとは考えられない。林業、木炭生産や狩猟など山に依拠した生業を主とした地域と想定される。

この地域ではすでに縄文時代後期には人々が活動しており、付近には鎌倉時代をはじめにさかのぼる仏像などを所蔵している地区も存在している。下流にある観心寺の所領であったことと合わせて、中世以来、一見山深い地域ではなるが、人々の活発な活動をうかがうことができる。

今回の調査で検出された中世墓地は、土葬から火葬が主流となる画期の時期に造営されたものであり、この地で活動した人々が葬られたのである。

３節　太井地区周辺の現代墓地

今回太井地区の調査で発見された墓群は鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて営まれていたものだった。それぞれの墓は明瞭に棺の構造が分かるものは少なく、遺骨や副葬品が残されている

佐備川西岸遺跡
芹生谷遺跡
森屋西遺跡
森屋１・２号墳
寄手塚・身方塚
金山古墳
曼荼羅院跡
御旅所遺跡
獄山山頂遺跡
岸之本遺跡
矢場武遺跡
川野辺東城跡
龍泉寺城跡
川野辺遺跡
岸之本南遺跡
出合遺跡
獄山窯跡
龍泉東遺跡
誕生地遺跡
下赤坂城跡
浄心寺古墳
龍泉寺
佐備川Ａ・Ｂ地点遺跡
桐山遺跡
宮野原遺跡
獄山遺跡
金胎寺城跡
甘南備遺跡
二川原辺城跡
大廻遺跡
城阪遺跡
西明寺遺跡
一番のきり城跡
しょうぶ城跡
金峯神社遺跡
上赤坂城跡
枡形城跡
猫路山城跡
寺元遺跡
本宮城跡
後村上天皇陵
観心寺
阪の垣外遺跡
中津神社遺跡
坊領千軒遺跡
三昧城遺跡
中津原遺跡
鳩原東端遺跡
鳩原遺跡
川上神社遺跡
延命寺
鳩原西端遺跡
千早城跡
楠正儀墓
太井遺跡
千早口駅南遺跡
旗尾城跡
葛城第18経塚
0
1km

図２　周辺遺跡分布図

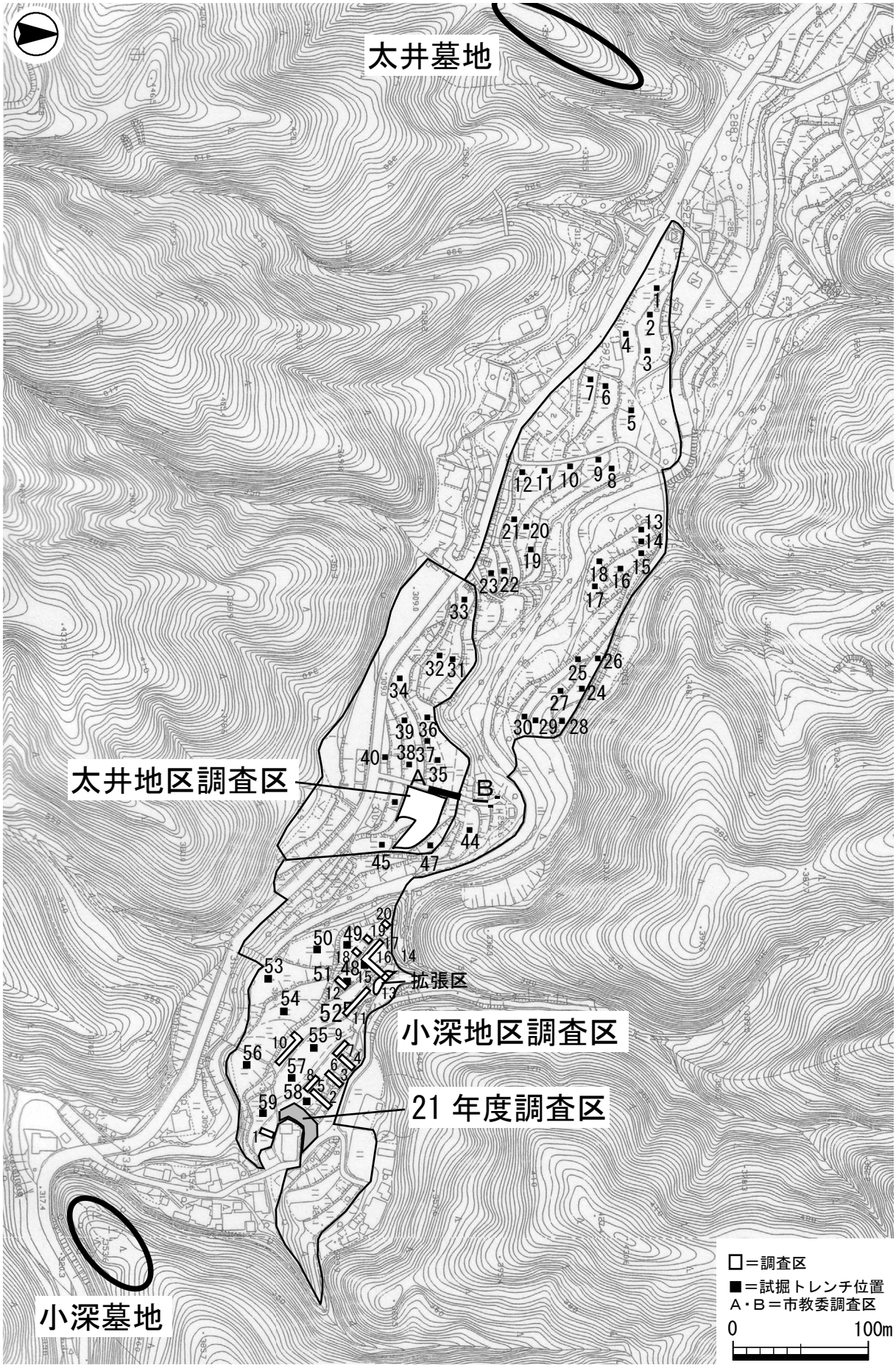


図３　試掘トレンチ配置図

ものもほとんどなかった。

そこで、太井地区と小深地区の村落墓地の現状を観察した。小深地区の墓地（以下、小深墓地）は今回調査地から南東400mの山中の尾根上にある。また、太井地区の墓地（以下、太井墓地）は今回調査地の西、約800mの山中の尾根上にある（図３）。

小深墓地は本来、南の尾根先端から小道が急斜面を駆け上がり、墓群のある平場へと続くものだが、その道はほとんど失われている。現在は北側に階段を伴う道が整備されている。墓群は一族ごとに群をなし、現在も自然石を標識に今回調査地の墓群と共通する形態で継続的に営まれていることが確認できる（挿写真１a）。

墓はすべて個人墓で、中心に長さ1.5mの角材を標柱として据え、故人の名を墨書して墓標とする。墓標の根元には自然石が無造作に集められている。その周囲は竹垣が方形に囲い、先端をとがらせる。「モガリ」と呼ばれる。前面に台石があり、その両側に花生け、台石上に供献の碗・皿・湯のみなどを置く（挿写真２）。碗・皿・湯のみは個人が生前に使用していたもので、台石には盆や箸も置かれ、饅頭や酒などが供えられる場合もある。

竹垣は数年、標柱は十年ほどで朽ち、整理される（挿写真２c・d）。そして、墓は地上に自然石が残るのみとなる。このような墓が一族単位で列をなして並ぶ。一族の墓群は標柱が朽ちても自然石の石組みを頼りに花が生けられ、祭祀は続けられる。

小深墓地の南側小道の脇には一石五輪塔、石仏、石製墓碑が林立する一角がある（挿写真１a）。石製墓標のみ整理されたものか、墓地入口に設けられた「参り墓」の可能性がある。一石五輪塔や

挿写真１　小深墓地（a）・太井墓地（b）

石仏は中世にさかのぼる紀年を記すものがあり、墓地の形成時期を物語る。つまり、今回調査地の墓群廃絶後、小深地区の村落墓地がこの地に営まれたようだ。そして、その墓の形態は現代にまで継承されていると考える。

そうすると、今回調査地の墓群もかつては木製標柱や竹垣や花生けなどの施設が伴ったと推測できる。これらが朽ち果て石組みのみ残され、やがて小深墓地に移転したのだろう。

太井墓地は木製の標柱を伴う個人墓が現在ではほとんど見られなかった（挿写真１b)。大半が石製の墓標に火葬骨を納める一族墓となっていた。ただし、一族墓のわきに一石五輪塔や石仏群が数か所、残されており、かつては小深墓地と同様の景観だったようだ。そして、石製墓標の一角には形態から南北朝時代にさかのぼると思われる五輪塔も残されており、この墓地も今回調査区の墓地が廃絶後に移転した可能性がある。

挿写真２　小深墓地に一列に並んだ墓群
a 一列に並んだ墓群
b 竹垣と標柱がある段階・竹垣の朽ちた段階
c 標柱も朽ちて標石のみを残す段階
※それぞれには墓前の台石に食器などが添えられる。

第Ⅲ章　小深地区の調査（集落域の調査）

１節　調査区と基本層序

小深地区は太井遺跡の中でももっとも上流の標高約380mに位置し、石見川北側斜面の棚田にあたる。

ほ場整備事業にかかわる調査対象地域は広域におよび､小区画の水田によって区切られている。現地調査は20か所のトレンチを設定し、遺構・遺物が顕著にみられる部分を拡張し、遺跡の広がりを解明することとした。各調査区は幅２ｍとし、長さが25mの10区、20mの11区・17区、10mの５区・８区・９区・12区、５ｍの１区～ ４区・６区・７区・13区・20区、３ｍの14区～16区・18区・19区である（図４・図版１ ～ ３）。

このうち顕著な遺構･遺物が確認されたのは13区のみで、13区はその平坦面すべてを拡張した。

調査区の周辺は、試掘調査で耕土（水田耕土）と遺物包含層（水田床土）に覆われた地山が確認されている。ただし、地山面の形成時期は定かでなく、山塊斜面の崩落や地すべりによって地山層が移動し、その深層に本来の古代・中世の地表面が埋没している可能性もある。調査は水田耕土を機械掘削で除去し、遺物包含層を人力掘削して遺構の検出に努めた。

調査地周辺はひな壇造成された小規模な棚田がひろがり、各水田面の間の斜面は人頭大の自然礫による石垣で土留めされていた。石垣の設置時期は明瞭でなく、近世か近代とおもわれる。石垣は形状などを調査するため、覆土を掘削して露出させたが、石垣撤去は遺構面の崩落が予想されるため、実施しなかった。

基本層序は、水田耕土が黒褐土、遺物包含層である水田床土が灰褐土など、地山が礫混じりの茶褐土である。各区とも水田耕土は5YR2/1黒褐色で、地山は10YR7/8黄橙色に対応する。遺物包含層である水田床土は10YR6/1・10YR4/1などの褐灰色である。

地山はしまりが悪く、水分を多く含む。握りこぶし大から人頭大以上の角礫を多数包含する。角礫は風化した花崗岩が大半である。花崗岩は表面が剥離、結晶の崩壊したものが目立つ。洪積層によく見られる流水作用で角が丸まった礫はほとんどない。これらの角礫は水田開発の際に集積され、石垣として積み上げられるなど、再利用されている。したがって、本来の地山面は水田の拡張時に削られ、旧地形も大きく改変、地山深層の角礫まで掘り出されたようだ。

１区は22年度調査区の南に位置し、北側は平坦地となって現在民家となっている。この調査区では遺構は確認できなかったが、南に急激に降る落ち込みの肩に南北朝時代の土師質土器皿･甕、瓦質土器碗･羽釜などがまとまって発見された（図７　４ ～ 15･26 ～ 38･49･50　図版15）。また、10区も１区と同様に、南に急激に降る落ち込みの肩から、南北朝時代の瓦質土器羽釜・碗・皿などがまとまって発見された（図７　10・46・47・51・図版15）。

２ ～ ９区は22年度調査区の西に隣接し、22年度調査区で確認された縄紋時代の遺構・遺物の

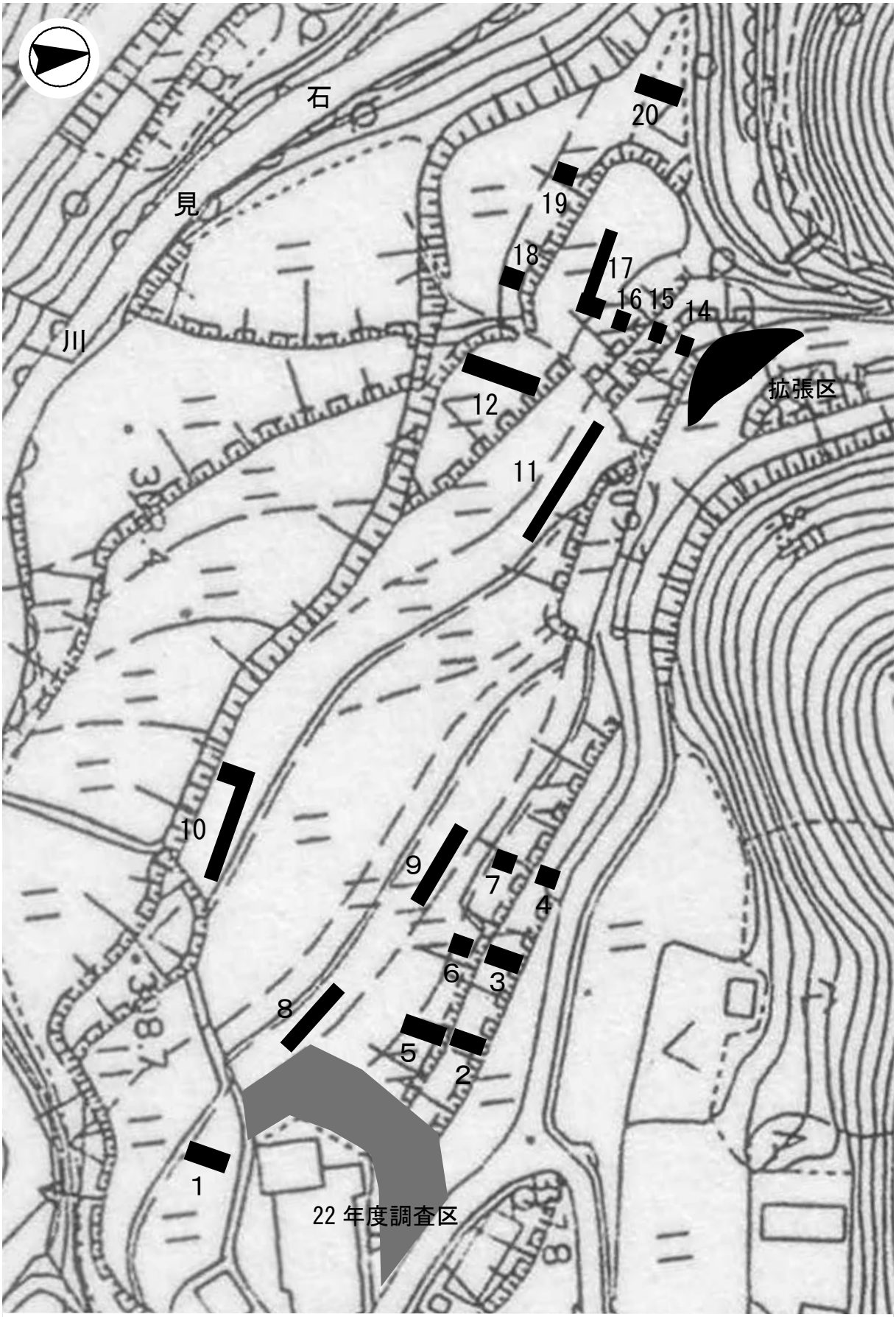


図４　小深地区調査区位置図

ひろがりを想定したが、発見された縄紋土器は二点のみだった（図６　１・２・図版15)。また、中世の遺構も確認されず、遺物もほとんどなかった。

11～20区は調査地の西側に位置する。もっとも高所にあたる13区を除き、遺構は見られず、遺物もほとんどなかった。

２節　拡張区の調査

13区は100㎡程の平坦面の中央に設定された２×５ｍの調査区で、全面に土坑や小穴が確認できたので、平坦面全面を掘り拡げて、遺構の実態を確認した。拡張区と呼ぶ（図５・図版４)。

拡張区は表面を覆う深さ約0.15mの水田耕土を機械掘削で除去し、地山面まで約0.3m程度堆積した水田床土を人力掘削して遺構・遺物を調査した。水田床土は10YR6/1などのにぶい褐灰色土でところどころに炭化物がみられた。

遺構面の地山は10YR7/8の黄橙色粘質土で、北側はもろい岩盤層となってほぼ直立する。遺構面は平坦面のほぼ全面に広がることが分かり、岩盤層を削って平坦面を形成した時期は遺構の形成時期に一致し、南北朝時代であることが分かった。

発見された遺構には建物跡、土坑、溝がある。

掘立柱建物13－１は長辺7.4m×短辺2.4mをはかる二間×一間の掘立柱建物で、平坦面の北寄りにみつかった。柱穴は柱痕跡がなく、すべて抜き取られたようで、不定形な穴となっている。地形的に、これ以上北側や西側に拡大する余地はない。間仕切りがあったのか、中央に小穴が列をなす部分がある。また、建物の東南は約２m四方の土坑13－１がある。柱の抜き取りには炭化物が少量含まれ、建物は火災によって廃絶した可能性もある。

土坑13－１は建物内部にある長辺2.5m・短辺1.5m・深さ0.15mをはかる方形の浅い土坑である。少量の瓦器碗・土師質土器皿が出土した（図８　59・72・81・85・図版16)。

土坑13－２は建物の南に接して発見された長辺2.2m・短辺1.8m・深さ0.1mをはかる方形の浅い土坑である。少量の瓦器碗・土師質土器皿と東播系すり鉢の破片が出土した。

土坑13－３は調査区中央南よりで発見された長辺3.1m・短辺2.0m以上・深さ0.2mをはかる方形の浅い土坑である。西側は調査区外へと続く。少量の瓦器碗・土師質土器皿破片が出土した。

穴は柱穴を除き、60基以上確認された。そのうち、遺物を含むものは穴13－１・13－４・13－７・13－17・13－19・13－20・13－64・13－66のみである。いずれも瓦器碗・土師質土器などの小片で混入と思われる。穴13－66は長辺1.2m、短辺1.2m以上、深さ0.1mを測り、握りこぶし大の礫がいくつか含まれる。西側は斜面となり崩落していた。

溝はいずれも、鋤溝の痕跡とおもわれる。形成時期は分からない。

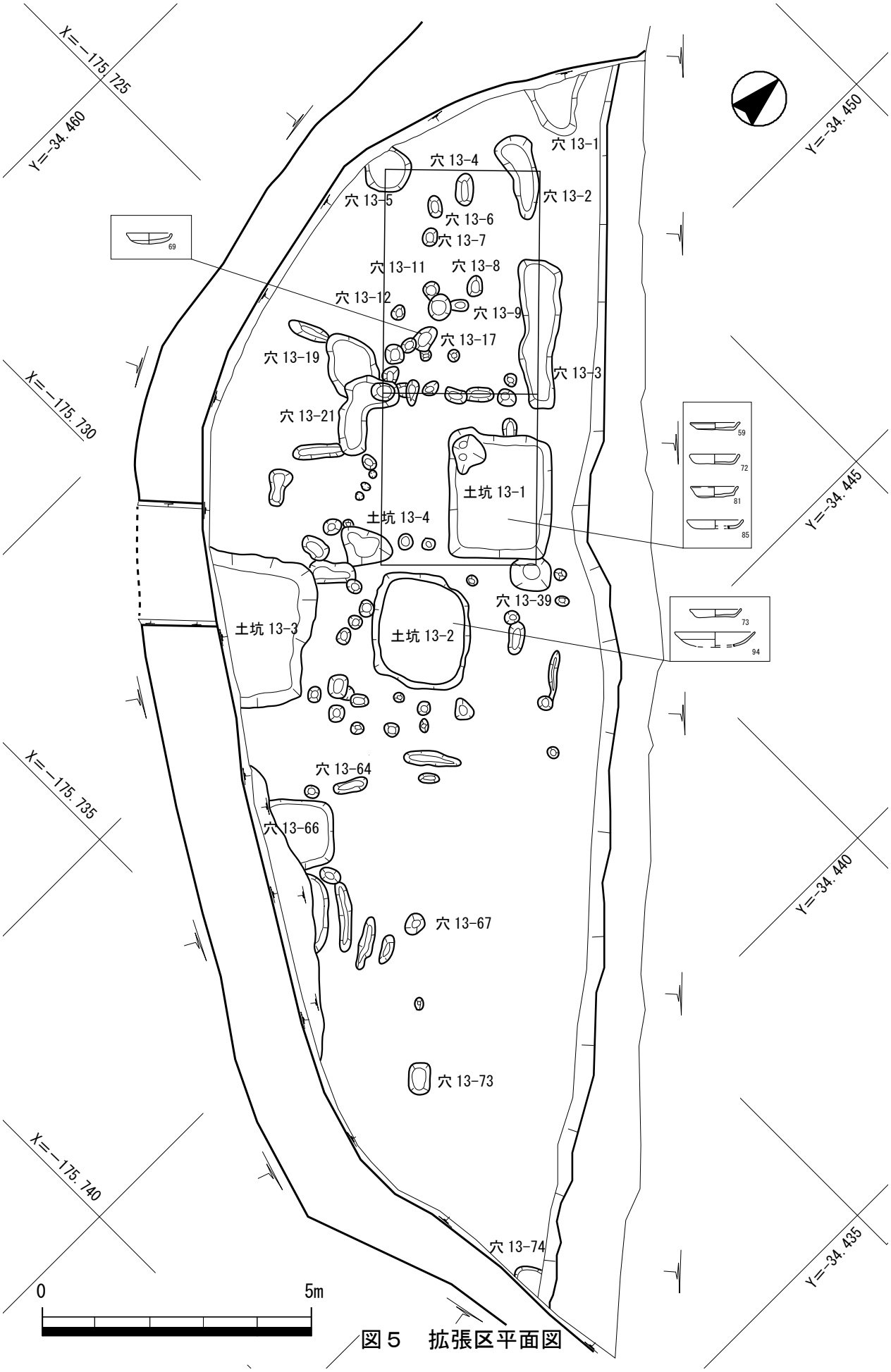

X=−175.725
Y=−34.460
Y=−34.450
X=−175.730
Y=−34.445
X=−175.735
Y=−34.440
X=−175.740
Y=−34.435
穴 13-1
穴 13-2
穴 13-3
穴 13-4
穴 13-5
穴 13-6
穴 13-7
穴 13-8
穴 13-9
穴 13-11
穴 13-12
穴 13-17
穴 13-19
穴 13-21
穴 13-39
穴 13-64
穴 13-66
穴 13-67
穴 13-73
穴 13-74
土坑 13-1
土坑 13-2
土坑 13-3
土坑 13-4
69
59
72
81
85
73
94
0
5m

図５　拡張区平面図

３節　出土遺物

発見された遺物には土器・石器がある。土器は縄紋土器２点、弥生土器１点、近世・近代の陶磁器数点を除いてすべて中世の土器である。しかも、瓦器碗は高台がなく、外面の暗紋調整もないものばかりで、最終段階の特徴をもつものに限られる。これらの土器より南北朝時代の一時期の生活痕跡を示すようだ。石器は二上山のサヌカイト剥片で小片ばかりである。その他、龍泉窯系の青磁の小片が１点確認された。

中世の土器には瓦質土器と土師質土器の碗・皿といった食器と、甕などの貯蔵具、羽釜やすり鉢などの貯蔵具がある（図６ ～ ８　図版15・16）。

土師質土器には皿（８ ～ 25･57 ～ 86）、甕（50･51）、がある。皿は口径6.9 ～ 11.0cm、器高1.1 ～ 1.5cmを測る。概して小型品が多く、明赤褐色のものと乳灰色のものがある。

甕は口縁部の小片で外面にススが付着する（50）。外面をヨコナデし、口縁部を強く屈曲させ、端部を上方につまみあげる。

瓦質土器には碗（26 ～ 45･87 ～ 98）､羽釜（46 ～ 49･99 ～ 101･107）､すり鉢（52･103）がある。瓦器碗は口径12cm前後を測る。いずれも小片で灰白色､炭素の付着が少ない。外面の暗紋はなく、高台が省略された末期のものばかりである。

すり鉢は焼きが甘く灰白色、口縁部の小片である。外面は頸部との境に突帯を貼り付け口縁端部にも突帯を貼り付ける（52・103）。

東播系すり鉢も口縁部の小片で口径は不詳である（53 ～ 56・104 ～ 106）。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。底部は平底で内面はナデ仕上げ、外面は粘土紐の痕跡が明瞭に残る。

その他、中国製磁器として青磁小皿（102）がある。口縁部小片で、灰白色の胎土に淡青緑色の釉が厚くかかる。浙江省龍泉窯産と考える。施紋はなく、器壁は薄い。口縁端部を丸く仕上げる。口径12.4cm程度に復元される。

１区の整地土中から縄紋土器（１・２）と弥生土器の底部小片が発見されている（３）。縄紋土器は外面に沈線と縄紋がある後期前～中葉の深鉢胴部などがあり、弥生土器は暗赤褐色で内面は丁寧にナデられ、外面は指おさえする。伝統的Ｖ様式のタタキ甕底部小片と思われる。
近世の陶磁器には肥前磁器（４・６）と肥前陶器（５）がある。肥前磁器底部外面に明の「成化年製」銘を著しく紋様化した図像がある（６）。

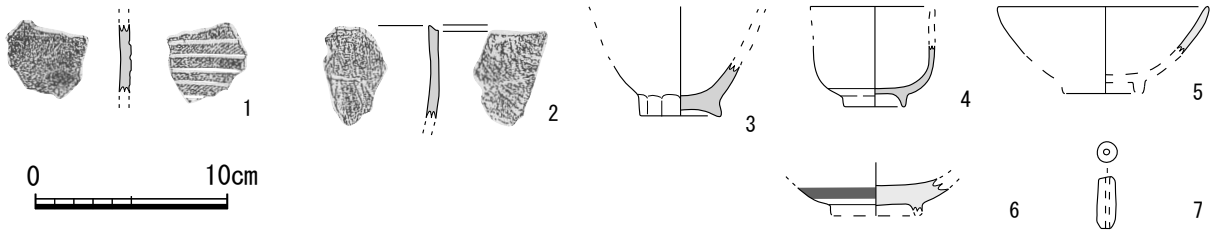


図６　小深地区出土土器１

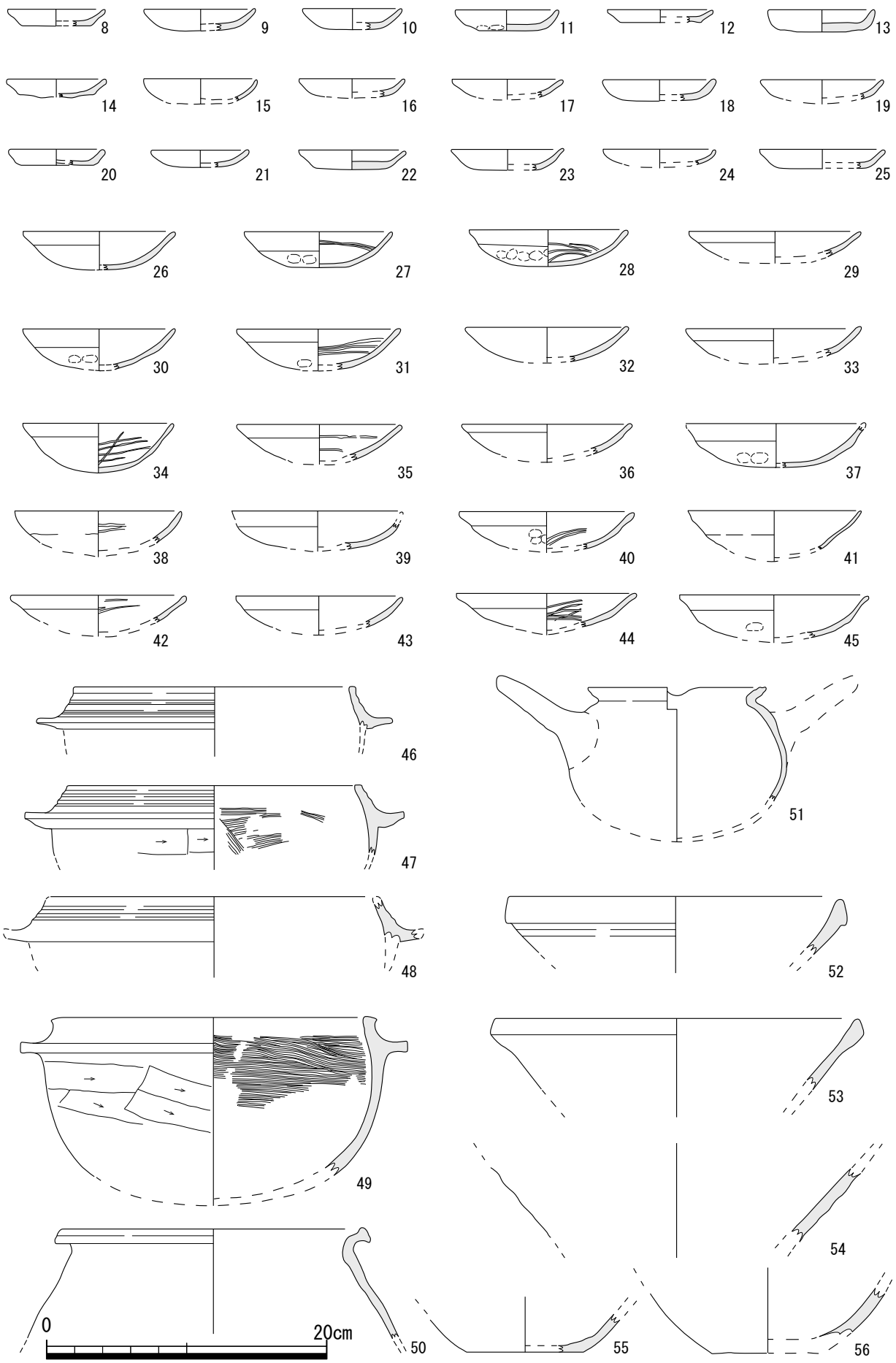


図 7　小深地区出土土器 2

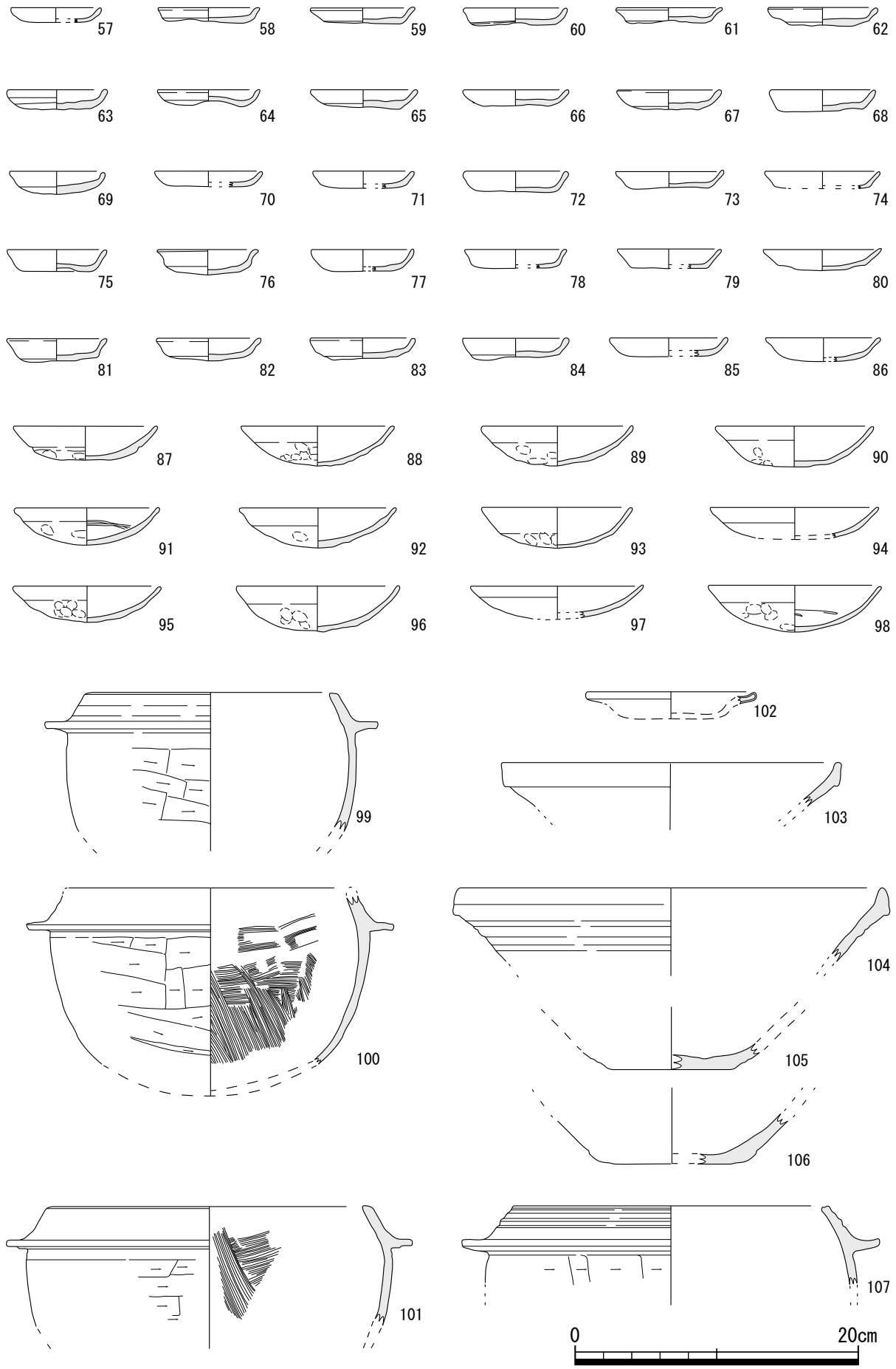


図 8　小深地区出土土器 3（拡張区出土土器）

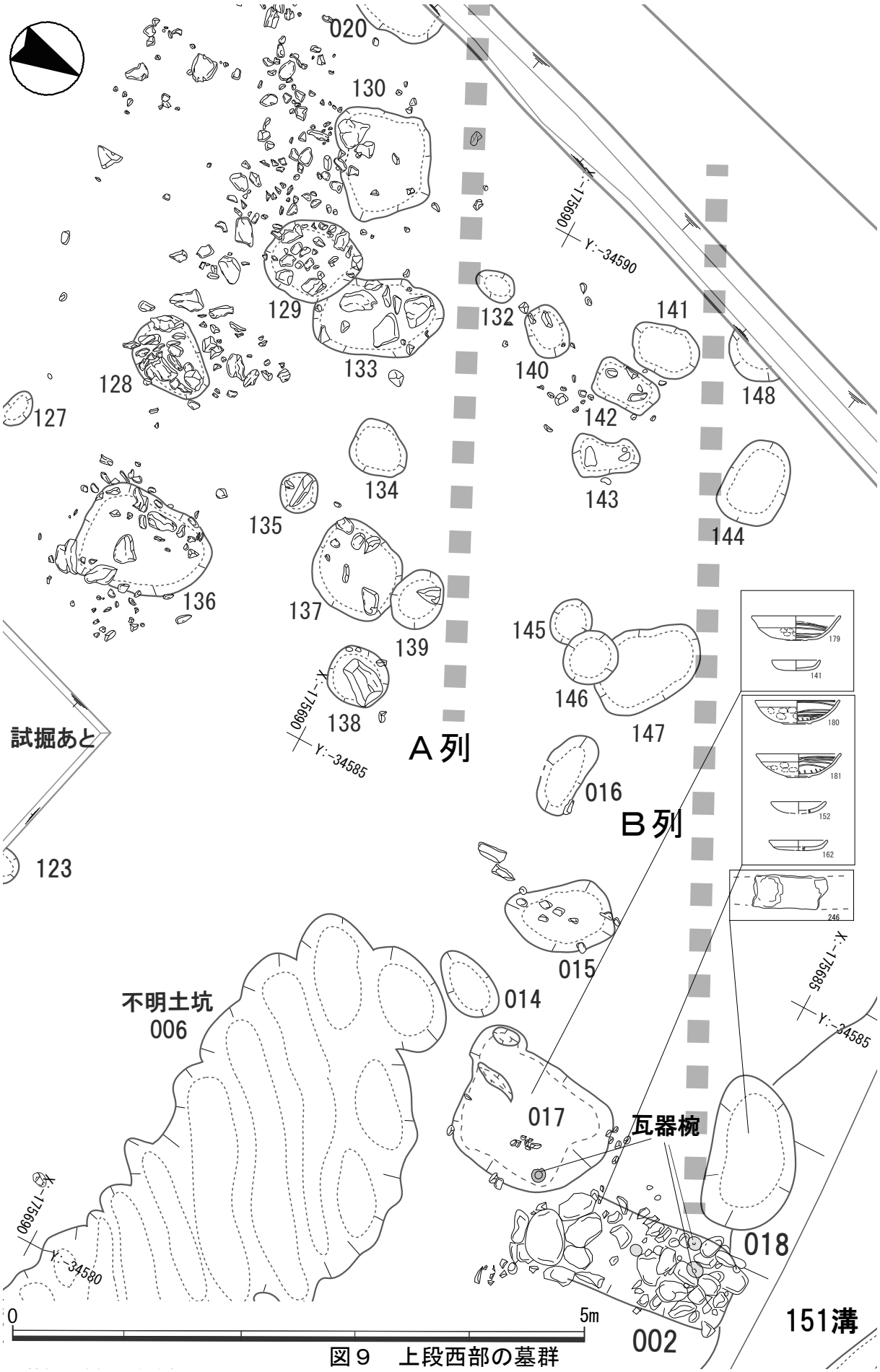

020
130
129
132
141
133
140
148
128
142
127
143
134
144
135
136
137
139
145
146
147
138
試掘あと
A列
016
B列
123
015
014
不明土坑
006
017
瓦器椀
018
002
151溝
0
5m

図９　上段西部の墓群

第Ⅳ章　太井地区の調査（中世墓の調査）

１節　調査区と基本層序

太井地区は石見川南岸、太井遺跡の中央に位置し、石見川を北に臨む南側斜面の棚田にあたる。調査区は、試掘調査で耕土（水田耕土）と遺物包含層（水田床土）に覆われた地山が確認されている。北側低地部の地山は岩盤となり、南側も概して地山に礫が多く含まれ、耕作や居住には不向きである。

調査は水田耕土を機械掘削で除去し、遺物包含層を人力掘削して遺構の検出に努めた。

調査地周辺はひな壇造成された小規模な棚田がひろがり、各水田面の間の斜面は人頭大の自然礫による石垣で土留めされていた。これらをすべて除去して調査した（図10・図版５）。

基本層序は、水田耕土が黒褐土、遺物包含層である水田床土が灰褐土など、地山が礫混じりの茶褐土である。各区とも水田耕土は5YR2/1黒褐色で、地山は10YR7/8黄橙色に対応する。遺物包含層である水田床土は10YR6/1・10YR4/1などの褐灰色である。

２節　中世墓

調査区は南から北に降る斜面に位置し、中世墓がほぼ全面から発見された。遺構は円形土壙を基本とし、標石群をともなうものと、伴わないものがある。墓は20基前後で列状に群をなす。重なりはほとんどなく、埋められた後もその位置は意識されていたと考える。墓壙の埋め土は黒褐色の粘土・砂土を基本とし、焼土・骨片・釘片・土器などを伴うものがある。明瞭に盛り土を伴う墳丘は確認できなかった。土器の形式より鎌倉時代後期から南北朝時代に及び、中世墓と判断した。それぞれの墓壙は墓とするには根拠が薄弱なものもある。ただし、その前の時代の遺物は少量の縄紋土器・石器がみられるのみで、墓群の廃絶後は水田化するため、墓に関連しない土坑や柱穴などが重複する様相ではない。

地山面は上段・中段・下段の三段の雛段になっている。中段は削平されて墓壙が少なく、中世墓の廃絶後の水田化に伴い、削平を受けたのかもしれない。しかし、もともと道状遺構だったものが拡張された可能性もある。墓壙群はおおよそ列をなして並び、上段のＡ～Ｃ列、下段のＤ～Ｈ列と命名して報告する。中段の墓壙は西部、中部、東部にあり、地区ごとに報告する。墓壙形態・墓壙計測値・埋土・出土遺物などは表１・２に示す（P38・P39）。

Ａ列は調査区のもっとも高所、上段西部に位置し、墓020・墓128～墓139からなる（図９・図版７）。列はほぼ東西に並び、西は調査区外へと続く。浅い円形土壙を基本とし、周辺に小礫が散在する。墓138は人頭大の礫が土壙内に落ち込み、後世に水田化される以前は、大きな礫が各墓壙の上面を覆っていた可能性がある。墓壙は深さ0.1m以下で、上面の削平が著しいと考える。

Ｂ列は上段西部、Ａ列の北側に並行して列をなす墓群で、墓002・墓014～墓018・墓140～墓148からなる（図９・図版７）。列はほぼ東西に並び、西は調査区外へと続く。浅い円形土壙を基本とし、周辺に小礫が散在する。墓002は人頭大の礫で覆われ、焼土と焼けた瓦器碗･骨片が伴った（図版14）。墓002と墓017は、それぞれ瓦器碗と土師質土器皿が伴った。鎌倉後期のものである（図18・図版21）。

Ｃ列は上段東部、Ａ列・Ｂ列の東側に直行して列をなす墓群で、墓022～墓030・墓117～墓122からなる（図11・図版８）。列はほぼ南北に並び、南は調査区外へと続く。浅いだ円形土壙を基本とし、周辺に小礫が散在する。墓030は柱穴状の深い穴である。木製標柱の据え穴と考える。

Ｄ列は下段西部に位置する墓群で、墓061～墓090からなる（図12・図版９）。列はほぼ東西に並び、西側は調査区外へと続く。浅いだ円形土壙を基本とし、人頭大の礫を多く伴う。墓066は墓の南北に台石状の礫に挟まれ、鎌倉時代後期の瓦器碗が伴った。本遺構群の初期に形成されたことが分かる。墓070・墓074・墓075・墓081・墓085・墓087・墓088の上面に平たい石が伴う。食器などを供えるときの台石と考える。

Ｅ列は下段中央に位置する墓群で、墓003～墓010・墓031～墓038・墓091～墓099からなる。列はほぼ東西に並ぶ（図13・図版10）。浅いだ円形土壙を基本とし、握り拳大の礫を多く伴う。墓004・墓007・墓008・墓009・墓010・墓031には土師質土器皿などが伴った。墓003・墓032・墓033は掘底が岩盤で墓壙の縁周りは礫で整える。墓009には大量の焼土が伴った（図版25下）。墓005・墓009・墓010・墓033の上面に平たい石が伴う。食器などを供えるときの台石と考える。

墓群上面より幼児棺または火葬骨蔵器と考える土師質土器甕とその蓋の高杯皿部がバラバラになって発見されている（図22　224・225・図版17）。

Ｆ列は下段南部に位置する墓群で、墓039～墓049・墓100・墓101からなる（図14・図版11）。列はほぼ東西に並ぶ。浅い円形土壙を基本とし、礫はほとんど伴わない。墓100は浅く、縁周りを小礫で形成する。

Ｇ列は下段東部に位置する墓群で、南は調査区外へと続く。墓051～墓056・墓106・墓107からなる（図15・図版12）。列はほぼ東南から西北に並ぶ。浅い不定形土壙を基本とし、礫はほとんど伴わない。墓107は岩盤を掘りこんで方形の墓壙をつくりだす。

Ｈ列は下段東部、Ｇ列の東に位置する墓群で、墓057～墓058・墓060からなる（図15・図版12）。列はほぼ南北に並ぶ。浅い不定形土壙を基本とし､北側は礫を伴う。岩盤の窪地に形成され、底部は岩盤となる。

中段西部には墓019がある（図16・図版13）。方形の浅い土壙で握り拳大の礫を多く伴い、土師質土器皿・瓦器碗が発見された。墓壙の西側に人頭大の平たい石があり、台石だろう。

中段中部には墓067・墓068・墓112・墓011・墓149がある。ほぼ南北に並ぶ。周辺には礫が多く、墓112の北側と墓149の南側には巨大な礫があり、見通せない（図17）。

墓149は室町時代後期の湊焼大甕を棺とし、蓋石は花崗岩の石臼とする。墓壙には大甕を直立

Y:-34595
Y:-34590
Y:-34585
Y:-34580
Y:-34575
Y:-34570
Y:-34565
Y:-34560
Y:-34555
Y:-34550
X:-175670
X:-175675
X:-175680
X:-175685
X:-175690
X:-175695
X:-175700
市教育委員会調査区
磁北
座標北
真北
6° 50′
0° 12′ 46″
瓦器椀
瓦器皿
土師皿
151溝
152溝
石臼・湊焼甕
瓦
列石
大土坑046
不明土坑006
試掘あと
大土坑012
焼け跡
岩盤
0
10m

図10　太井地区平面図

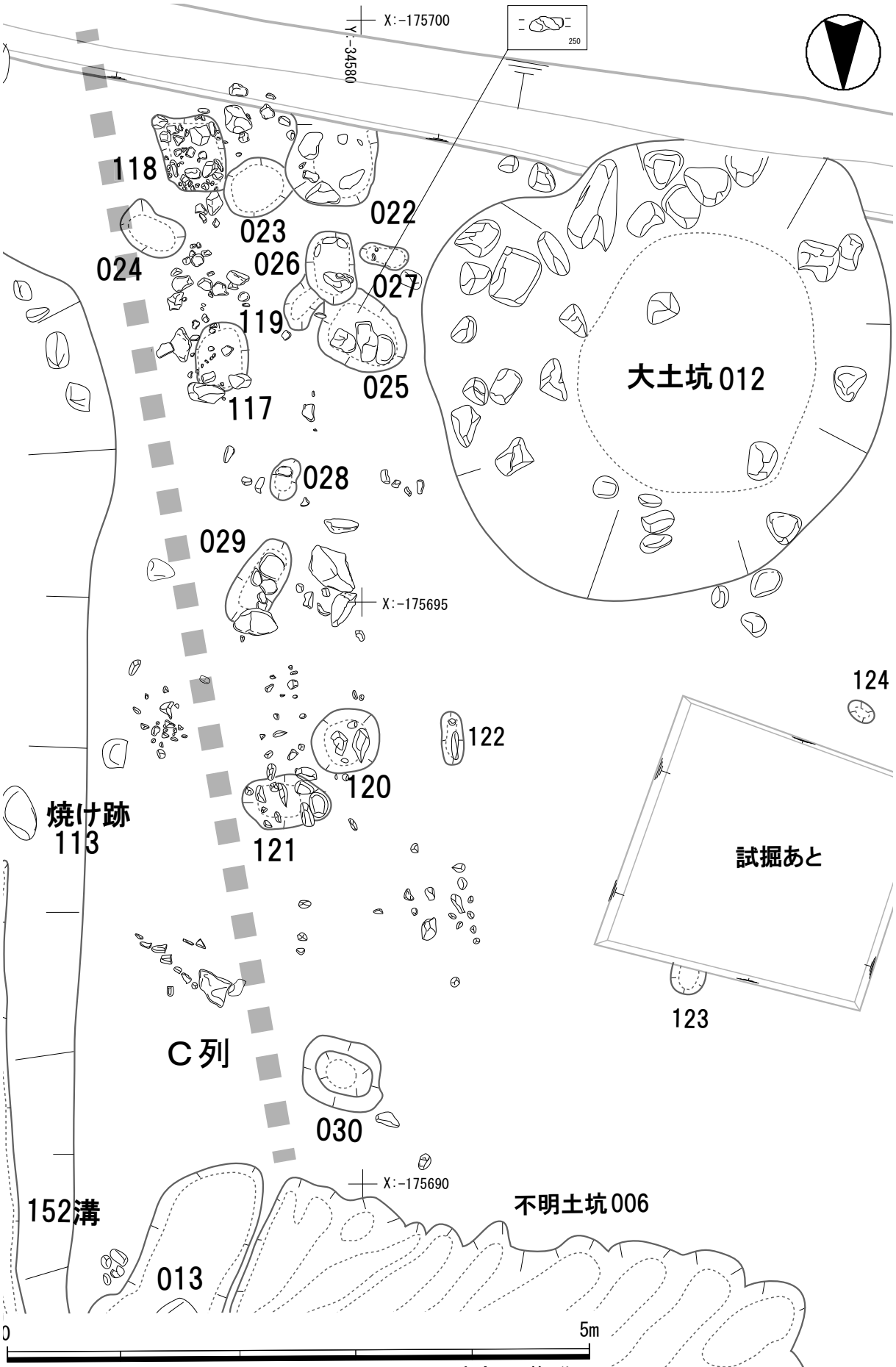

X:-175700
Y:-34580
250
118
022
023
024
026
027
119
025
117
大土坑012
028
029
X:-175695
124
122
120
焼け跡
113
121
試掘あと
123
C列
030
X:-175690
152溝
不明土坑006
013
0
5m

図11　上段東部の墓群

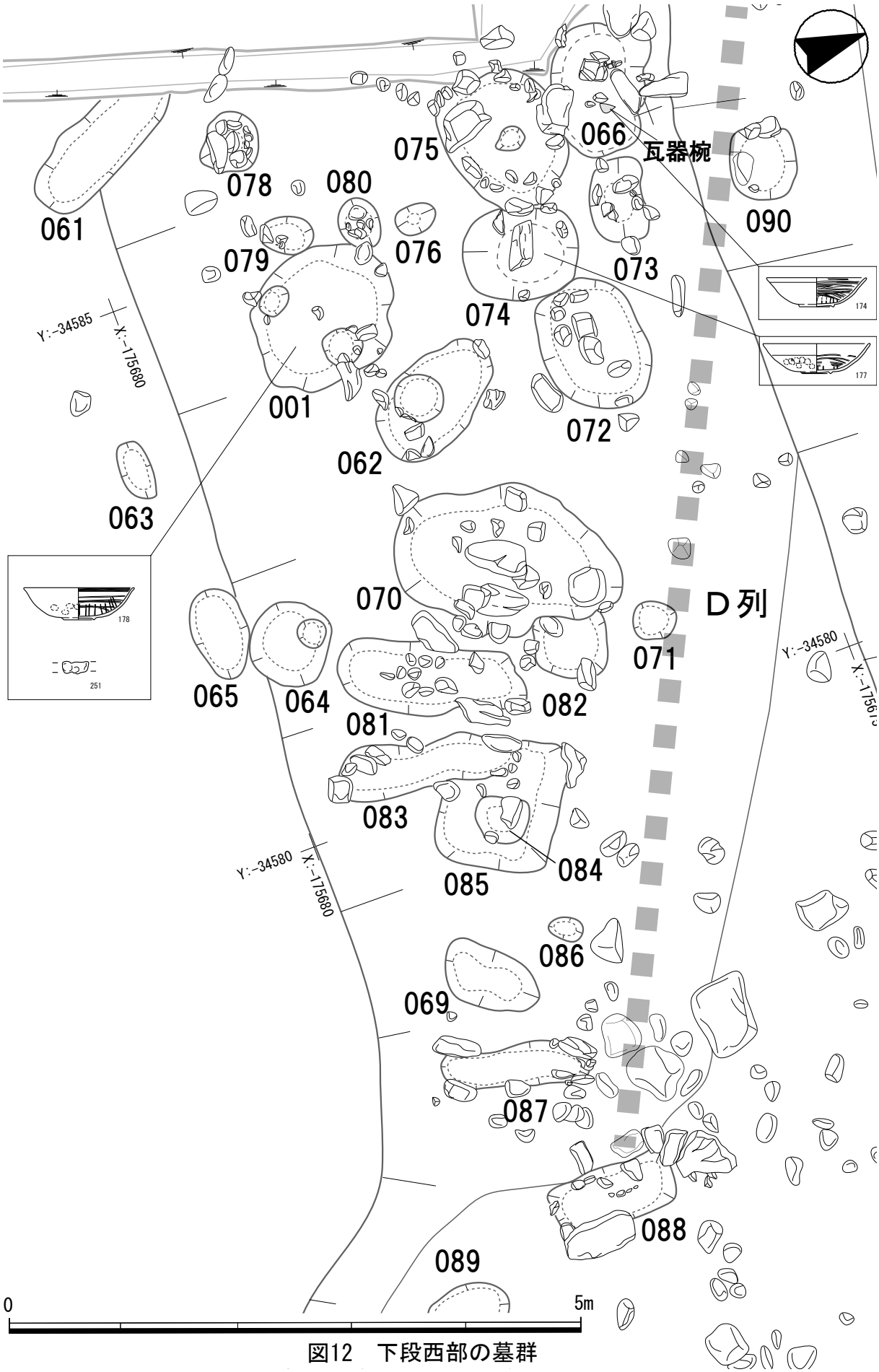

061
078
080
075
066
瓦器椀
090
079
076
073
074
174
177
Y:-34585
X:-175680
001
072
062
063
178
251
070
D列
071
065
064
081
082
Y:-34580
X:-175680
083
084
085
086
069
087
088
089
0
5m

図12　下段西部の墓群

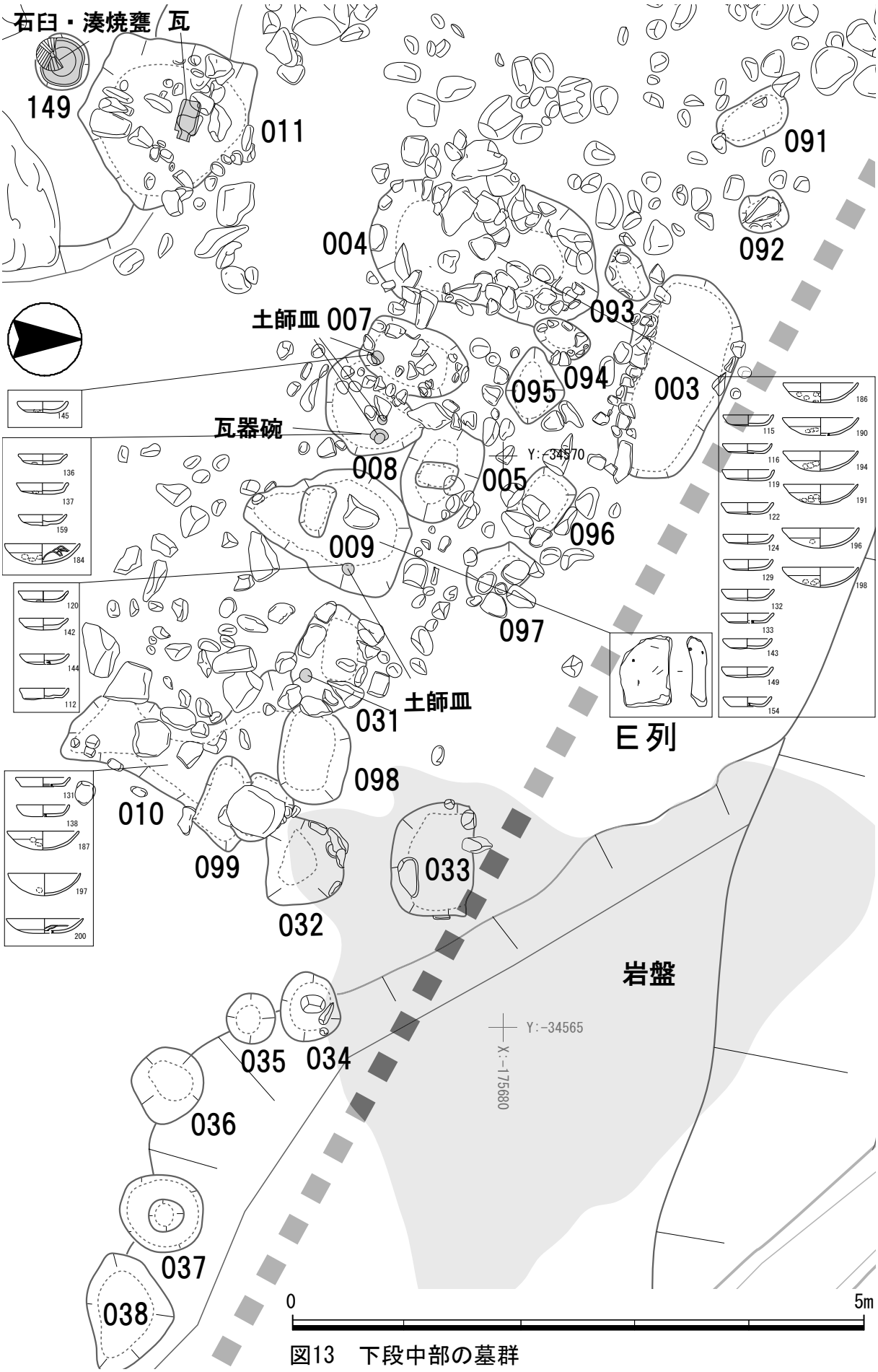

石臼・湊焼甕 瓦
149
011
091
092
004
093
土師皿 007
095
094
003
瓦器碗
008
005
Y:-34570
009
096
097
031
土師皿
E列
098
010
099
033
032
岩盤
Y:-34565
X:-175680
035
034
036
037
038
0
5m

図13　下段中部の墓群

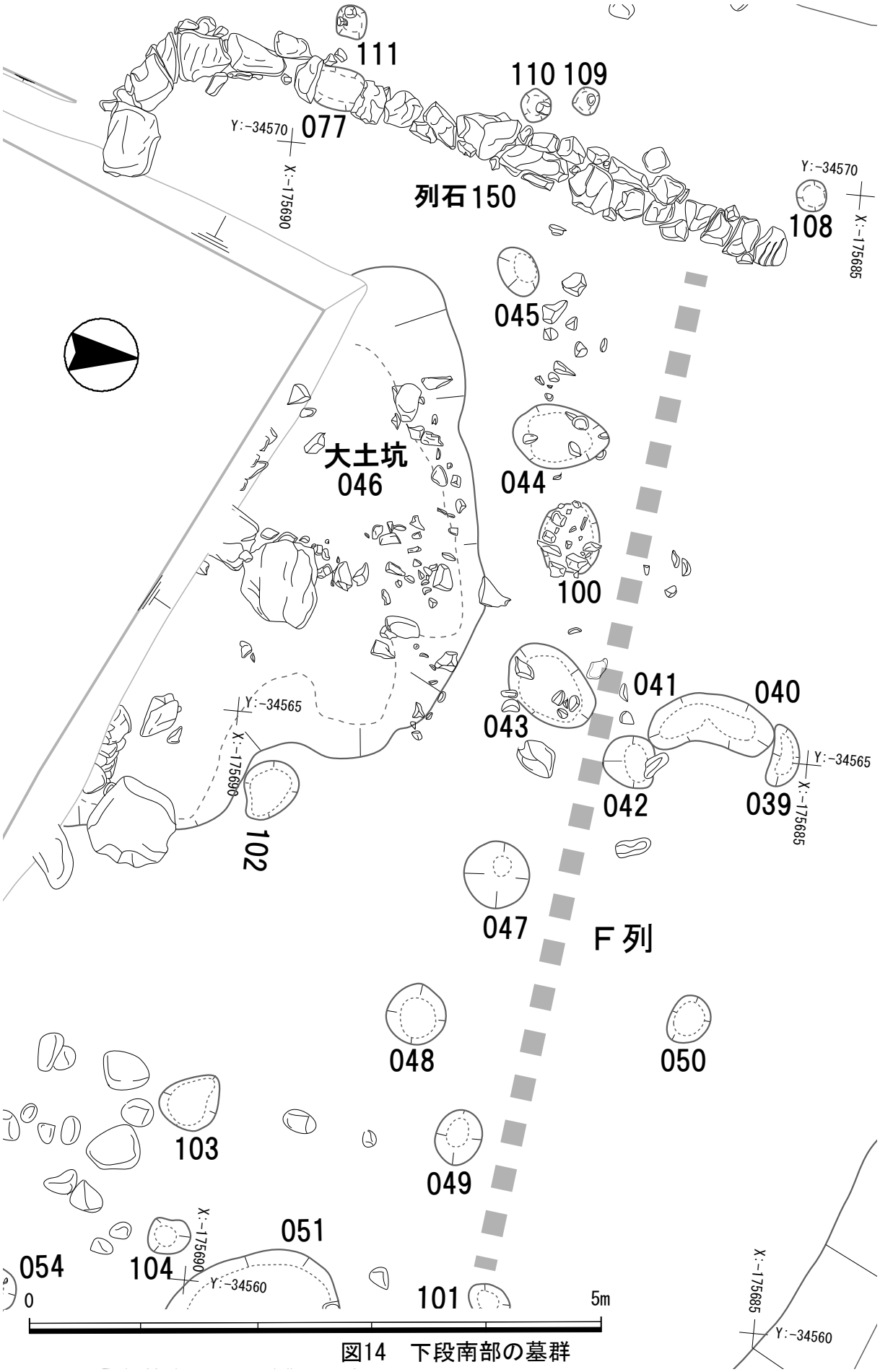

111
110 109
Y:-34570
077
X:-175690
列石150
Y:-34570
108
X:-175685
045
大土坑
046
044
100
041
040
043
Y:-34565
X:-175690
Y:-34565
042
039
X:-175685
102
047
F列
048
050
103
049
X:-175690
051
054
104
Y:-34560
101
0
5m
X:-175685
Y:-34560

図14　下段南部の墓群

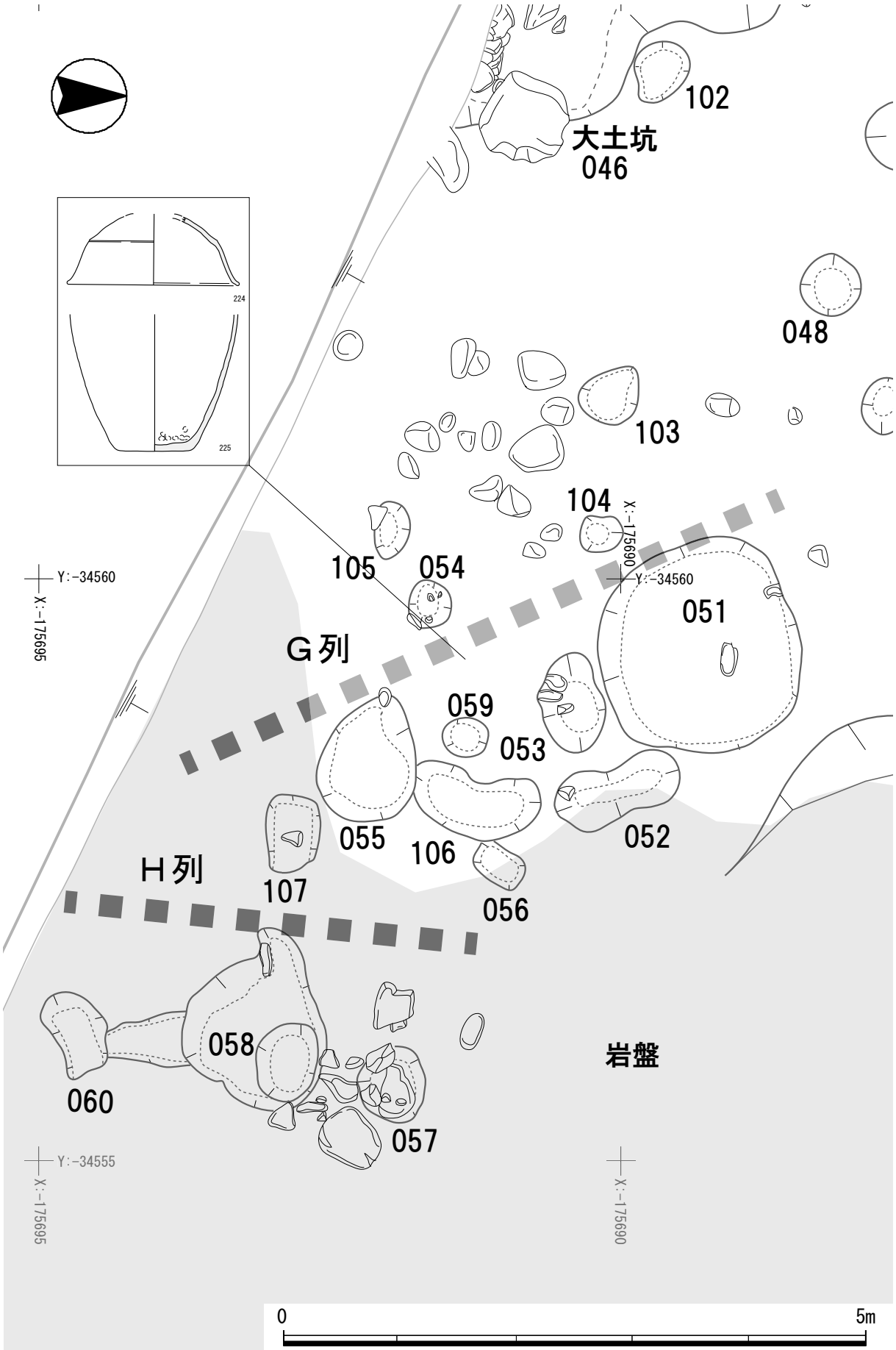

102
大土坑
046
048
224
225
103
104
X:-175690
105
054
Y:-34560
X:-175695
Y:-34560
051
G列
059
053
055
106
052
H列
107
056
058
岩盤
060
057
Y:-34555
X:-175695
X:-175690
0
5m

図15　下段東部の墓群

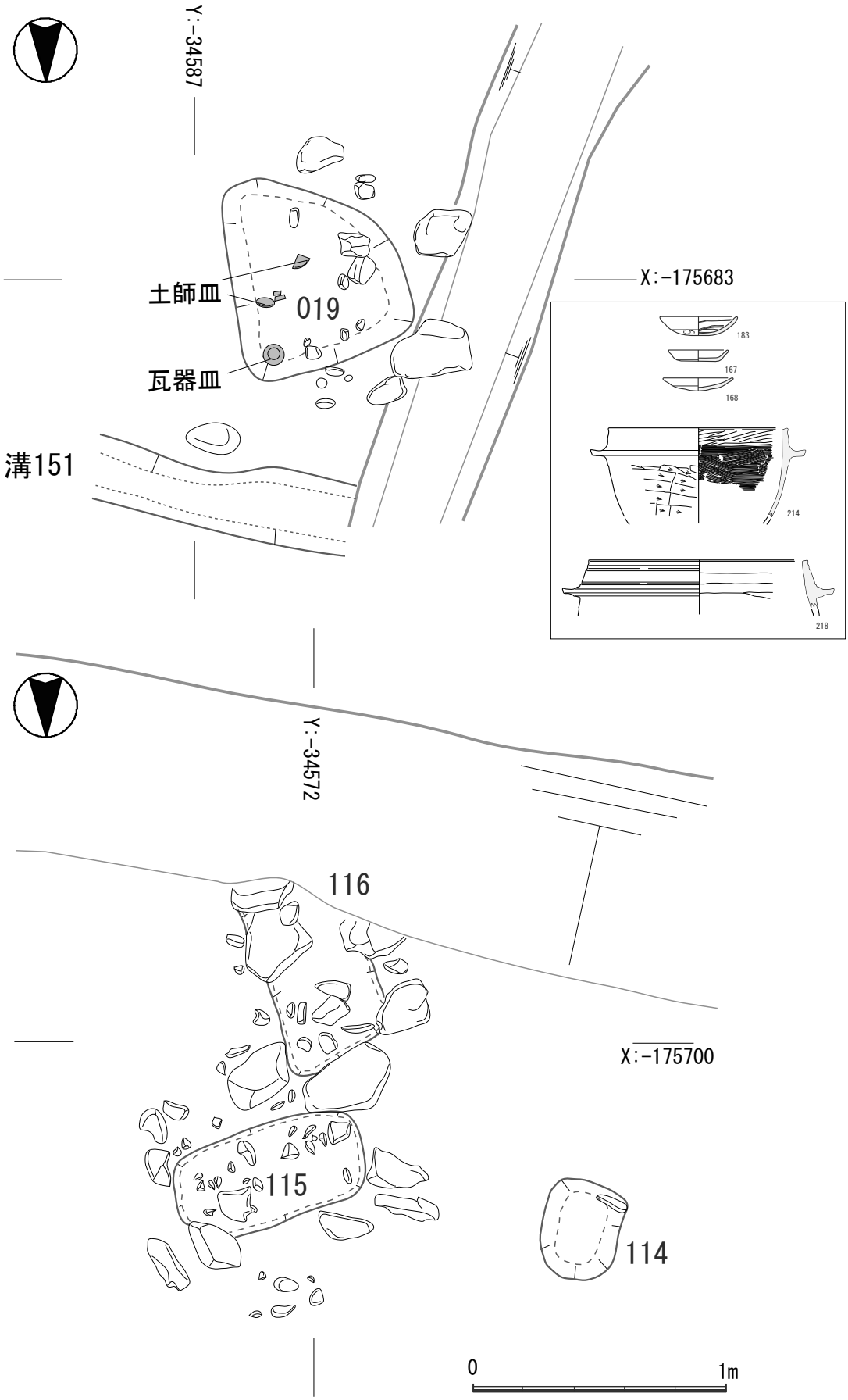

Y:-34587
X:-175683
土師皿
019
瓦器皿
溝151
183
167
168
214
218
Y:-34572
116
X:-175700
115
114
0
1m

図16　中段の墓群1

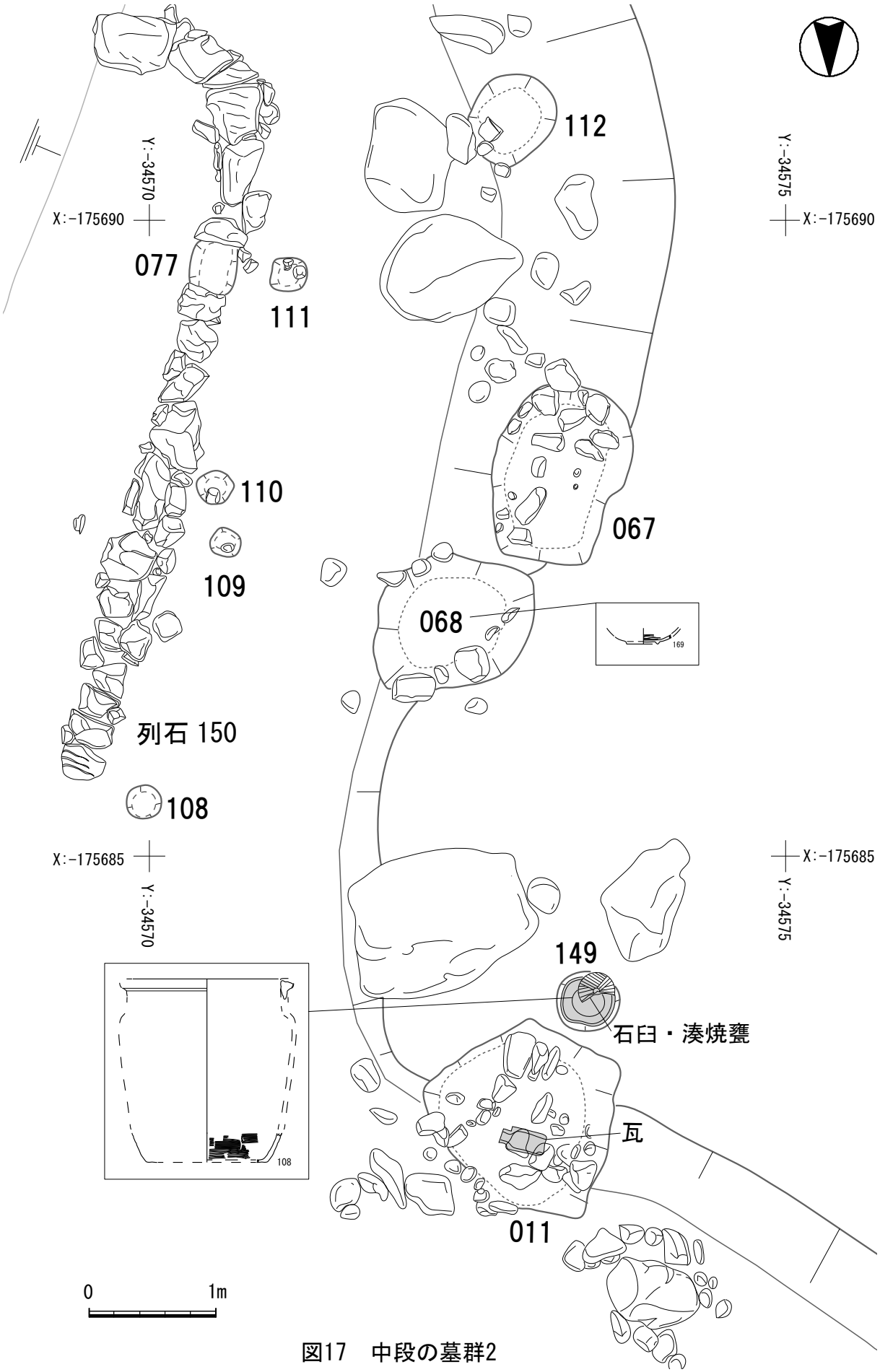

Y:-34570
X:-175690
077
111
110
109
列石 150
108
X:-175685
Y:-34570
112
Y:-34575
X:-175690
067
068
169
X:-175685
Y:-34575
149
石臼・湊焼甕
瓦
011
108
0
1m

図17　中段の墓群2

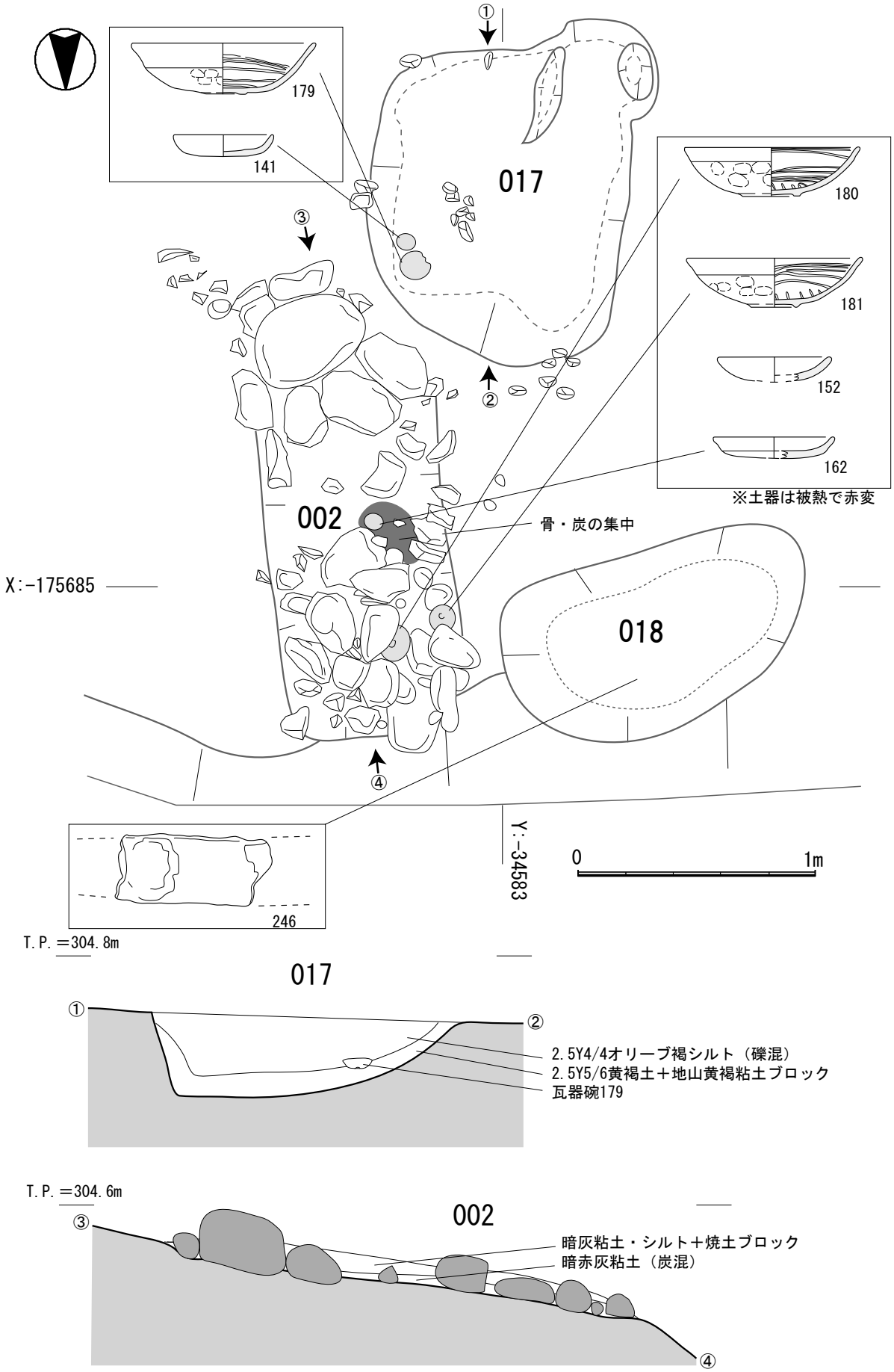


図18　火葬墓002周辺

して据え、下半のみ残されていた。周辺から上半部の破片が散乱して出土、もともと完形だったと考える。ただし、この墓のみ時期が降るようだ（図19・108）。

墓011は人頭大の礫を多く伴い、完形の丸瓦が発見された（図17・図版13）。また、焼け跡のある石も含まれていた（図版24）。

中段東部には墓114～墓116がある。長方形の浅い土壙で人頭大の礫を縁周りに伴う（図16・図版13）。墓115墓116の間に人頭大の平たい石があり、共有する台石かもしれない。

3節　その他の遺構

その他の遺構に大土坑・石列・焼け跡・不明土坑がある。

大土坑012は長辺4.0m、短辺3.7mのほぼ円形で、深さ0.3mを測る（図11・図版6）。人頭大の礫を多く含み、焼土などの痕跡はない。青磁碗の小片などが出土した。

大土坑046は長辺5.5m以上、短辺2.5mの不定形円形で、深さ0.4mを測る（図14・図版6）。南側は調査区外にのびる。人頭大の礫を多く含み、焼土などの痕跡はない。

二つの大土坑は墓群に接して発見され、埋め土は墓壙に共通する黒褐土だが、その機能は分からない。流水によるシルト堆積はなく、人為的にすぐ埋められたようだ。

石列150は人頭大の自然石が一列に並ぶ遺構で南北列の南側が東に折れ、調査区外へと続く。石列は東側の面を揃えることから西側に裏込めがあったと考える。石列上面、あるいは東側が道状遺構となっていたと考える（図14・図17・図版6）。

焼け跡113は焼土痕跡のある石が据えられた遺構で東側は削平されている。平たい石の中央に円形の焼け跡がある（図版6・24）。

不明土坑006と不明土坑013は上段の北端で発見された（図版6）。いずれも淡灰砂土で埋められ、石組みなどの抜き取り痕の可能性がある。

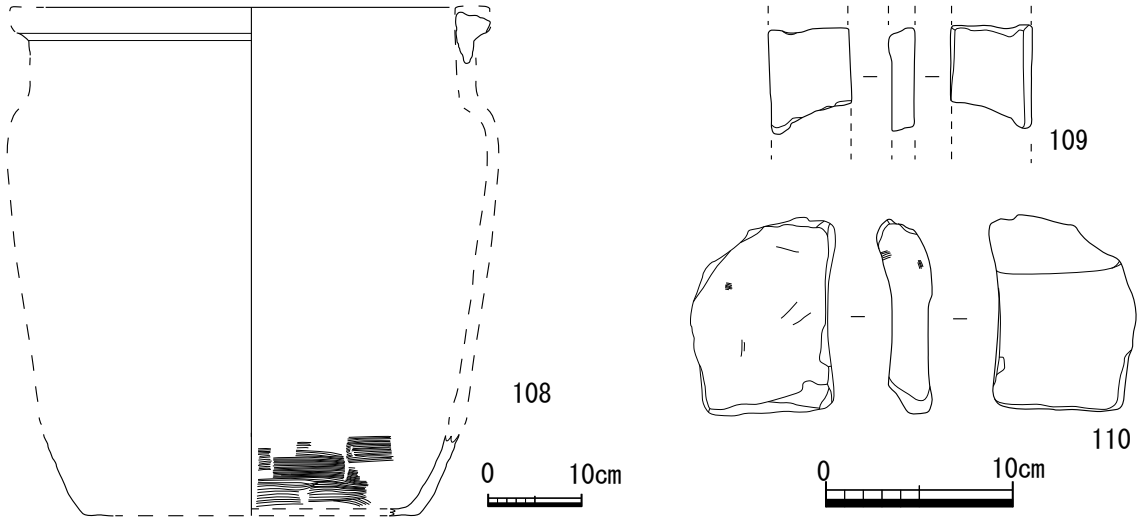


図19　湊焼大甕・砥石

４節　出土遺物

ａ中世の遺物

中世墓に伴うと考える中世の遺物には瓦器碗と皿･土師質土器の皿･青磁碗･白磁碗などの食器、土師質土器羽釜・瓦器羽釜や瓦質甕・土師質土器甕・常滑焼甕などの容器、瓦質すり鉢・東播系すり鉢・石臼などの容器蓋がある。前者は供献具、後者は土器棺の可能性がある。また、鉄製品として棺釘片や刀子片もいくつか見つかっている。以上は遺構に伴うものがほとんどなく、多くは破片となっており、墓に関係するかは確定できない。その他、丸瓦・砥石・焼け石・焼土などがある（図19 ～ 24　図版17 ～ 25）。

瓦器碗は直径15.2cm ～ 16.4cm程度、形骸化した断面三角形の高台が明瞭に残るものと（169 ～ 178）、直径12.8cm ～ 13.6cm程度、粘土紐を円形に張り付けた高台のものと（179 ～ 182）、直径10.4cm ～ 12.4cm程度、高台や外面の暗紋がない末期のものがある（183 ～ 202）。高台がない末期の時期の瓦器碗が大半をしめる。遺構に伴うものとしては断面三角形高台の瓦器碗が墓019・墓066などから出土した。粘土紐張り付け高台の瓦器碗は墓002のみ二点出土、この瓦器碗は火葬に伴って二次焼成を受け、淡黄褐色に変色している。

瓦器皿は少量で、高台のある碗形のものと（165）、底が平らで口縁部をつまみだすもの（166 ～ 168）がある。いずれも鎌倉時代後期のものと考える。

土師質土器の皿は太井地区出土遺物の大半を占める。直径6.9cm ～ 9.9cm程度で、平らな底部に短い口縁部を屈曲してつくりだすものと（111 ～ 140）、屈曲が緩く、断面形が円弧を描くものがある（141 ～ 164）。概して、赤褐色で砂礫を多く含み、乳白色で緻密な態度のものはほとんどない。形態や色調から時期などを峻別することは難しい。

土師質土器鉢は直径22.8cm、口縁端部を平らに作り、端部を外側にやや屈曲させる（203）。
瓦質土器鉢は直径26.4cm、口縁端部を丸く仕上げ、外面に指押さえの痕が明瞭に残る（204）。
瓦質土器火舎は口縁端部の小片で直径は不詳、外面に二段の張り付け突帯をもつ。口縁端部は厚く平らに仕上げる（205）。

瓦質土器甕は直径19.0cmと20.8cm、外面はタタキ痕跡が密にあり、内面には刷毛目が残る。口縁部は強く折り返し、端部は丸く仕上げる（206・207）。

土師質土器甕は直径20.8cm ～ 30.0cm、球形の胴部に短く屈曲した口縁部が取りつく。口縁端部は上方に摘み上げるもの（219 ～ 222）、やや口縁端部を内側に屈曲させるものがある（223）。

東播系すり鉢は口縁端部を肥大化させて外面に面をつくり、端部をとがり気味に仕上げるものと（208・209）、口縁部をやや厚くするのみで端部を丸く仕上げるものがある（210）。後者は末期のもので、今回の調査では後者が目立つ。

瓦質土器すり鉢は内外面を刷毛目仕上げするもの（211）と、外面をヘラ削りし、内面に不定方向の刷毛目を入れるものがある（212）。いずれも口縁端部は厚くするのみで､端部を丸く仕上げる。

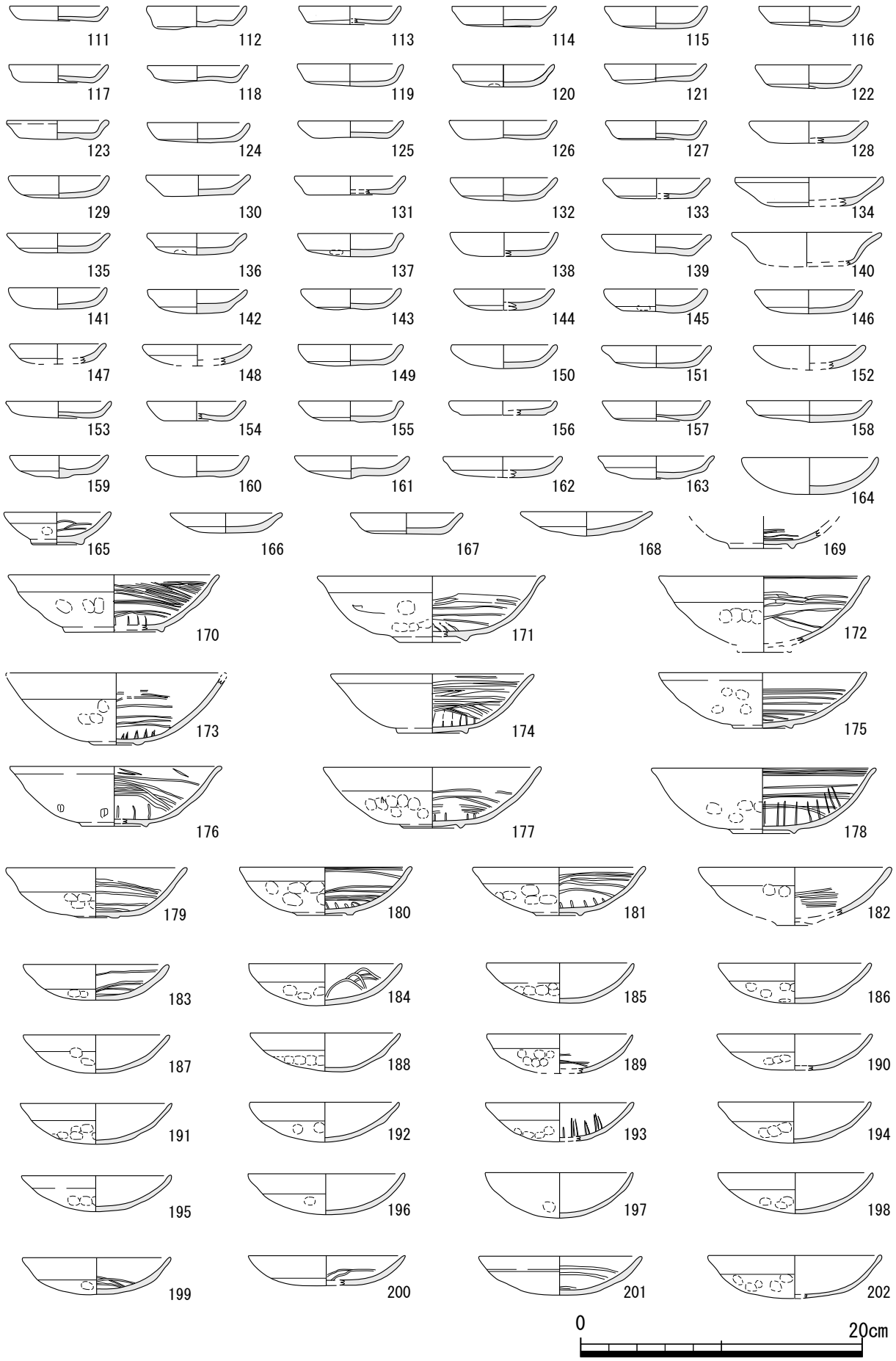


図 20　太井地区出土土器 1

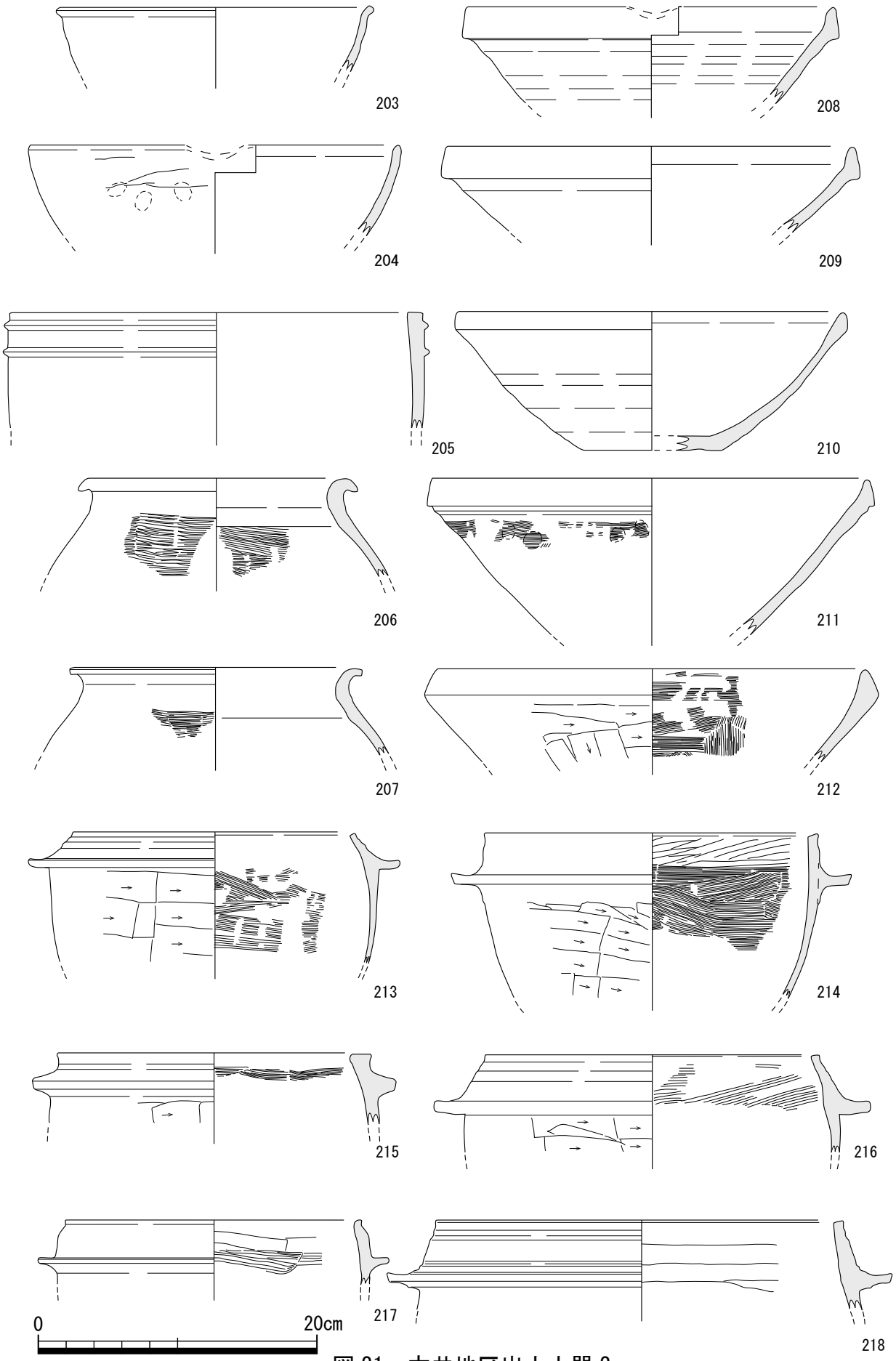


図 21　太井地区出土土器 2

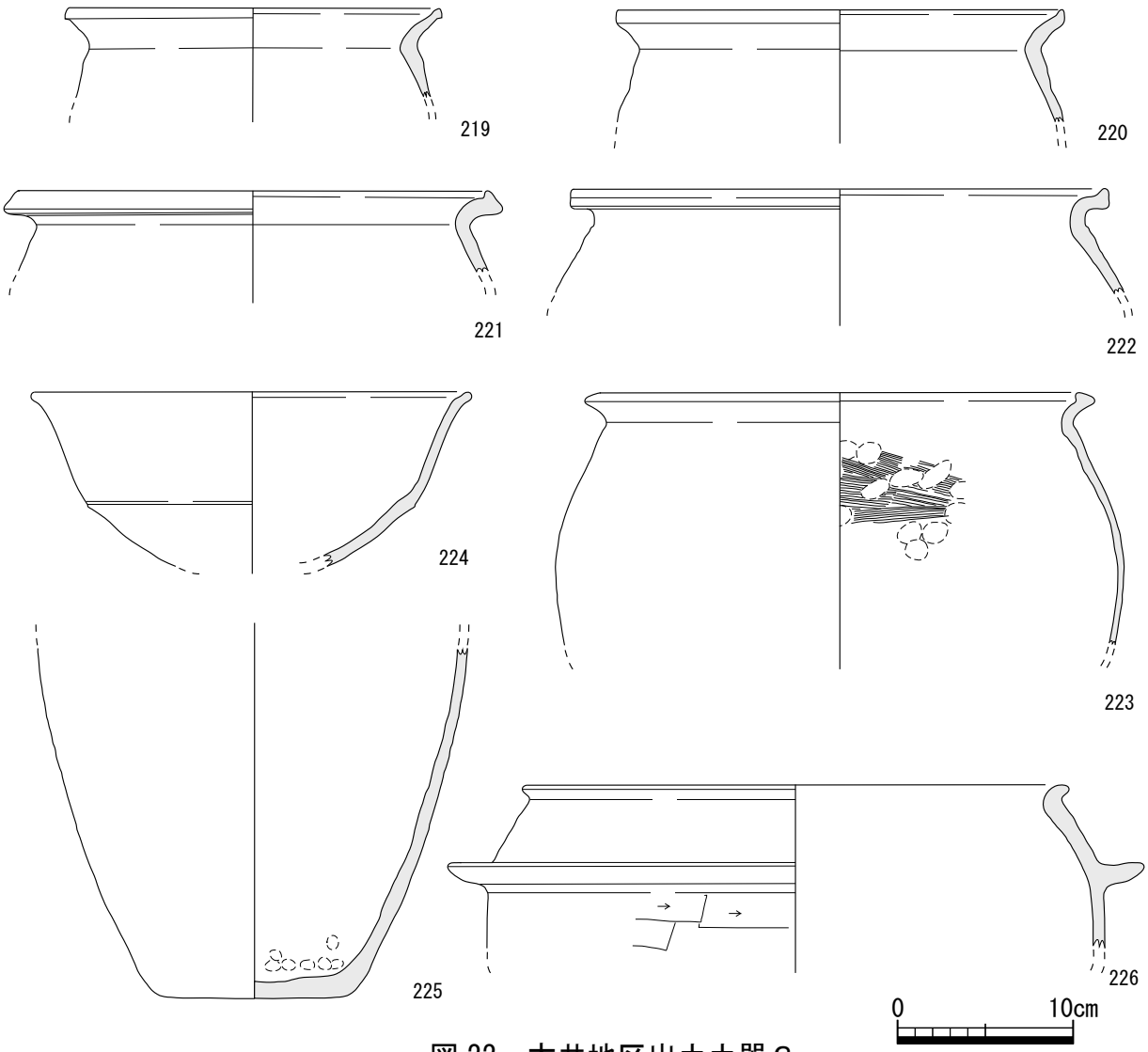


図 22　太井地区出土土器３

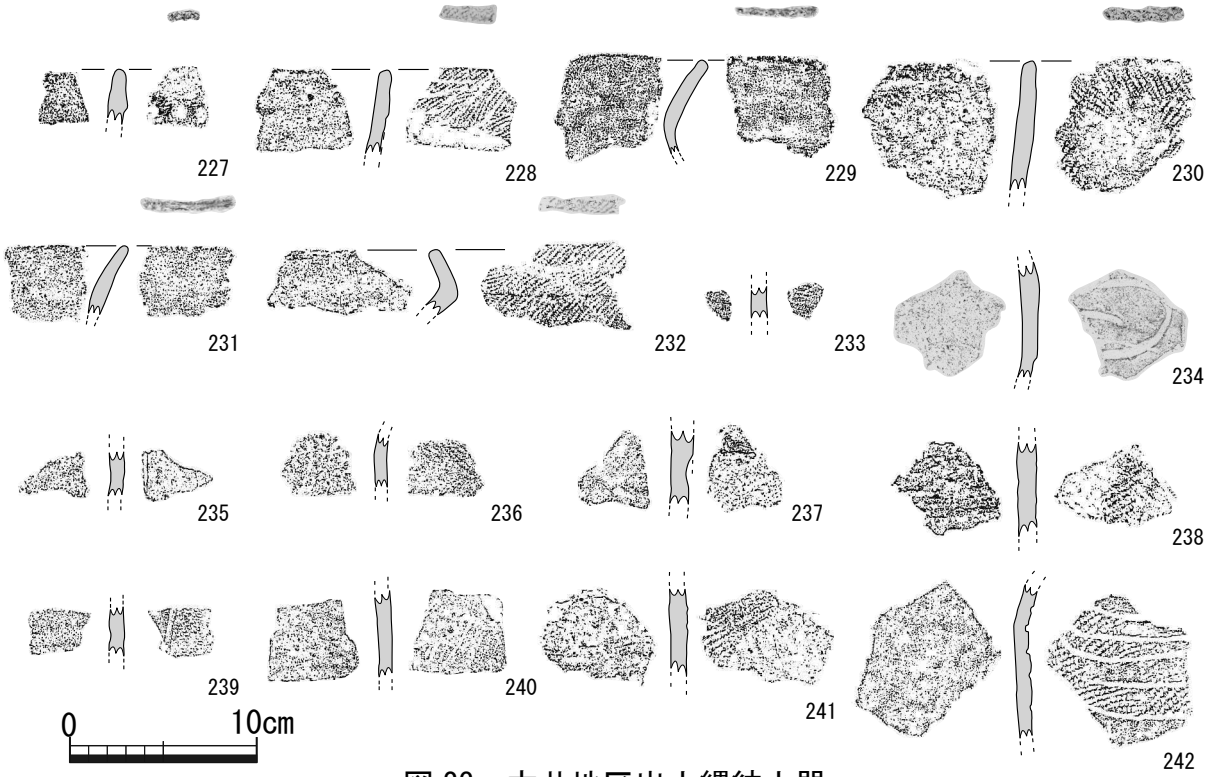


図 23　太井地区出土縄紋土器

瓦質土器羽釜は大型のものばかりで、口縁部が内傾するものと（213・216・217・218）、直立気味のものがある（214・215）。外面はヘラ削り、内面は刷毛目仕上げを基本とする。

土師質土器羽釜は直径30.4cm、口縁部は内傾し、端部を強く外側に折り曲げ、丸く仕上げる（226）。外面は刷毛目仕上げ、内面はナデ仕上げする。

その他、土器棺に転用されたと思われる高杯坏部と、手づくねの甕がある（224・225）。高杯は口縁部がラッパ状に開き、端部は厚く、ほぼ平らである。外面屈曲部も明瞭でなく、沈線を入れる。六世紀頃のものと考える。脚部を折り取って蓋にしたと考える。甕は口縁部がなく、体部は内外面ともに無調整で薄い。底部は平らにする。古物の再利用か。

また、土器棺に転用された湊焼大甕は直径約50.5cm、厚く口縁部をつくりだし、端部を平らに仕上げる。外面はタタキ痕跡が密にあり、内面には刷毛目が残る（108）。その蓋の石臼は花崗岩製で、粗いスリ目が刻まれ、1/2を欠損、直径約30cm・厚さ6.5cmを測る（260）。

砥石は２点あり、いずれも流紋岩製のいわゆる天草砥石で、よく使いこまれて擦り減りが激しい。大は墓009出土、長辺10.0cm、小は両端を欠損するが長辺5.6㎝、いずれも粗砥ぎ用と考える（109・110）。

青磁碗は小破片ばかりで、口縁部が分かるものは直径16cm程度。釉薬が青白色の龍泉窯系と緑褐色の同安窯系がある。白磁碗は底部の小片で、高台部分の釉薬を削る（261 ～ 267）。

鉄製品には棺釘と思われる棒状のものと（247 ～ 258）、刀子と思われる板状の破片がある（243 ～ 246）。その他、鉄滓と思われる小片が３点見つかっている（図版24）。

丸瓦は小型で玉縁があり、焼成後に釘穴を体部中央にあける。外面は縄たたきの痕を刷り消し、内面に斜め方向の糸きり痕跡はみられない（259）。

常滑焼甕は小破片が30片程あり、形態はよくわからない。同一個体と考える（268）。

ｂ縄紋時代の遺物

縄紋時代の遺物には石器・土器がある。石器は少量のサヌカイト剥片で製品はない。土器も小

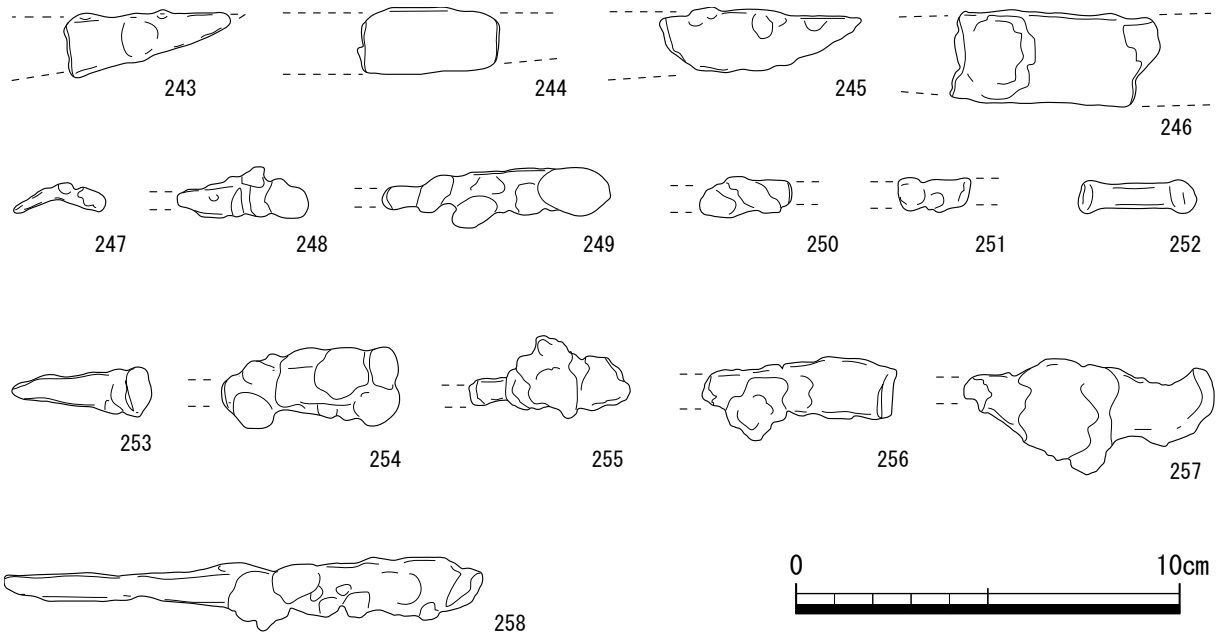


図 24　太井地区出土鉄製品（1/2）

片ばかりで遺構に伴うものはない（227 ～ 242）。

227は北白川C式の深鉢B類口縁部片で、口縁端部から２cmほど下がった位置に横位の隆帯をめぐらせ、隆帯上に円形の押圧を連続して施紋する。口縁端部～隆帯間はLR縄紋が施紋されているが、器面はかなり磨耗している。

228は深鉢口縁部だが、肥厚は顕著でない。口縁部外面に不規則な沈線をいれ、そののちLR縄紋を施すようだが、沈線と縄紋の先後関係は微妙である。

229は口縁部がくの字に屈曲する深鉢。口縁端部は面取りする。口縁部内外面とも無紋でナデ。時期不明。

230は口縁部がまっすぐのびる深鉢で、口縁部外面に横位のRL縄紋を施し、横位縄紋以下は縦位のRL縄紋を間隔を置いて施紋する。波状口縁か。

231は口縁部が軽く屈曲する深鉢口縁部片。内外面とも無紋様でナデ。時期不明。

232は口縁部が逆くの字に強く内屈する深鉢。口縁部外面、頸部外面、口縁端部に細かいLR縄紋を施紋する。

233は胴部の小片で、外面に縄紋施紋がある。縄紋はLRであろう。

234は深鉢胴部片。外面に太い沈線による横位の区画紋とその内側の沈線紋が施紋される。

235は胴部片で、外面拓影の左端に縦位の沈線、右上に弧状の沈線が認められる。遺存する範囲では縄紋施紋は認められない。

236は口頸部付近の破片と考えられるが、天地不明。縄紋は縦位のLRであろうか。

237はかなり厚みがあり外面に粘土を貼り足しているようで、口縁部付近の破片と考えられる。外面表面は上部のごく一部が遺存するのみで内外面とも無紋でナデ。時期不明。

238は深鉢胴部片で、外面に縦位のRL縄紋を間隔をあけて施紋する。

239は深鉢胴部片で、外面に縦位の沈線１条とLR縄紋を施紋する。

240は深鉢胴部片。外面に沈線状のものが見えるが、紋様とは断定できない。胎土に金雲母および極細粒の角閃石を多量に含む。

241は深鉢胴部片。外面に縦位のRL縄紋を間隔を置いて施紋する。

242は深鉢胴部片。外面に横位の多重連弧紋を入れ、そののち弧状沈線間にLR縄紋を施紋する。縄紋は多重連弧紋の全面にわたって施紋されるのではなく、一部欠く部分もある。

胎土には白色系の長石・石英や、黒色～灰色～赤色系のチャート、金雲母などの砂粒を多く含み、淡黄褐色、灰黄色、暗灰色を呈するものが主体である。１点のみではあるが、240は胎土に金雲母および極細粒の角閃石を多量に含み、河内のものと考えられる。

時期を特定できない小破片もあるが、時期が判断できるものはすべて縄紋時代中期後葉北白川C式であり、時期不明の小破片も中期後葉として矛盾はない。出土土器には口縁部を隆帯や沈線で区画するものが含まれず、口縁部の屈曲がごく弱いものが多い。北白川C式の中でも最も新しい段階に位置付けてよかろう。

墓	地区	遺構型式	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	埋め土※は焼土含	遺物有無	主な遺物・備考
001	下段西部D列	土壙	1.15	1.1	0.1	黒褐土	○	G碗178　鉄釘251
002	上段西部B列	石組土壙	2.1	0.8	0	黒褐土※	○	G碗180 181・H小皿152 162
003	下段中部E列	石組土壙	1.8	1.0	0.25	黒褐土	○	鉄滓
004	下段中部E列	石組土壙	2.1	1.1	0.5	黒褐土	○	H小皿115 116 119 122 124 129 132 133 143 149 154 ・G碗 186 190 191 194 196　198 ・H甕223・G羽釜217
005	下段中部E列	石組土壙	0.9	0.6	0.3	黒褐土※	○	
006	上段西部	土壙	5.0	2.0	0.2	淡褐砂土	×	墓群の抜き取り痕跡？
007	下段中部E列	石組土壙	0.9	0.6	0.1	黒褐土	○	H小皿145
008	下段中部E列	石組土壙	1.05	0.7	0.1	黒褐土	○	H小皿136 137 159　G碗184
009	下段中部E列	石組土壙	1.55	0.95	0.3	黒褐土※	○	H小皿120 142 144　砥石110
010	下段中部E列	石組土壙	1.85	0.8	0.4	黒褐土※	○	H小皿131　138　G碗187 197　200
011	中段中部	石組土壙	1.6	1.45	0.6	黒褐土	○	丸瓦259　G火舎205　焼け石
012	上段東部	大土坑	4.0	3.7	0.3	黒褐土	○	H小皿134 青磁碗261　墓ではない
013	上段西部	土壙	2.3	1.2	0.1	淡褐砂土	○	墓群の抜き取り痕跡？　鉄滓
014	上段西部B列	土壙	0.8	0.4	0.3	茶褐土	○	
015	上段西部B列	土壙	0.9	0.6	0.1	茶褐土	○	
016	上段西部B列	土壙	0.7	0.4	0.5	茶褐土	○	
017	上段西部B列	土壙	1.4	1.1	0.2	茶褐土	○	H小皿141　G碗179
018	上段西部B列	土壙	1.4	0.9	0.4	茶褐土	○	鉄刀子246　鉄滓
019	中段西部	土壙	0.8	0.7	0.15	茶褐土	○	H小皿片　G碗183　G小皿166 167 168　H羽釜214　G羽釜218
020	上段西部B列	土壙	0.8	0.3以上	0.05	茶褐土	○	
021	上段西部B列	土壙	0.6	0.3以上	0.1	茶褐土	○	
022	上段東部C列	土壙	0.8	0.5以上	0.3	黒褐土	○	
023	上段東部C列	土壙	0.6	0.5	0.2	黒褐土	○	
024	上段東部C列	土壙	0.6	0.4	0.15	黒褐土	×	
025	上段東部C列	土壙	0.8	0.6	0.3	黒褐土	○	鉄釘250
026	上段東部C列	土壙	0.4	0.25	0.05	黒褐土	○	
027	上段東部C列	土壙	0.45	0.25	0.15	黒褐土	○	
028	上段東部C列	土壙	0.4	0.25	0.5	黒褐土	○	
029	上段東部C列	土壙	0.8	0.4	0.25	黒褐土	×	
030	上段東部C列	土壙	0.5	0.4	0.55	黒褐土	×	
031	下段中部E列	石組土壙	1.05	0.7	0.3	黒褐土	○	H小皿112
032	下段中部E列	石組土壙	0.7	0.4	0.2	黒褐土	○	
033	下段中部E列	石組土壙	1.0	0.6	0.2	黒褐土	×	
034	下段中部E列	石組土壙	0.55	0.4	0.1	黒褐土	○	
035	下段中部E列	石組土壙	0.5	0.45	0.2	黒褐土	○	
036	下段中部E列	土壙	0.7	0.6	0.2	黒褐土	○	
037	下段中部E列	土壙	0.8	0.7	0.2	黒褐土	×	
038	下段中部E列	土壙	1.0	0.8	0.1	黒褐土	○	
039	下段南部F列	土壙	0.5	0.3	0.05	黒褐土	×	
040	下段南部F列	土壙	0.5	0.5	0.1	黒褐土	×	
041	下段南部F列	土壙	0.6	0.4	0.1	黒褐土	×	
042	下段南部F列	土壙	0.5	0.5	0.2	黒褐土	×	
043	下段南部F列	土壙	0.8	0.6	0.15	黒褐土	×	
044	下段南部F列	土壙	0.8	0.6	0.2	黒褐土	×	
045	下段南部F列	土壙	0.5	0.4	0.2	黒褐土	○	
046	下段南部F列	大土坑	5.5以上	2.5以上	0.4	黒褐土	○	墓ではない
047	下段南部F列	土壙	0.6	0.6	0.4	黒褐土	○	
048	下段南部F列	土壙	0.6	0.6	0.2	黒褐土	×	
049	下段南部F列	土壙	0.5	0.4	0.15	黒褐土	×	
050	下段南部F列	土壙	0.4	0.4	0.15	黒褐土	×	
051	下段東部G列	土壙	1.8	1.8	0.2	黒褐土	○	
052	下段東部G列	土壙	1.1	0.4	0.1	黒褐土	×	
053	下段東部G列	土壙	0.85	0.4	0.2	黒褐土	○	
054	下段東部G列	土壙	0.4	0.4	0.15	黒褐土	×	
055	下段東部G列	土壙	1.2	0.9	0.2	黒褐土※	○	
056	下段東部G列	土壙	1.1	0.5	0.1	黒褐土	○	
057	下段東部H列	石組土壙	0.7	0.7	0.2	黒褐土	×	
058	下段東部H列	石組土壙	1.6	1.2	0.3	黒褐土	○	
059	下段東部H列	土壙	0.4	0.3	0.1	黒褐土	×	
060	下段東部H列	石組土壙	0.7	0.5	0.3	黒褐土	×	
061	下段西部D列	土壙	1.6	0.6	0.2	黒褐土	○	
062	下段西部D列	石組土壙	1.4	0.7	0.3	黒褐土	○	
063	下段西部D列	土壙	0.5	0.3	0.2	黒褐土	×	
064	下段西部D列	土壙	0.7	0.7	0.2	黒褐土	×	
065	下段西部D列	土壙	0.9	0.5	0.2	黒褐土	×	
066	下段西部D列	石組土壙	1.4	0.9	0.4	黒褐土	○	G碗174
067	中段中部	石組土壙	1.6	1.0	0.2	黒褐土	○	
068	中段中部	石組土壙	1.2	1.1	0.3	黒褐土	○	H小皿片　G碗169
069	下段西部D列	石組土壙	0.9	0.5	0.2	黒褐土	○	
070	下段西部D列	石組土壙	2.5	1.7	0.3	黒褐土	○	
071	下段西部D列	土壙	0.3	0.3	0.2	黒褐土	○	
072	下段西部D列	石組土壙	1.3	1.1	0.4	黒褐土	○	
073	下段西部D列	石組土壙	0.8	0.5	0.2	黒褐土	×	
074	下段西部D列	石組土壙	1.1	0.8	0.4	黒褐土	○	G碗177
075	下段西部D列	石組土壙	1.5	1.0	0.4	黒褐土	×	

H=土師質土器　G=瓦器・瓦質土器

表1　中世墓計測表1

墓	地区	遺構型式	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	埋め土※は焼土含	遺物有無	主な遺物・備考
076	下段西部D列	土壙	0.4	0.2	0.2	黒褐土	○	
077	下段南部	土壙	0.4	0.3	0.2	黒褐土	○	石列抜き取り痕跡？
078	下段西部D列	石組土壙	0.6	0.4	0.25	黒褐土	×	
079	下段西部D列	石組土壙	0.5	0.4	0.25	黒褐土	×	
080	下段西部D列	石組土壙	0.4	0.4	0.2	黒褐土	×	
081	下段西部D列	石組土壙	2.0	0.7	0.1	黒褐土	×	
082	下段西部D列	石組土壙	0.8	0.6	0.2	黒褐土	×	
083	下段西部D列	石組土壙	1.5	0.4	0.2	黒褐土	×	
084	下段西部D列	石組土壙	0.5	0.5	0.2	黒褐土	×	
085	下段西部D列	石組土壙	1.4	1.1	0.15	黒褐土	×	
086	下段西部D列	土壙	0.3	0.2	0.1	黒褐土	×	
087	下段西部D列	石組土壙	1.2	0.3	0.1	黒褐土	×	
088	下段西部D列	石組土壙	1.1	0.5	0.2	黒褐土	×	
089	下段西部D列	土壙	0.7	0.5	0.2	黒褐土	×	
090	下段中部E列	石組土壙	0.7	0.6	0.4	黒褐土	×	
091	下段中部E列	石組土壙	0.6	0.4	0.15	黒褐土	×	
092	下段中部E列	石組土壙	0.4	0.3	0.05	黒褐土	×	
093	下段中部E列	石組土壙	0.45	0.3	0.15	黒褐土	×	
094	下段中部E列	石組土壙	0.5	0.3	0.2	黒褐土	×	
095	下段中部E列	石組土壙	0.7	0.5	0.05	黒褐土	×	
096	下段中部E列	石組土壙	0.5	0.4	0.05	黒褐土	×	
097	下段中部E列	石組土壙	0.5	0.4	0.05	黒褐土	×	
098	下段中部E列	石組土壙	0.8	0.6	0.35	黒褐土	○	
099	下段中部E列	石組土壙	0.6	0.5	0.1	黒褐土	×	
100	下段南部F列	石組土壙	0.7	0.5	0	黒褐土	×	
101	下段南部F列	土壙	0.4	0.3	0.2	黒褐土	×	
102	下段南部F列	土壙	0.6	0.5	0.3	黒褐土	×	
103	下段南部F列	土壙	0.6	0.5	0.1	黒褐土	×	
104	下段南部F列	土壙	0.4	0.4	0.25	黒褐土	×	
105	下段南部F列	土壙	0.5	0.3	0.2	黒褐土	×	
106	下段南部F列	土壙	1.1	0.5	0.1	黒褐土	×	
107	下段南部F列	石組土壙	0.7	0.4	0.25	黒褐土	×	
108	下段南部F列	土壙	0.4	0.3	0.4	黒褐土	×	
109	下段南部F列	土壙	0.35	0.35	0.1	黒褐土	×	
110	下段南部F列	土壙	0.35	0.3	0.1	黒褐土	×	
111	下段南部F列	土壙	0.4	0.55	0.1	黒褐土	○	
112	中段中部	石組土壙	0.8	0.55	0.1	黒褐土	×	
113	上段東部	焼け跡	0.4	0.3	0	※	○	墓ではない　焼け石
114	中段南部	土壙	0.45	0.4	0.15	黒褐土	×	
115	中段南部	石組土壙	0.7	0.4	0	黒褐土	×	
116	中段南部	石組土壙	0.8	0.4	0	黒褐土	×	
117	上段東部C列	石組土壙	0.8	0.3	0	黒褐土	×	
118	上段東部C列	石組土壙	0.7	0.5	0	黒褐土	×	
119	上段東部C列	土壙	0.5	0.3	0.1	黒褐土	×	
120	上段東部C列	石組土壙	0.6	0.6	0	黒褐土	○	
121	上段東部C列	石組土壙	0.6	0.4	0	黒褐土	×	
122	上段東部C列	石組土壙	0.4	0.2	0	黒褐土	×	
123	上段西部	土壙	0.4	0.4以上	0.2	茶褐土	×	
124	上段西部	土壙	0.25	0.25	0.2	茶褐土	×	
125	上段西部	土壙	0.4	0.2	0.1	茶褐土	×	
126	上段西部	土壙	2.3	1.0	0.15	茶褐土	×	
127	上段西部	土壙	0.3	0.4	0.4	茶褐土	×	
128	上段西部A列	石組土壙	0.7	0.5	0.25	茶褐土	×	
129	上段西部A列	石組土壙	0.9	0.7	0.15	茶褐土	×	
130	上段西部A列	石組土壙	0.9	0.8	0.08	茶褐土	○	
131	上段西部A列	土壙	0.3	0.3	0.1	茶褐土	×	
132	上段西部A列	土壙	0.35	0.3	0.05	茶褐土	×	
133	上段西部A列	石組土壙	1.1	0.7	0.15	茶褐土	○	
134	上段西部A列	土壙	0.6	0.5	0.03	茶褐土	×	
135	上段西部A列	石組土壙	0.45	0.35	0.02	茶褐土	×	
136	上段西部A列	石組土壙	1.2	0.9	0.17	茶褐土	×	
137	上段西部A列	石組土壙	0.9	0.8	0.1	茶褐土	○	
138	上段西部A列	石組土壙	0.6	0.5	0.2	茶褐土	×	
139	上段西部A列	石組土壙	0.5	0.4	0.1	茶褐土	×	
140	上段西部B列	石組土壙	0.5	0.3	0.05	茶褐土	×	
141	上段西部B列	土壙	0.7	0.4	0.05	茶褐土	×	
142	上段西部B列	石組土壙	0.6	0.4	0.08	茶褐土	×	
143	上段西部B列	石組土壙	0.7	0.4	0.08	茶褐土	×	
144	上段西部B列	土壙	0.8	0.6	0.08	茶褐土	×	
145	上段西部B列	土壙	0.4	0.3	0.2	茶褐土	×	
146	上段西部B列	土壙	0.5	0.45	0.4	茶褐土	×	
147	上段西部B列	土壙	1.0	0.7	0.3	茶褐土	○	
148	上段西部B列	土壙	0.6	0.3以上	0.05	茶褐土	×	
149	中段中部	石蓋土器棺	0.5	0.4	0.15	黒褐土	○	石臼260　湊焼大甕108
150	下段南部	石列	6	2	0	なし	×	墓ではない
	下段東部	土器棺	―	―	―	―	―	H高杯224を蓋、H甕225を身とするが原位置不明

H=土師質土器　G=瓦器・瓦質土器

表2　中世墓計測表2

挿図番号	図版番号	実測番号	出土地区	出土遺構・層序	器種	遺物登録
1	15	70	1	落ち込み1-1	J深鉢	2
2	15	71	18	暗褐土	J深鉢	24
3	15	34	6	暗褐土	弥生土器甕	7
4	15	30	1	暗褐土	肥前磁器	2
5	15	31	10	暗褐土	肥前陶器	11
6	15	29	―	表面採集	肥前磁器	27
7	15	33	9	暗褐土	H土錘	10
8	15	65	1	落ち込み1-1	H小皿	1
9	15	50	1	落ち込み1-1	H小皿	2
10	15	58	1	落ち込み1-1	H小皿	1
11	15	48	1	落ち込み1-1	H小皿	2
12	15	6	10	落ち込み10-1	G小皿	11
13	15	4	1	落ち込み1-1	H小皿	1
14	15	56	1	落ち込み1-1	H小皿	1
15	15	72	1	落ち込み1-1	G小皿	2
16	15	69	17	暗褐土	H小皿	23
17	15	44	17	暗褐土	H小皿	23
18	15	66	12	暗褐土	H小皿	14
19	15	28	15	暗褐土	G小皿	21
20	15	49	18	暗褐土	H小皿	24
21	15	67	18	暗褐土	H小皿	24
22	15	51	12	暗褐土	H小皿	14
23	15	68	18	暗褐土	H小皿	24
24	15	61	15	暗褐土	H小皿	21
25	15	27	17	暗褐土	G小皿	23
26	15	3	1	落ち込み1-1	G碗	1
27	15	11	1	落ち込み1-1	G碗	2
28	15	9	1	落ち込み1-1	G碗	2
29	15	7	1	落ち込み1-1	G碗	1
30	15	10	1	落ち込み1-1	G碗	2
31	15	12	1	落ち込み1-1	G碗	2
32	15	13	1	落ち込み1-1	G碗	2
33	15	16	1	落ち込み1-1	G碗	1
34	15	2	1	落ち込み1-1	G碗	1
35	15	14	1	落ち込み1-1	G碗	2
36	15	8	1	落ち込み1-1	G碗	1
37	15	22	1	落ち込み1-1	G碗	1
38	15	73	1	落ち込み1-1	G碗	1
39	15	23	17	暗褐土	G碗	23
40	15	25	17	暗褐土	G碗	23
41	15	24	13	暗褐土	G碗	15
42	15	15	18	暗褐土	G碗	24
43	15	20	3	地山直上	G碗	4
44	15	18	11	暗褐土	G碗	13
45	15	21	12	暗褐土	G碗	14
46	15	38	10	落ち込み10-1	G羽釜	11
47	15	36	10	落ち込み10-1	G羽釜	11
48	15	37	16	暗褐土	G羽釜	22
49	15	1	1	落ち込み1-1	G羽釜	1
50	15	5	1	落ち込み1-1	H甕	1
51	15	35	10	落ち込み10-1	H把手付甕	11
52	15	39	12	暗褐土	Tすり鉢	14
53	15	40	11	暗褐土	Tすり鉢	13
54	15	41	1	落ち込み1-1	Tすり鉢	1
55	15	42	2	暗褐土	Gすり鉢	3
56	15	43	16	暗褐土	Gすり鉢	22
57	15	63	13	東区暗褐土	H小皿	15
58	16	84	13	東区暗褐土	H小皿	29
59	16	81	13	土坑13-1	H小皿	34
60	16	90	13	地山直上	H小皿	42
61	16	76	13	西区暗褐土	H小皿	28
62	16	86	13	東区暗褐土	H小皿	29
63	16	89	13	東区暗褐土	H小皿	29
64	16	82	13	西区暗褐土	H小皿	28
65	16	87	13	東区暗褐土	H小皿	29
66	16	91	13	東区暗褐土	H小皿	29
67	16	77	13	東区暗褐土	H小皿	29
68	15	46	13	東区暗褐土	H小皿	15
69	16	88	13	土坑13-17	H小皿	37
70	15	59	13	東区暗褐土	H小皿	15
71	15	57	13	東区暗褐土	H小皿	15
72	16	45	13	土坑13-1	H小皿	16
73	16	47	13	土坑13-2	H小皿	17
74	15	55	13	東区暗褐土	H小皿	15
75	15	60	13	東区暗褐土	H小皿	15
76	16	78	13	東区暗褐土	H小皿	29
77	15	53	13	東区暗褐土	H小皿	15
78	15	54	13	東区暗褐土	H小皿	15
79	15	52	13	東区暗褐土	H小皿	15
80	15	26	13	東区暗褐土	G小皿	15
81	16	85	13	土坑13-1	H小皿	31
82	16	79	13	西区暗褐土	H小皿	28
83	16	80	13	東区暗褐土	H小皿	29
84	16	83	13	東区暗褐土	H小皿	29
85	16	62	13	土坑13-1	H小皿	16
86	15	64	13	東区暗褐土	H小皿	15
87	16	101	13	西区暗褐土	G碗	28
88	16	92	13	東区暗褐土	G碗	29
89	16	97	13	西区暗褐土	G碗	28
90	16	96	13	東区暗褐土	G碗	29
91	16	98	13	西区暗褐土	G碗	28
92	16	100	13	西区暗褐土	G碗	28
93	16	93	13	西区暗褐土	G碗	28
94	16	19	13	土坑13-2	G碗	17
95	16	94	13	東区暗褐土	G碗	29
96	16	99	13	東区暗褐土	G碗	29
97	15	17	13	東区暗褐土	G碗	15
98	16	95	13	東区暗褐土	G碗	29
99	15	32	13	東区暗褐土	青磁小皿	15
100	16	103	13	西区暗褐土	G羽釜	28
101	16	105	13	東区暗褐土	G羽釜	29
102	16	104	13	西区暗褐土	G羽釜	28
103	16	106	13	西区暗褐土	Gすり鉢	28
104	16	107	13	西区暗褐土	Tすり鉢	28
105	16	108	13	西区暗褐土	Tすり鉢	28
106	16	109	13	西区暗褐土	Tすり鉢	28
107	16	102	13	西区暗褐土	G羽釜	28

H=土師質土器　G=瓦器・瓦質土器　T=東播系炻器　J=縄紋土器

表3　小深地区出土遺物対照表

挿図番号	図版番号	実測番号	地区	遺構	器種	取上番号
108	18	151	中段	149	湊焼大甕	13391
109	18	126	下段中部E列	009	砥石	13396
110	18	125	中段中部	灰色土	砥石	13367
111	22	8	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13390
112	22	29	下段中部E列	031	H小皿	13496
113	22	74	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13375
114	22	38	下段東部G列	遺構群上面	H小皿	13417
115	22	1	下段中部E列	004	H小皿	13395
116	22	6	下段中部E列	004	H小皿	13395
117	22	52	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13375
118	22	55	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13375
119	22	2	下段中部E列	004	H小皿	13395
120	22	30	下段中部E列	009付近	H小皿	13488
121	22	51	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13375
122	22	3	下段中部E列	004	H小皿	13395
123	22	59	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13383
124	22	5	下段中部E列	004	H小皿	13395
125	22	105	下段東部G列	遺構群上面	H小皿	13417
126	22	54	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13375
127	22	53	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13375
128	22	104	下段南部F列	遺構群上面	H小皿	13416
129	22	43	下段中部E列	004	H小皿	13395
130	22	40	下段南部F列	遺構群上面	H小皿	13407
131	22	107	下段中部E列	010	H小皿	13393
132	22	42	下段中部E列	004	H小皿	13395
133	22	45	下段中部E列	004	H小皿	13395
134	22	122	上段東部C列	012付近	H小皿	13328
135	22	92	下段南部F列	遺構群上面	H小皿	13411
136	22	33	下段中部E列	008	H小皿	13484
137	22	34	下段中部E列	008	H小皿	13483
138	22	108	下段中部E列	010	H小皿	13393
139	22	37	下段東部G列	遺構群上面	H小皿	13417
140	22	72	上段西部A列	遺構群上面	H小皿	13352
141	22	117	上段西部B列	017	H小皿	13493
142	22	32	下段中部E列	009付近	H小皿	13487
143	22	44	下段中部E列	004	H小皿	13395
144	22	31	下段中部E列	009付近	H小皿	13488
145	22	35	下段中部E列	007	H小皿	13482
146	22	58	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13383
147	22	86	下段	遺構群上面	H小皿	13392
148	22	87	下段	遺構群上面	H小皿	13392
149	22	4	下段中部E列	004	H小皿	13395
150	22	85	下段	遺構群上面	H小皿	13392
151	22	7	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13390
152	22	121	上段西部B列	002	H小皿	13525
153	22	90	下段南部F列	遺構群上面	H小皿	13411
154	22	46	下段中部E列	004	H小皿	13395
155	22	41	下段	遺構群上面	H小皿	13402
156	22	95	下段東部G列	遺構群上面	H小皿	13413
157	22	91	下段南部F列	遺構群上面	H小皿	13411
158	22	11	上段	遺構群上面	H小皿	13338
159	22	9	下段中部E列	008	H小皿	13471
160	22	83	下段中部E列	遺構群上面	H小皿	13390
161	22	10	上段	遺構群上面	H小皿	13348
162	22	120	上段西部B列	002	H小皿	13525
163	22	62	上段西部B列	遺構群上面	H小皿	13333
164	22	101	下段南部F列	遺構群上面	H皿	13414
165	20	89	下段南部F列	遺構群上面	G小碗	13400
166	20	13	中段西部	019	G小皿	13470
167	20	12	中段西部	019	G小皿	13470
168	20	112	中段西部	019	G小皿	13470
169	20	119	中段中部	068	G碗	13521
170	—	96	下段東部G列	遺構群上面	G碗	13413
171	20	80	中断北斜面	遺構群上面	G碗	13366
172	—	79	中段	遺構群上面	G碗	13366
173	20	81	中段	遺構群上面	G碗	13366
174	20	36	下段西部D列	066	G碗	13477
175	20	66	上段	遺構群上面	G碗	13341
176	20	39	下段南部F列	遺構群上面	G碗	13453
177	20	50	下段中部D列	074	G碗	13465
178	20	22	下段西部D列	001	G碗	13374
179	21	18	上段西部B列	017	G碗	13469
180	21	20	上段西部B列	002	G碗	13509
181	21	21	上段西部B列	002	G碗	13510
182	21	98	下段東部G列	遺構群上面	G碗	13413
183	22	14	中段西部	019付近	G碗	13352
184	22	114	下段中部E列	008	G碗	13485・13486
185	22	75	下段中部E列	遺構群上面	G碗	13375
186	22	15	下段中部E列	004	G碗	13395
187	22	115	下段中部E列	010	G碗	13489
188	22	56	下段中部E列	遺構群上面	G碗	13375
189	22	84	下段中部E列	遺構群上面	G碗	13390
190	22	49	下段中部E列	004	G碗	13395
191	22	16	下段中部E列	004	G碗	13395

表4　太井地区出土遺物対照表1

挿図番号	図版番号	実測番号	地区	遺構	器種	取上番号
192	22	57	下段中部E列	遺構群上面	G碗	13375
193	22	106	下段中部E列	遺構群上面	G碗	13375
194	22	48	下段中部E列	004	G碗	13395
195	22	76	下段中部E列	遺構群上面	G碗	13375
196	22	17	下段中部E列	004	G碗	13395
197	22	109	下段中部E列	010	G碗	13393
198	22	47	下段中部E列	004	G碗	13395
199	22	60	下段中部E列	遺構群上面	G碗	13383
200	一	116	下段中部E列	010	G碗	13489
201	22	64	上段西部B列	遺構群上面	G碗	13333
202	22	61	下段中部E列	遺構群上面	G碗	13383
203	23	68	上段	遺構群上面	H鉢	13344
204	23	69	上段	遺構群上面	G鉢	13345
205	23	111	中段中部	011	G火舎	13399
206	23	97	下段東部G列	遺構群上面	G甕	13413
207	23	25	上段西部B列	遺構群上面	G甕	13333
208	23	103	下段南部F列	遺構群上面	Tすり鉢	13416
209	23	102	下段南部F列	遺構群上面	Tすり鉢	13416
210	21	65	上段西部B列	遺構群上面	Tすり鉢	13333
211	22	94	下段南部F列	遺構群上面	Gすり鉢	13411
212	23	93	下段南部F列	遺構群上面	Gすり鉢	13411
213	23	73	下段東部G列	遺構群上面	G羽釜	13355
214	23	26	中段西部	019付近	H羽釜	13341
215	23	23	上段西部B列	遺構群上面	G羽釜	13333
216	23	67	上段東部C列	遺構群上面	H羽釜	13343
217	23	113	下段中部E列	004	G羽釜	13479
218	23	27	中段西部	019付近	G羽釜	13341
219	23	70	上段	遺構群上面	H甕	13345
220	23	71	上段	遺構群上面	H甕	13345
221	23	78	下段中部E列	遺構群上面	H甕	13375
222	23	77	下段中部E列	遺構群上面	H甕	13375
223	23	110	下段中部E列	004	H甕	13395
224	17	99	下段東部G列	遺構群上面	H高坏	13413
225	17	100	下段東部G列	遺構群上面	H甕	13413
226	20	24	上段西部B列	遺構群上面	H羽釜	13333
227	17	127	中段	灰色土	J深鉢	13377
228	17	130	上段	側溝	J深鉢	13335
229	17	128	下段	法面	J深鉢	13413
230	17	131	中段	地山直上	J深鉢	13379
231	17	129	下段	法面	J深鉢	13413
232	17	132	上段	灰色土	J深鉢	13347
233	17	133	上段	灰色土	J深鉢	13347
234	17	141	中段	地山直上	J深鉢	13374
235	17	136	上段	灰色土	J深鉢	13347
236	17	135	上段	灰色土	J深鉢	13346
237	17	134	上段	灰色土	J深鉢	13347
238	17	142	中段	灰色土	J深鉢	13376
239	17	137	上段	灰色土	J深鉢	13347
240	17	140	上段	落込	J深鉢	13326
241	17	138	上段	灰色土	J深鉢	13345
242	17	139	上段	灰色土	J深鉢	13342
243	24	152	下段	側溝	刀子	13349
244	24	153	中段	灰色土	刀子	13376
245	24	154	下段	表土	刀子	13406
246	24	155	上段	018	刀子	13511
247	24	156	上段	灰色土	鉄釘	13343
248	24	157	上段東部大土坑	012	鉄釘	13475
249	24	158	上段	灰色土	鉄釘	13343
250	24	159	上段	025	鉄釘	13435
251	24	160	中段	001	鉄釘	13374
252	24	161	下段	褐色土	鉄釘	134401
253	24	162	上段	灰色土	鉄釘	13331
254	24	163	上段	灰色土	鉄釘	13343
255	24	164	上段	灰色土	鉄釘	13353
256	24	165	下段	灰色土	鉄釘	13375
257	24	166	下段	褐色土	鉄釘	13383
258	24	167	下段	褐色土	鉄釘	13419
259	18	123	中段中部	011	丸瓦	13490
260	18	124	中段中部	149	石臼	13501
261	19	143	上段東部大土坑	012	青磁碗	13475
262	19	144	上段	落込	青磁碗	11326
263	19	145	下段	黒褐土	青磁碗	13414
264	19	146	下段	褐色土	青磁碗	13401
265	19	147	下段	側溝	青磁碗	13360
266	19	148	上段	側溝	白磁碗	13323
267	19	149	中段	表面	白磁碗	13372
268	19	150	下段	黒褐土	常滑焼甕	13414

H=土師質土器　G=瓦器・瓦質土器　T=東播系炻器　J=縄紋土器

表5　太井地区出土遺物対照表2

第Ⅴ章　まとめ

今回調査は、小深地区で南北朝時代の集落の一端が、太井地区で中世墓が確認された。両地区の調査では縄紋土器･サヌカイト剥片が見つかり、縄紋時代にさかのぼる生活痕跡がうかがえる。

小深地区では遺跡東端の１区・10区の斜面でまとまって遺物が出土した。北側の上方に居住域が広がると考える。さらに、西端の13区ではわずかな平坦地をつくりだし、一棟の建物が発見された。伴う遺物は南北朝時代の一時期に限られ、短い期間の居住だったと考える。概して、小深地区発見遺物は南北朝時代の土器が大半を占め、開発の時期がうかがえる。

太井地区では150基に及ぶ遺構が確認され、その大半は中世墓に関するものと考える。墓は円形や方形の浅い墓壙を基本とし、石組みを伴うものと伴わないものがある。石組みは不定形で、付近の自然礫を集めただけのようである。石組みのない墓壙は墓群が廃絶した後、水田化に伴って上面が削平された可能性がある。石組みは標識と考える。

遺骨が残るものはほとんどない。周辺から棺釘と思われる鉄片が出土する場合がある。

墓は調査区全体に密集して営まれて、おおよそ列状に並び墓群をなす。墓の切り合いはほとんどない。一部はその地で火葬されたことを示す焼け土や炭・焼けた石を伴う。

さらに、瓦質土器や東播系須恵器のすり鉢と瓦質土器羽釜などが多数発見されており、土器棺墓もあったと考える。なかでも、古墳時代の高杯坏部と平底の手づくね土器甕の破片がかたまって見つかっている。古物を再利用した土器棺もあったようだ。

墓の縁には台石と思われる平坦な石が置かれる場合があり、瓦器碗・土師質土器皿を伴うものもある。碗・皿は墓壙への埋納ではなく、墓上に添えられた供献の食器と考える。

墓壙から副葬品の出土はない。ただし、刀子と思われる小型の鉄製品が少量確認できる。

墓にかかわる遺物で最も古いものは、高台の断面形が三角形をなす瓦器碗で、鎌倉時代後期のものである。ただし、大半の瓦器は末期の様相を示す南北朝時代のものである。室町時代中期・後期に降る遺物は少なく、墓149のみが室町時代後期の湊焼大甕を棺とする。

室町時代以降流行する一石五輪塔などの石製墓標や石仏などは発見されておらず、墓群は南北朝時代のうちに廃絶するようだ。

墓壙以外の遺構に、二つの大土坑と石列がある。大土坑は浅く、焼け土などは伴わない。その機能は不明である。石列は通路縁石の可能性がある。

共伴土器から墓は群を形成して継続的に営まれたと考える。そこに埋葬された人々は在地、太井地区に暮らした人々で、墓群は一族を単位とするものかもしれない。その根拠となる実態は第Ⅱ章３節で紹介した小深地区の小深墓地・太井地区の太井墓地に現代も残されている墓地形態から垣間見ることができる。

すなわち、現代でも小深墓地では木製の墓標を中心に据えた標柱とし、その周囲に一辺約１ｍの竹垣を方形に囲った範囲の地面に数個の自然石を粗雑において墓を形成している。前面には台

石があり、その上のお盆に食品を添える。墨書された年紀から、数年で標柱や竹垣が朽ちて整理され、地表には自然石のみが残され、標石としている。このような自然石による墓地が列をなして並ぶ。太井墓地ではこのような形態はすでに失われているが、その名残とも見られる自然石に花が生けられる一角が残っている。

そして、小深墓地には室町時代後期以降の一石五輪塔が、太井墓地には南北朝時代にさかのぼると思われる五輪塔などの石製標識が、一か所にまとめられており、今回調査の墓群が廃絶と入れ替わるように墓地形成があったことが推測される。

挿写真３　小深墓地の自然石による墓群

加えて、参考とされるのが、観心寺に残されているこの地域の古記録である。観心寺の古記録は『河内長野市史』第４巻（1972）に詳細が記され､これをもとにした変遷史が『奥田井遺跡Ⅱ・太井遺跡Ⅰ発掘調査概要』（2012）にまとめられている。

この他、室町時代後期の文亀元年（1501）の「弔法師跡職注文書」がある。この文書に記された「弔法師」の詳細は前後の時期の文書などが知られておらずよくわからないが、葬儀や埋葬に携わった人がこの地域にいたことがうかがえるのである。

弔法師跡職注文／太井郷弔法師カアトノ事

一所屋敷　善智庵ノマエ　地子一斗

一柿木三本　米五升

一所田地　向徳庵ノマエ　コモツシ　地子八升

一所田地　ツツミカ堂ノ下大川ヨリ西ノ川ハタ　地子二升　以上弐斗五升

小深　神主（略印）　／小深　彦四郎大夫（略印）　／小深　左近次郎（略印）

図　　版

墓002調査状況

図版1　小深地区調査区全景1

a 調査区7・調査区4（南から）　b 調査区6・調査区3（南から）　c 調査区5・調査区2（南から）
d 調査区8（東から）　e 調査区9（東から）

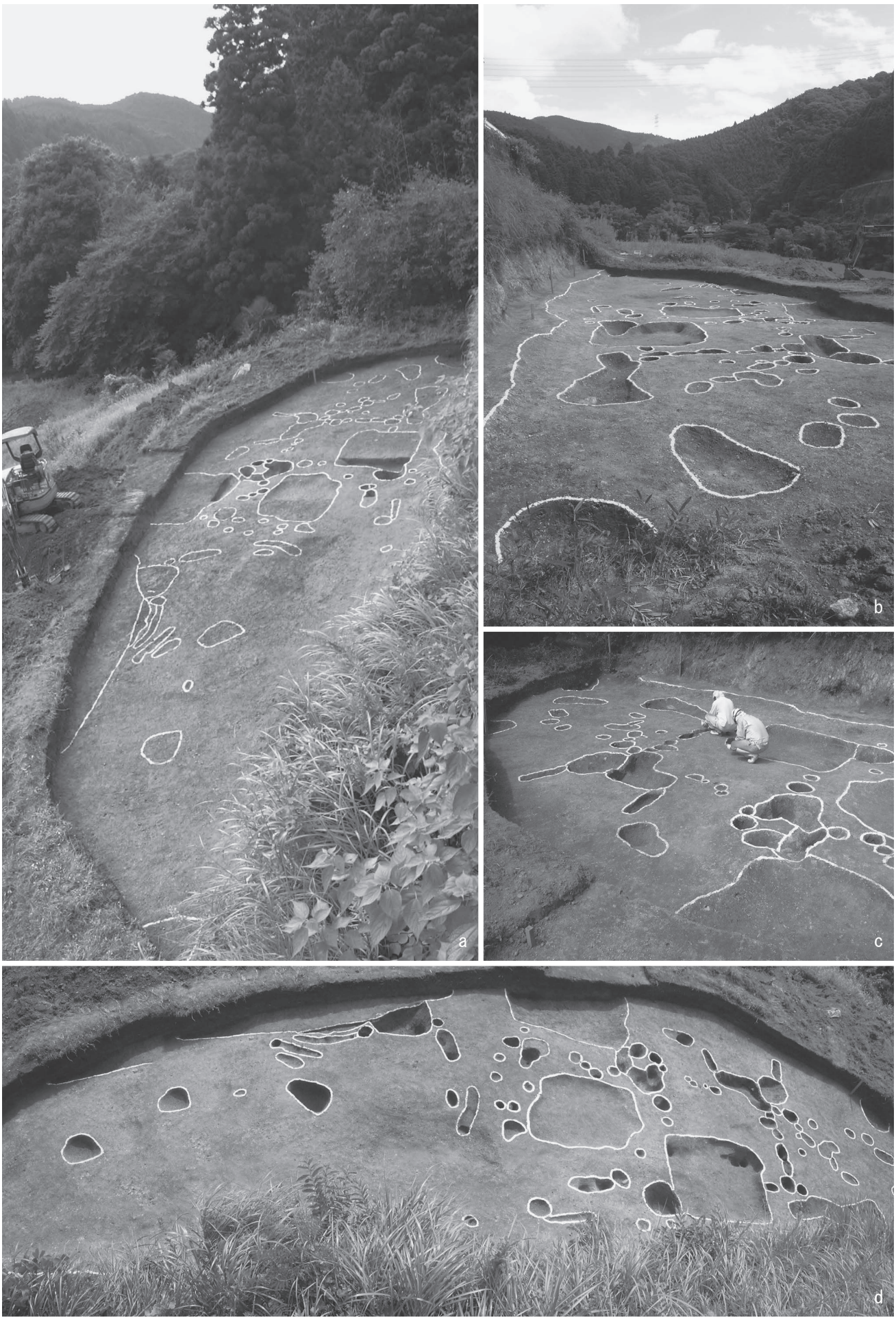
図版２　小深地区調査区全景２

a 調査区 11（西から）　b 調査区 10（西から）　c 調査区 1（南から）　d 調査区 12（南から）

図版３　小深地区調査区全景３

a 調査区 13 ～ 17（南から）　b 調査区 17（東から）　c 調査区 20（北から）　d 調査区 18（北から）
e 調査区 19（北から）

図版4　小深地区拡張区全景

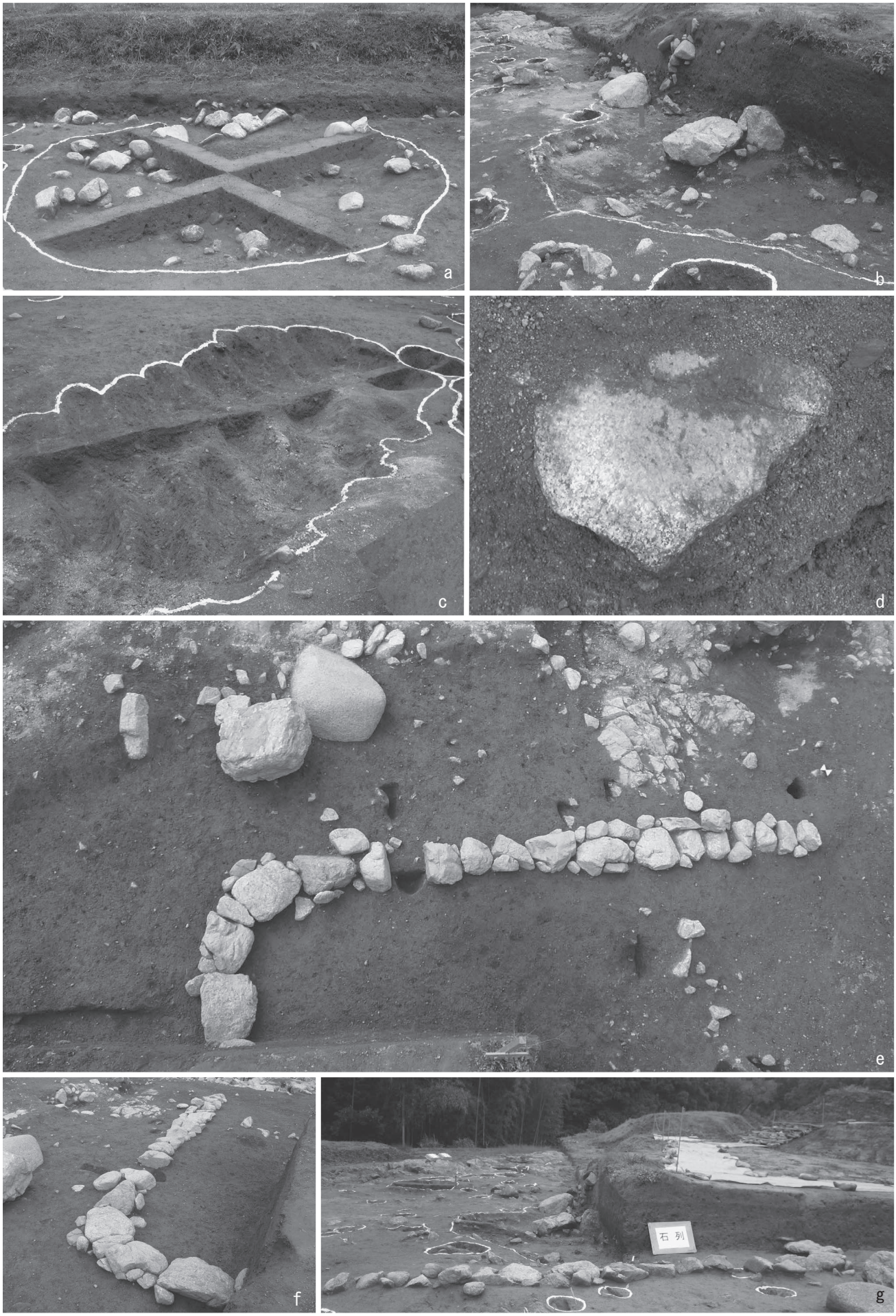


a 拡張区（東から）　b 拡張区（西から）　c 拡張区遺構検出状況（南から）　d 拡張区（北から）

図版５　太井地区全景１

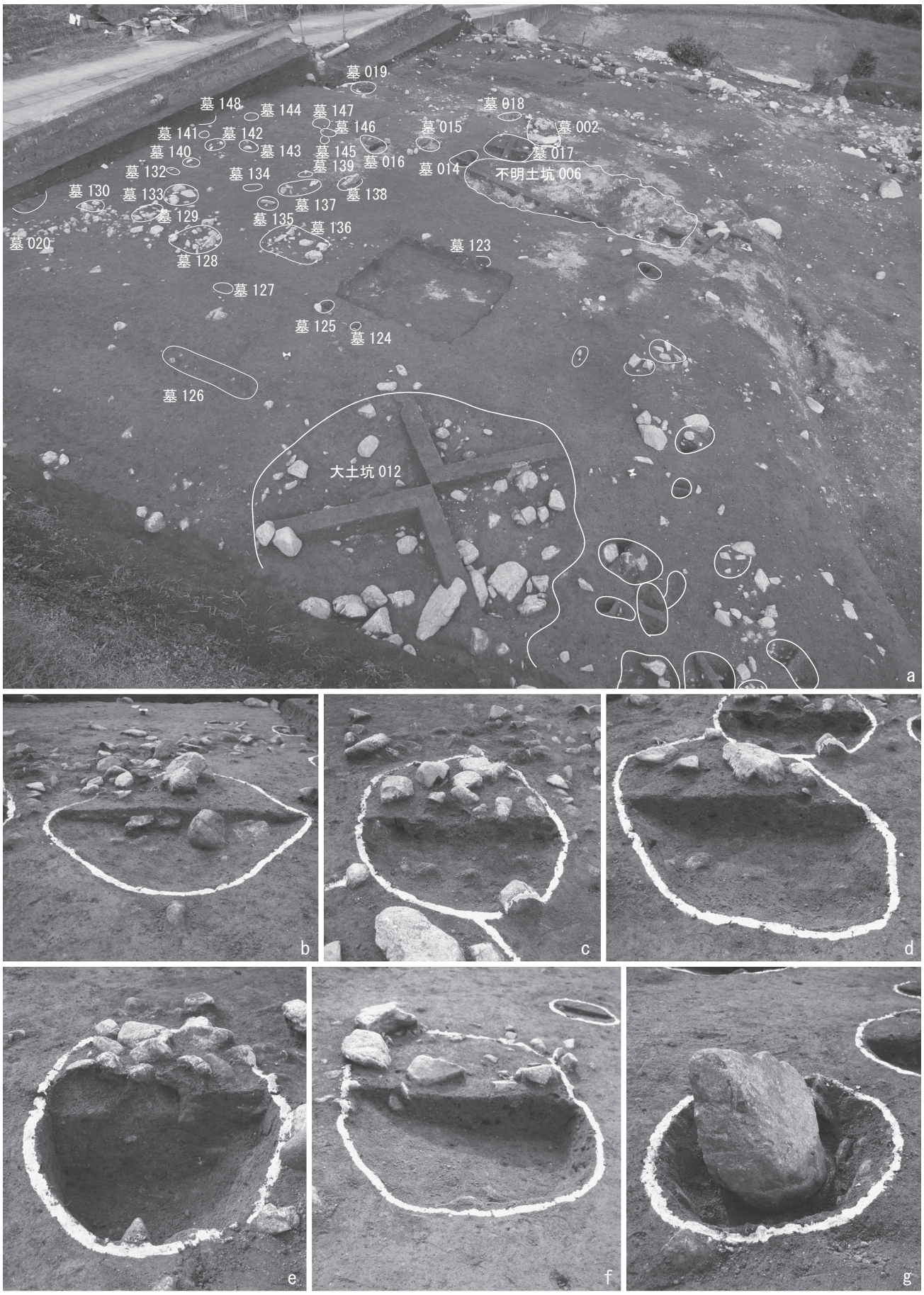
a・b 遺構検出状況（南から）　c 調査区全景（南から）　d・e 調査区全景（西から）

図版６　太井地区各種遺構



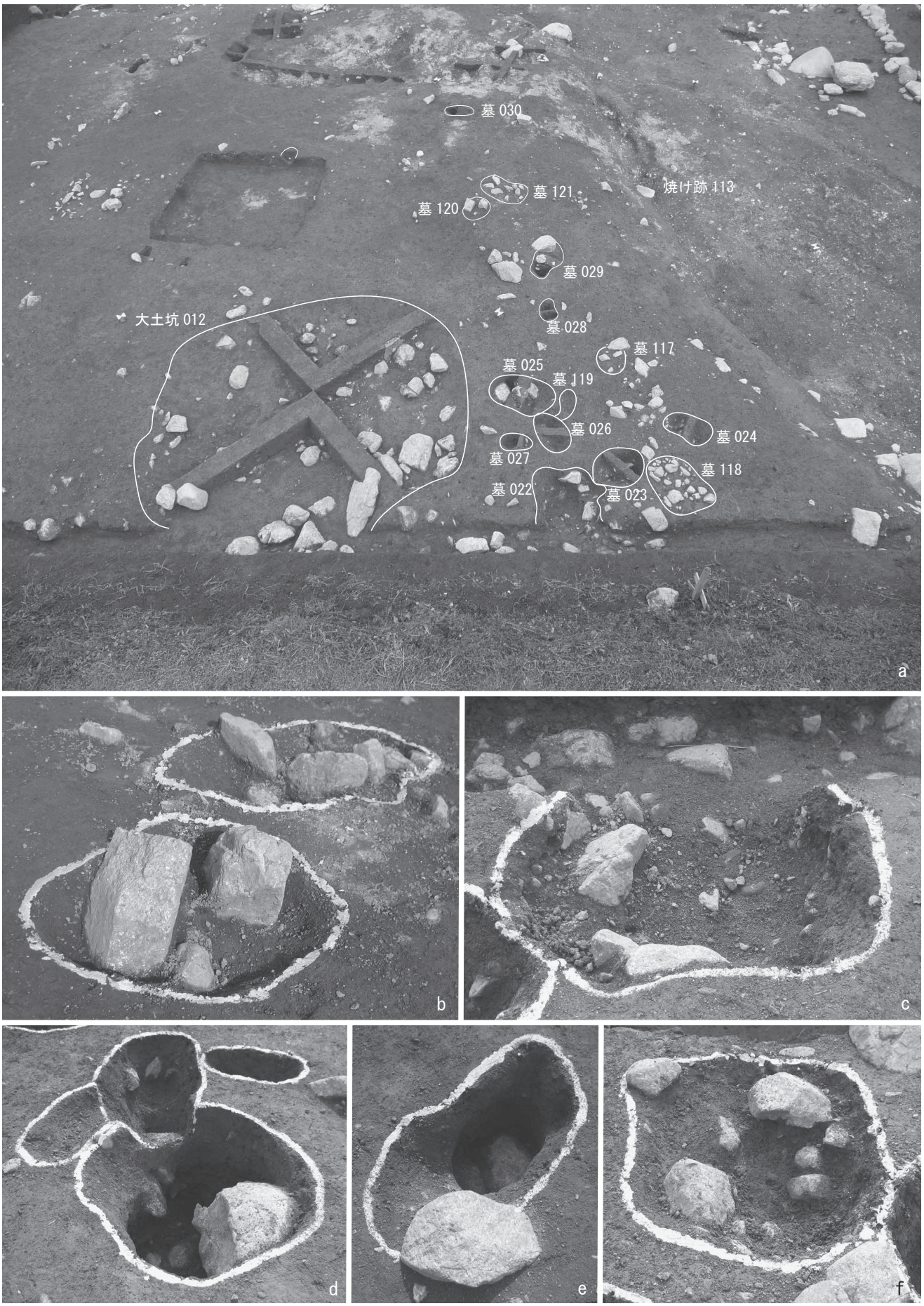
a 大土坑 012（北から）・b 大土坑 046（西から）　c 不明土坑 006（北から）　d 焼け跡 113　e ～ g 石列 150

図版7　太井地区上段西部の墓群



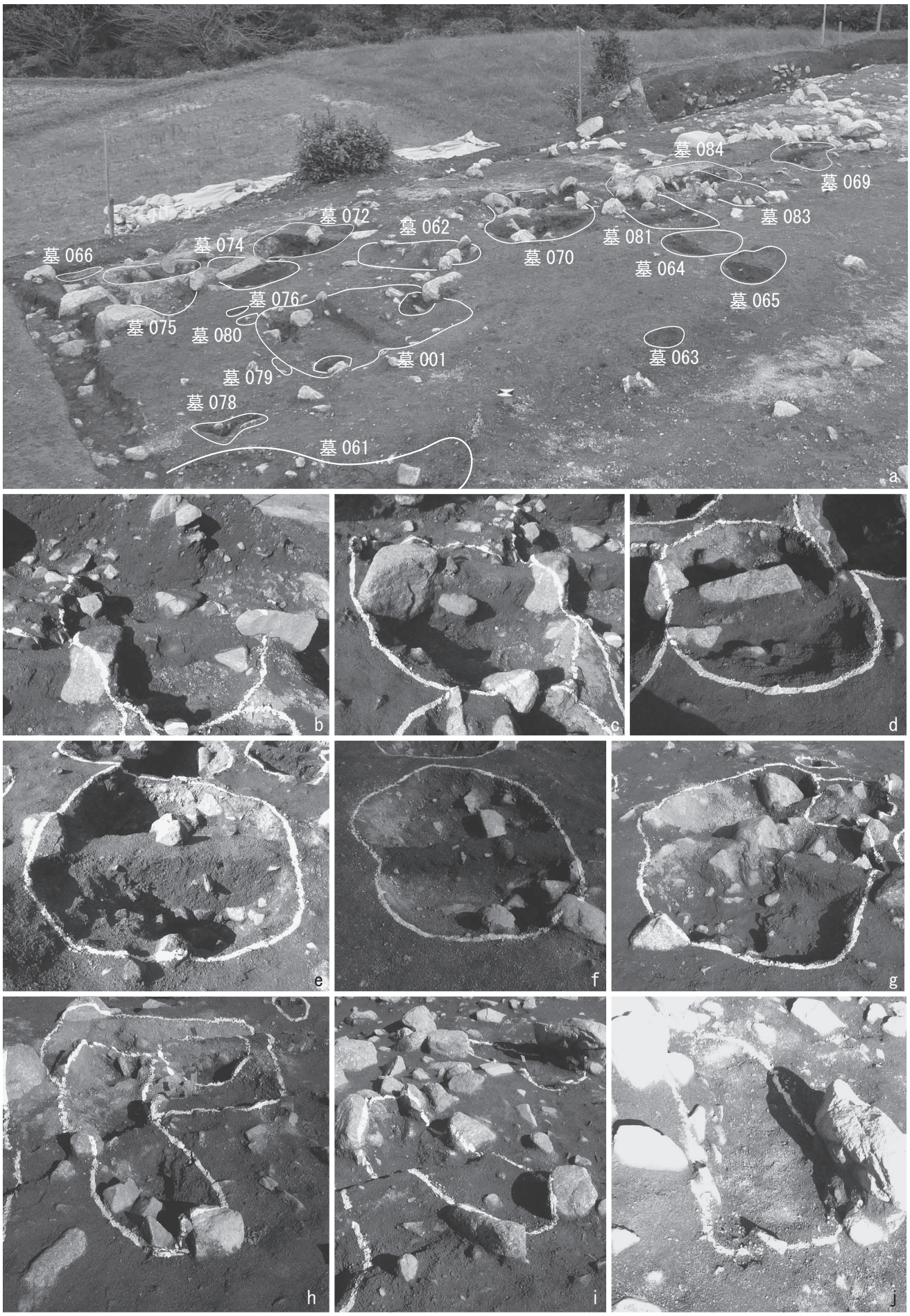
a 上段検出状況（南から） b 墓 130（北から） c 墓 129（北から） d 墓 133（北から） e 墓 128（北から）
f 墓 136（北から） g 墓 138（北から）

図版8　太井地区上段東部の墓群



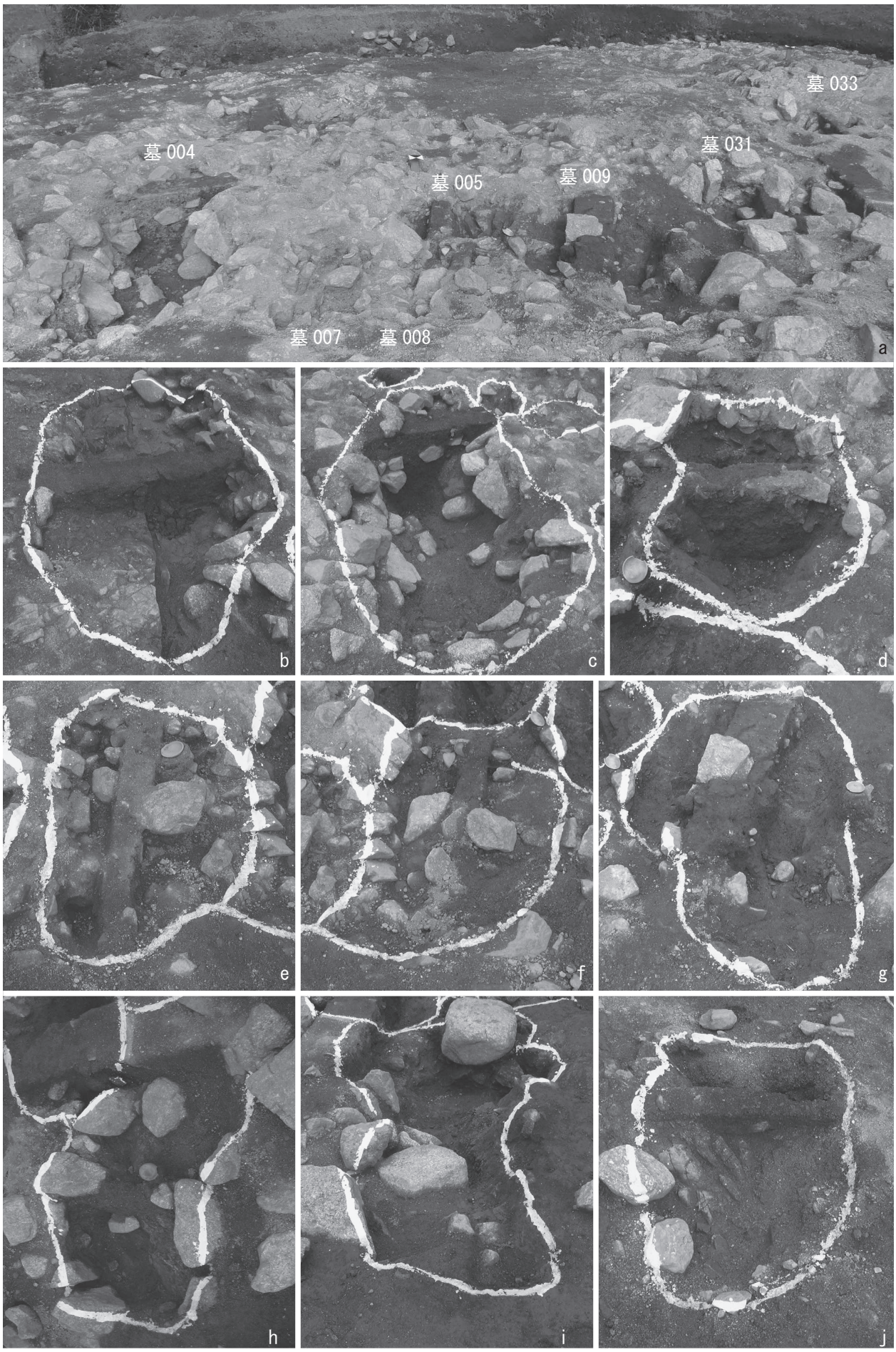
a 上段東部の遺構検出状況（南から）b 墓 120・墓 121（南から）c 墓 022（南から）d 墓 025・墓 026・墓 027（南から）e 墓 029（北から）f 墓 118（北から）

図版９　太井地区下段西部の墓群



a 下段西部の遺構検出状況（南から） b 墓 066（北から） c 墓 075（北から） d 墓 074（北から） e 墓 072（北から）
f 墓 001（北から） g 墓 070（北から） h 墓 083（南から） i 墓 087（南から） j 墓 088（南から）

図版10　太井地区下段中部の墓群

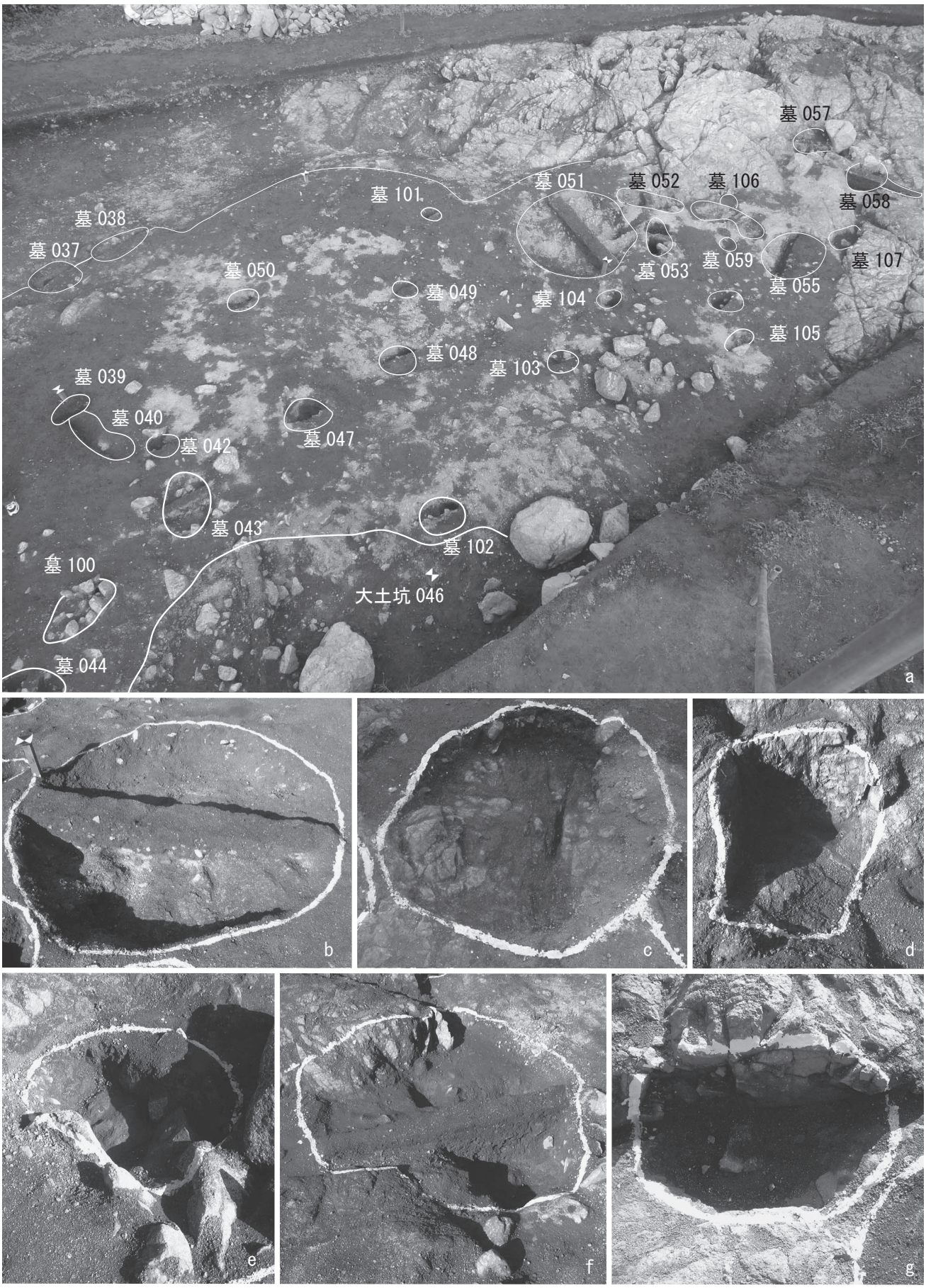


a 下段中部の遺構検出状況（南から） b 墓 003（西から） c 墓 004（南から） d 墓 005（南から） e 墓 007（南から）
f 墓 008（南から） g 墓 009（南から） h 墓 031（西から） i 墓 010（南から） j 墓 033（西から）

図版11　太井地区下段南部の墓群

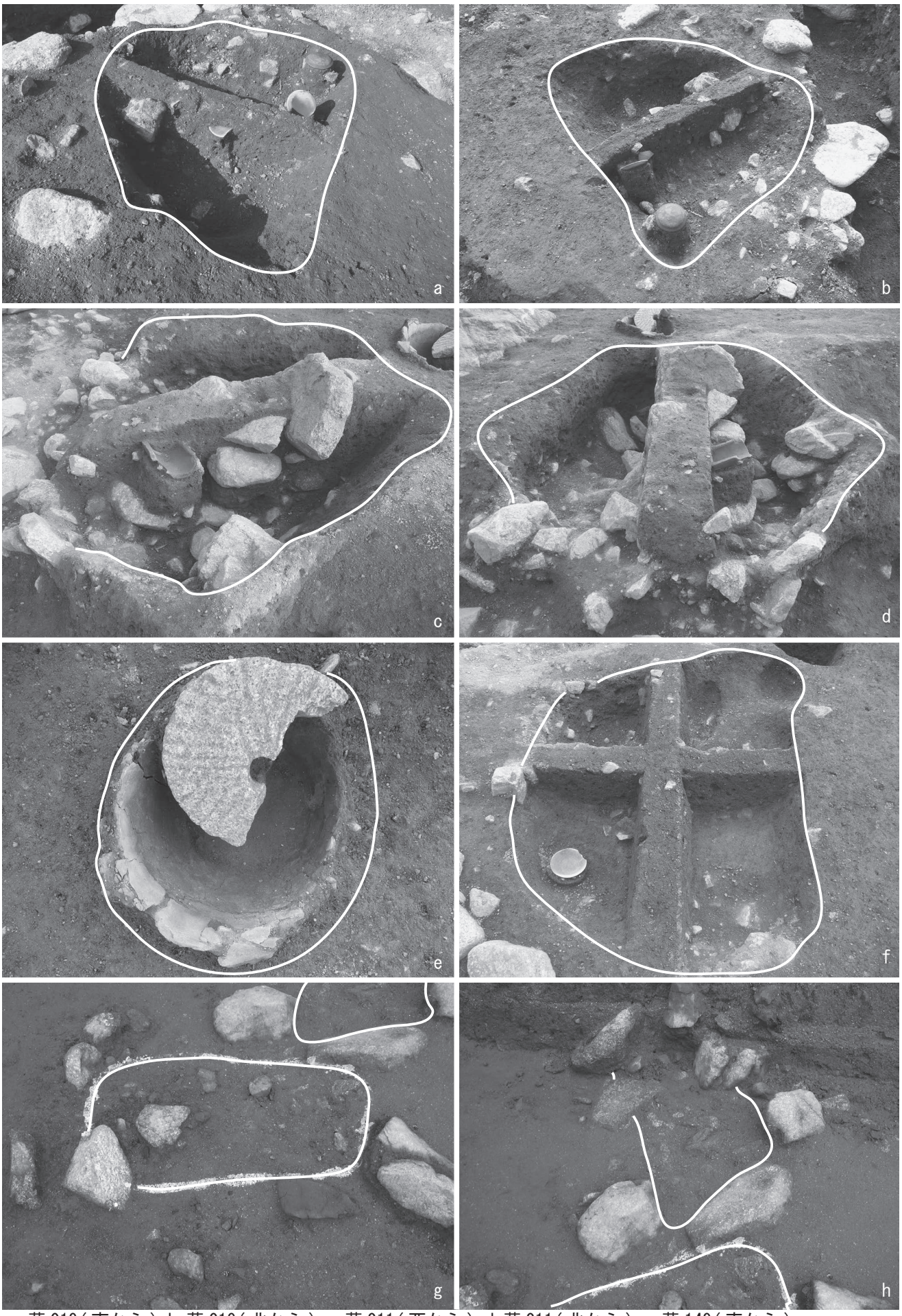
a 下段南部の遺構検出状況（南から） b 墓 043（北から） c 墓 044（南から） d 墓 045（南から）
e 墓 100（南から） f 墓 067（北から） g 墓 068（北から）

図版12　太井地区下段東部の墓群



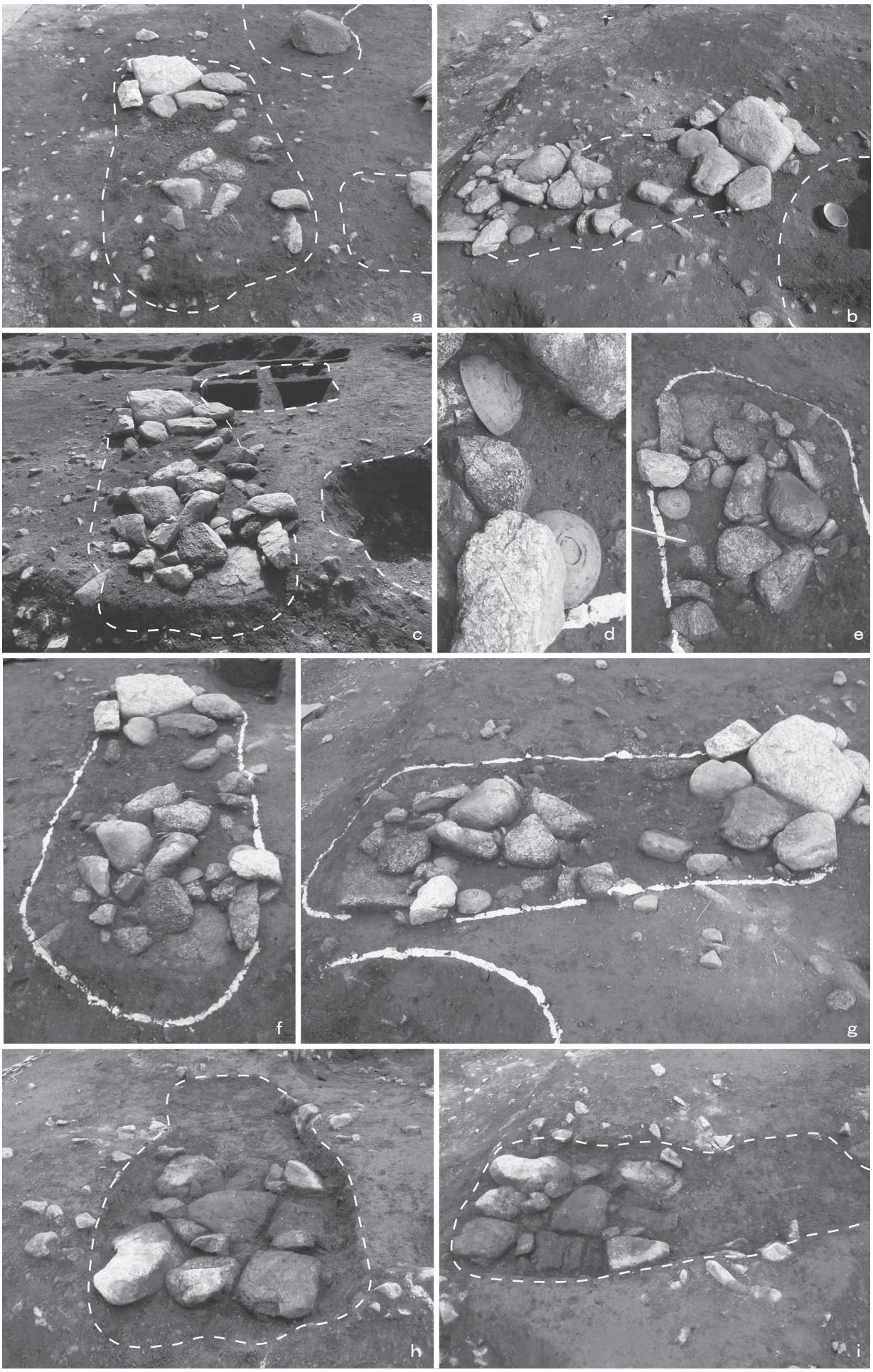
a 下段東部の遺構検出状況（南から） b 墓 051（北から） c 墓 055（北から） d 墓 107（東から）
e 墓 057（南から） f 墓 058（北から） g 墓 060（北から）

図版13　太井地区中段の墓群



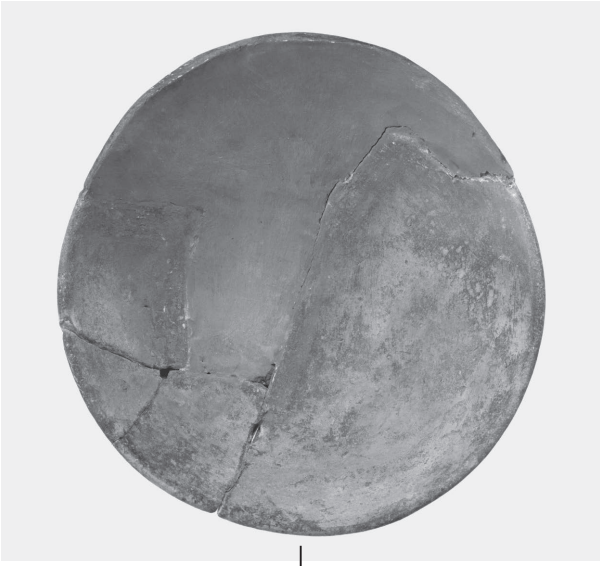
a 墓019（南から） b 墓019（北から） c 墓011（西から） d 墓011（北から） e 墓149（東から）
f 墓114（北から） g 墓115（北から） h 墓116（北から）

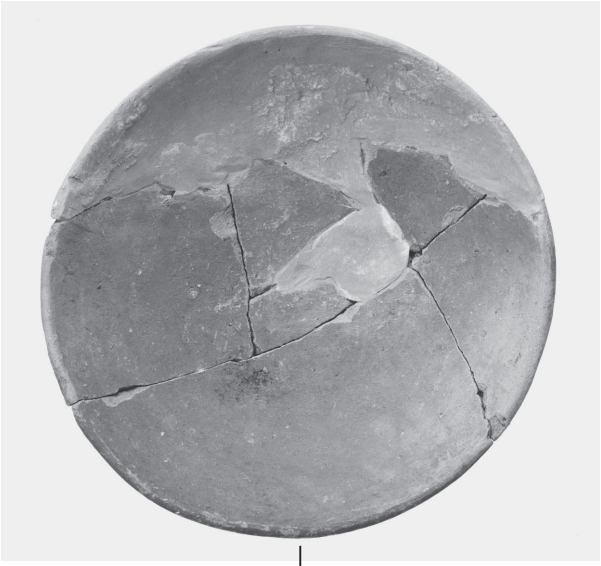
図版14　太井地区上段墓002

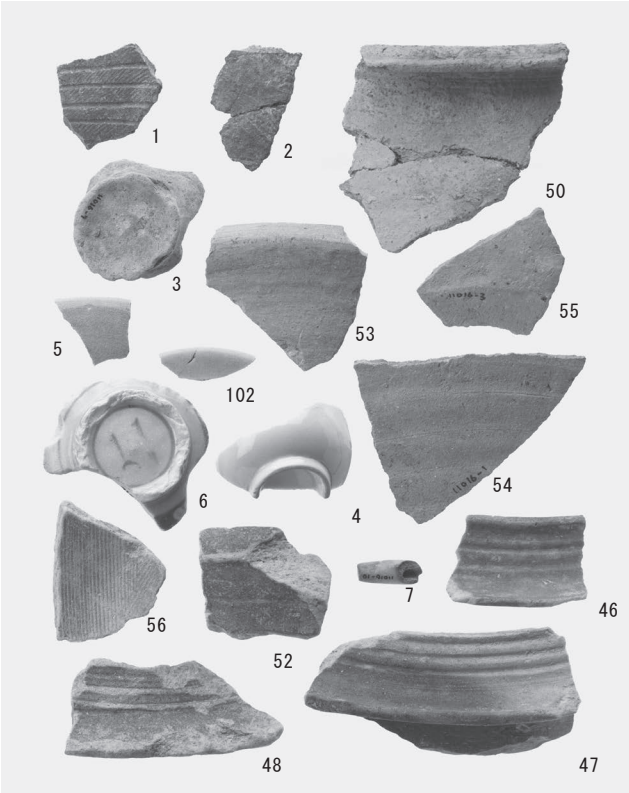


a 墓 002 検出状況（北から）b・g・i 同掘削状況（西から）c・f・h 同掘削状況（北から）d・e 同遺物出土状況

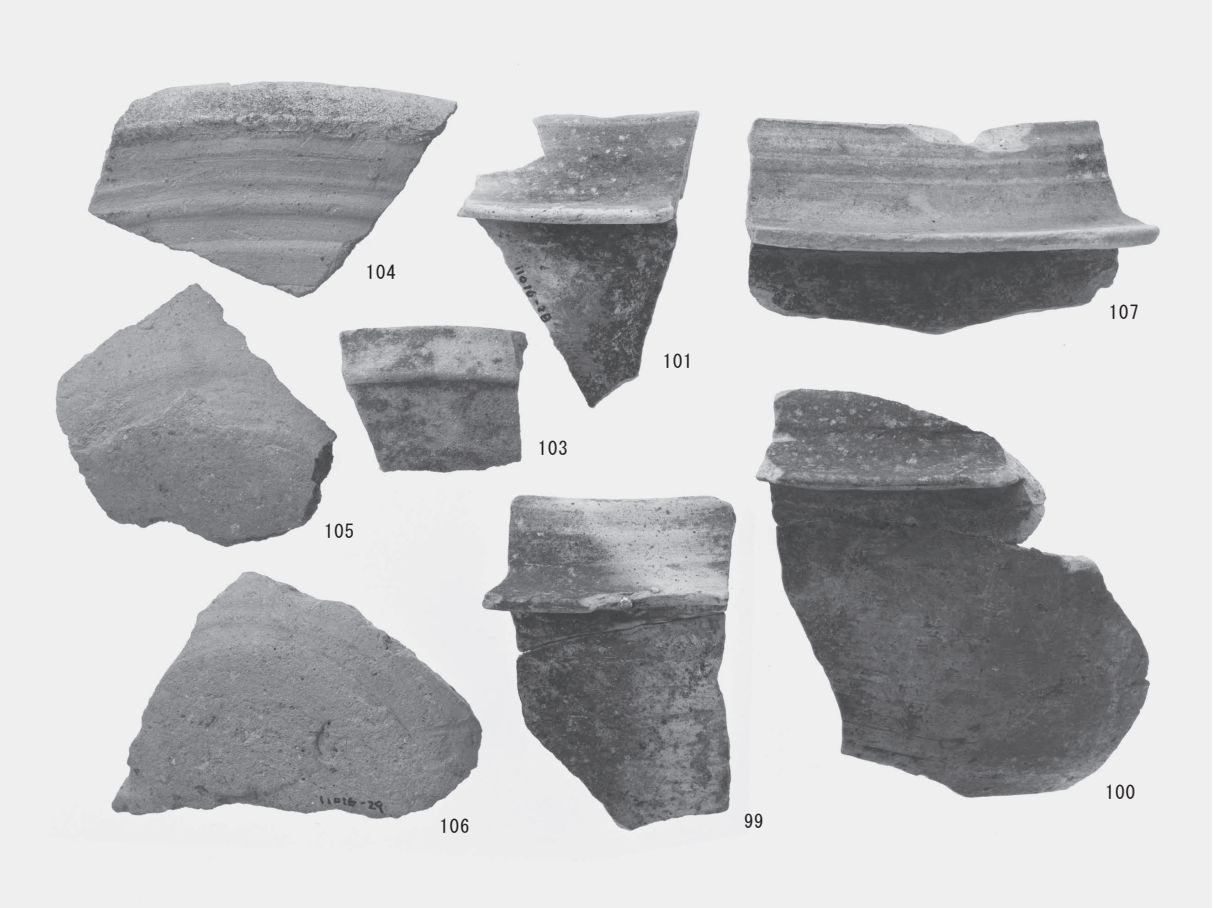
図版15　小深地区出土遺物



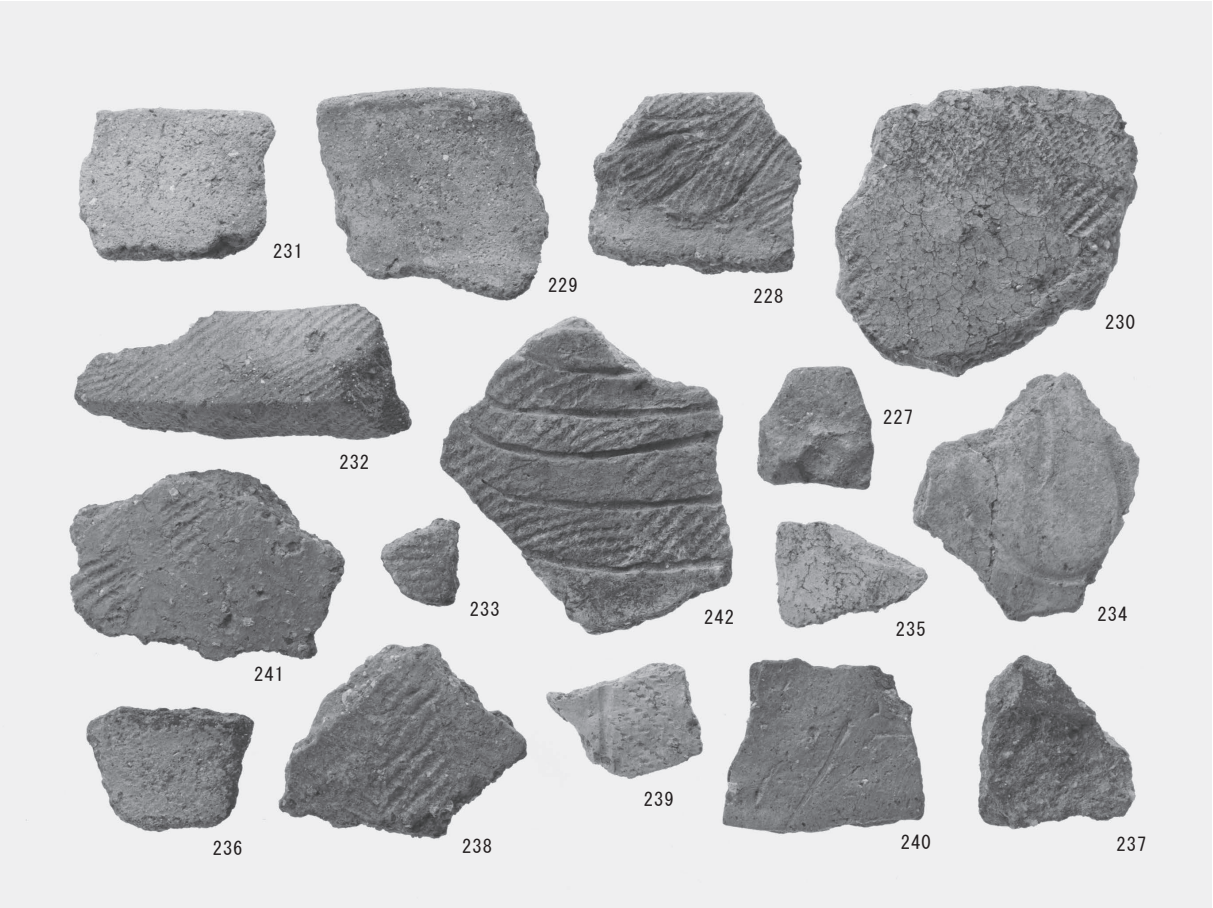




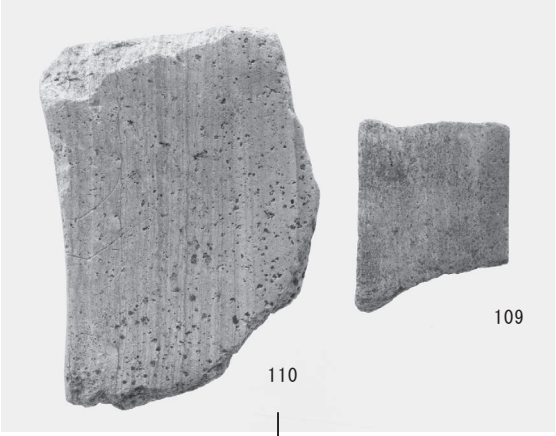
図版16　小深地区拡張区出土遺物

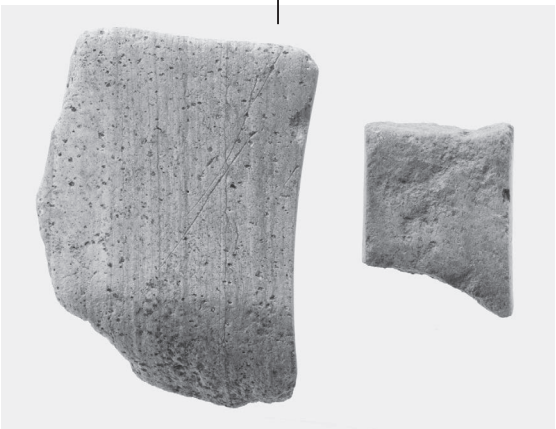


図版17　太井地区出土遺物1

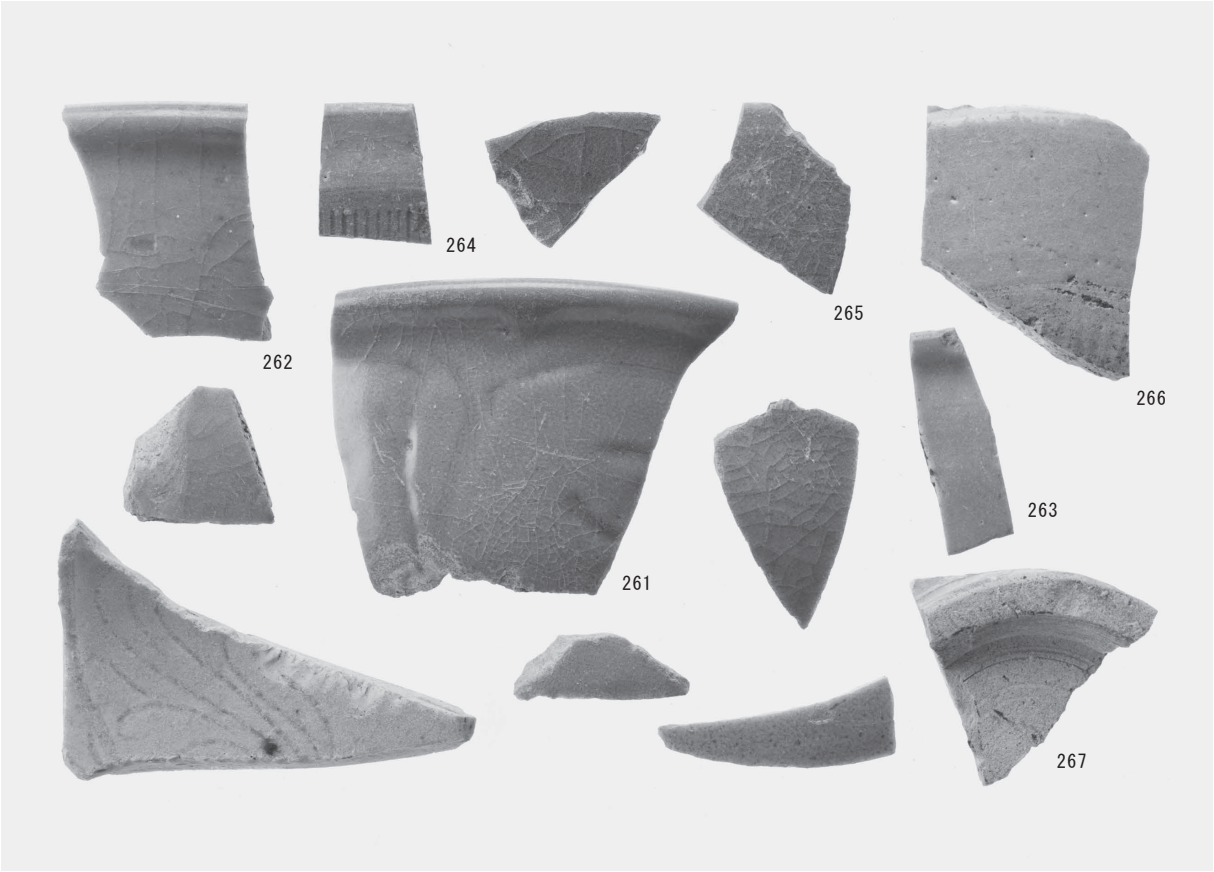


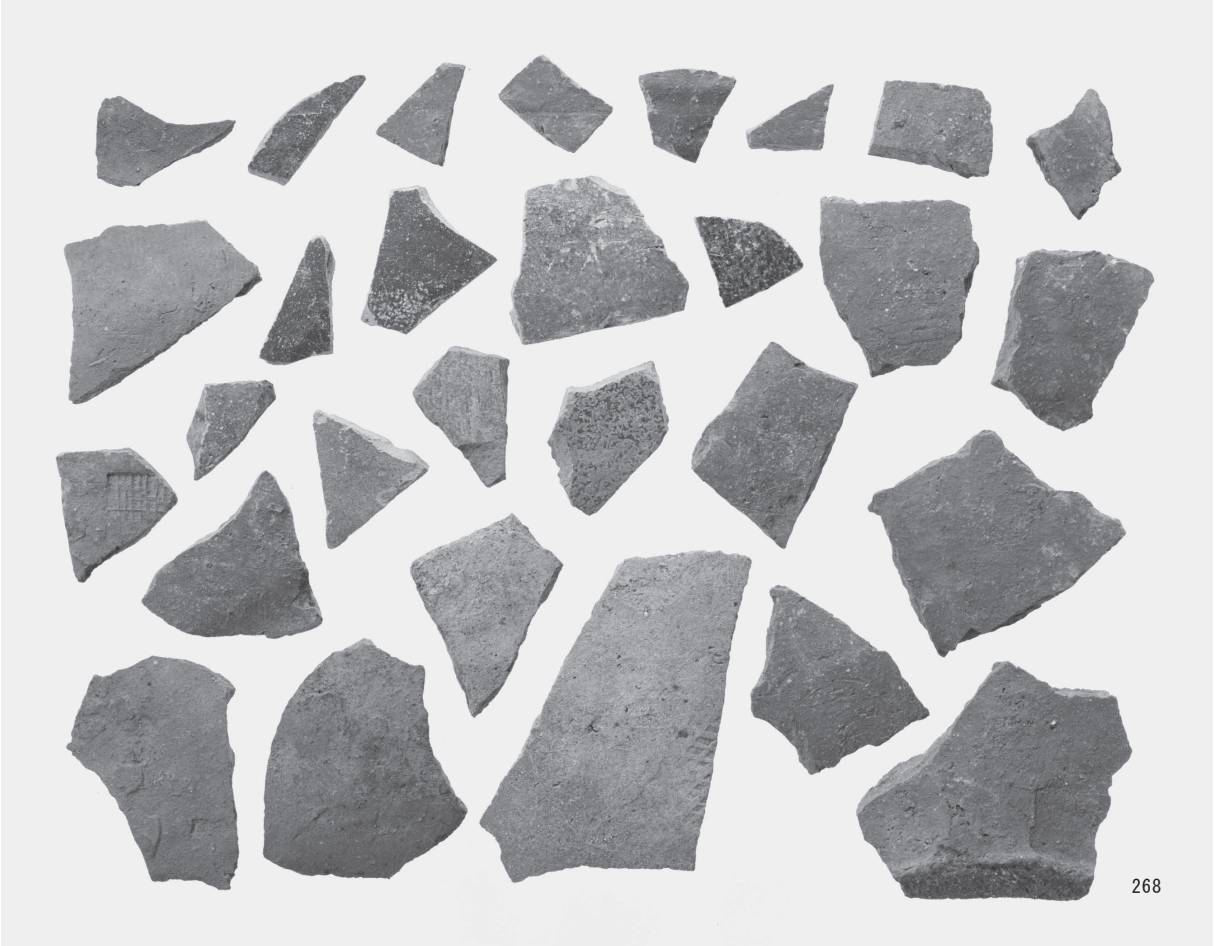
図版18　太井地区出土遺物2



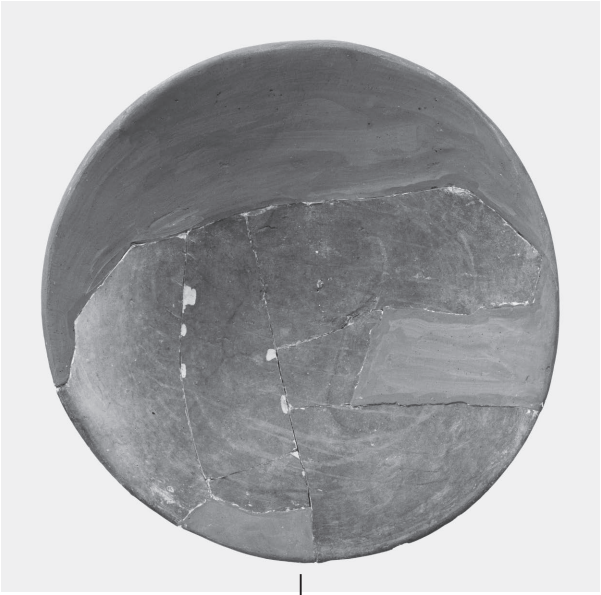


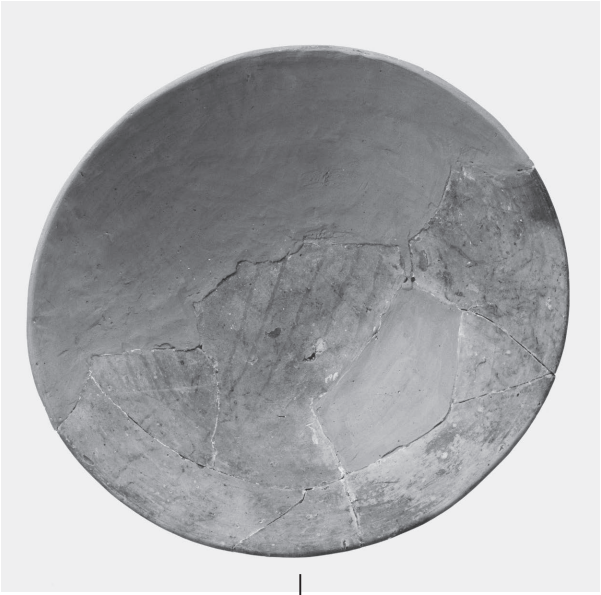
図版19　太井地区出土遺物3





図版20　太井地区出土遺物4





178

177

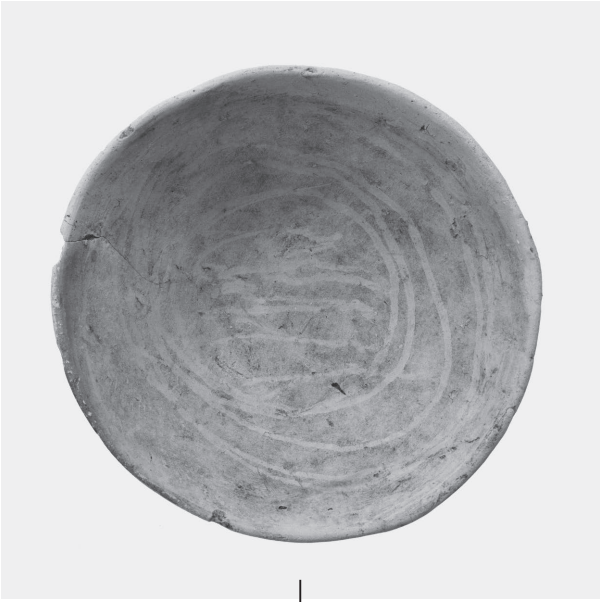
167

166

165～178

図版21　太井地区出土遺物5

181

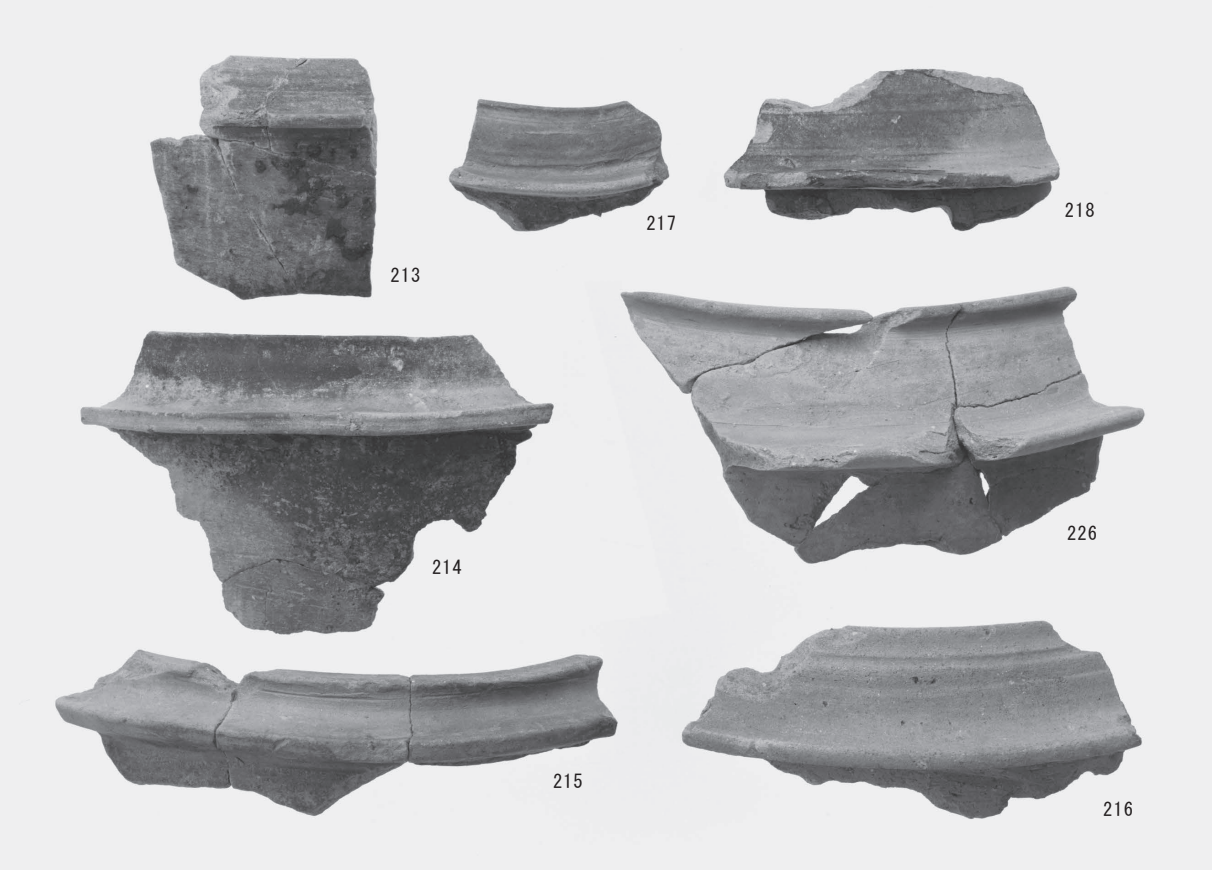


180

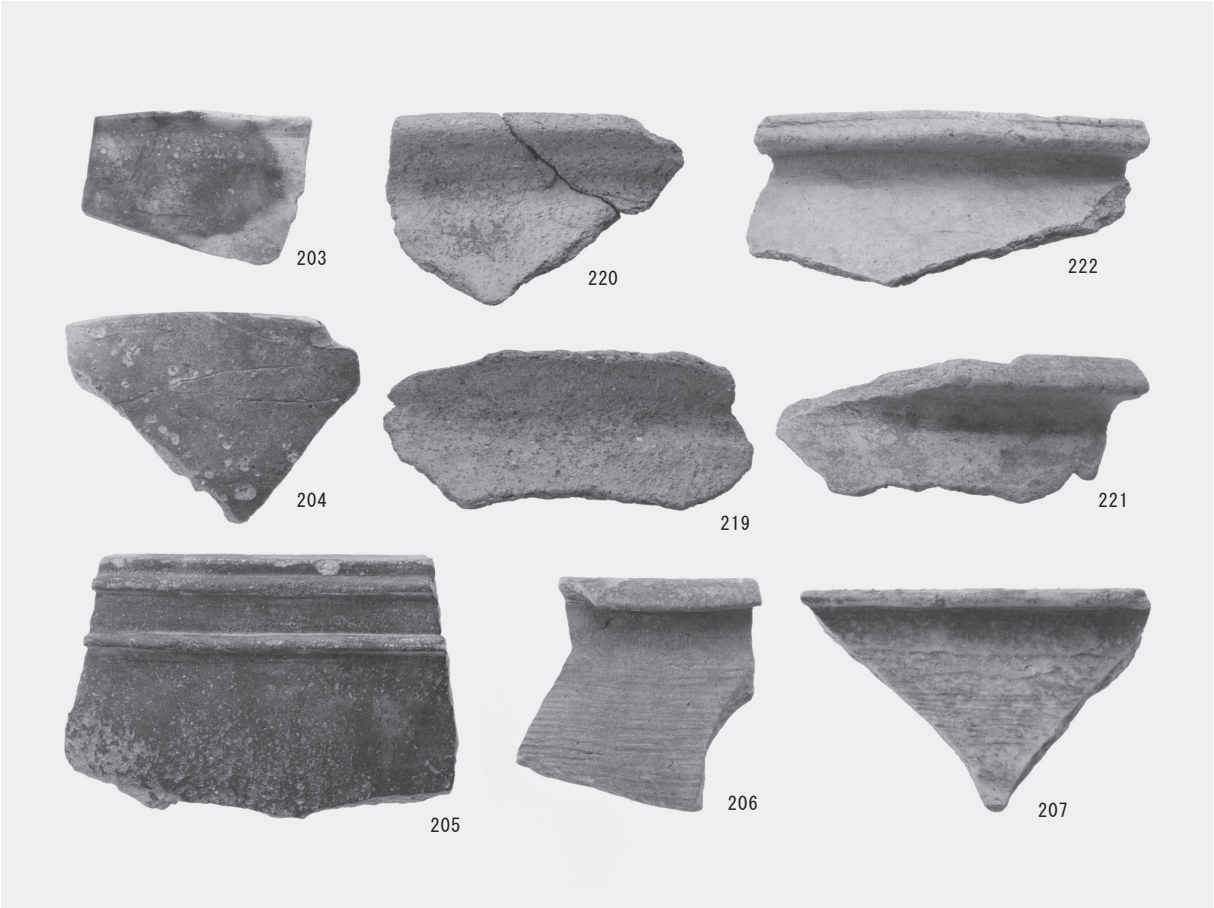
197

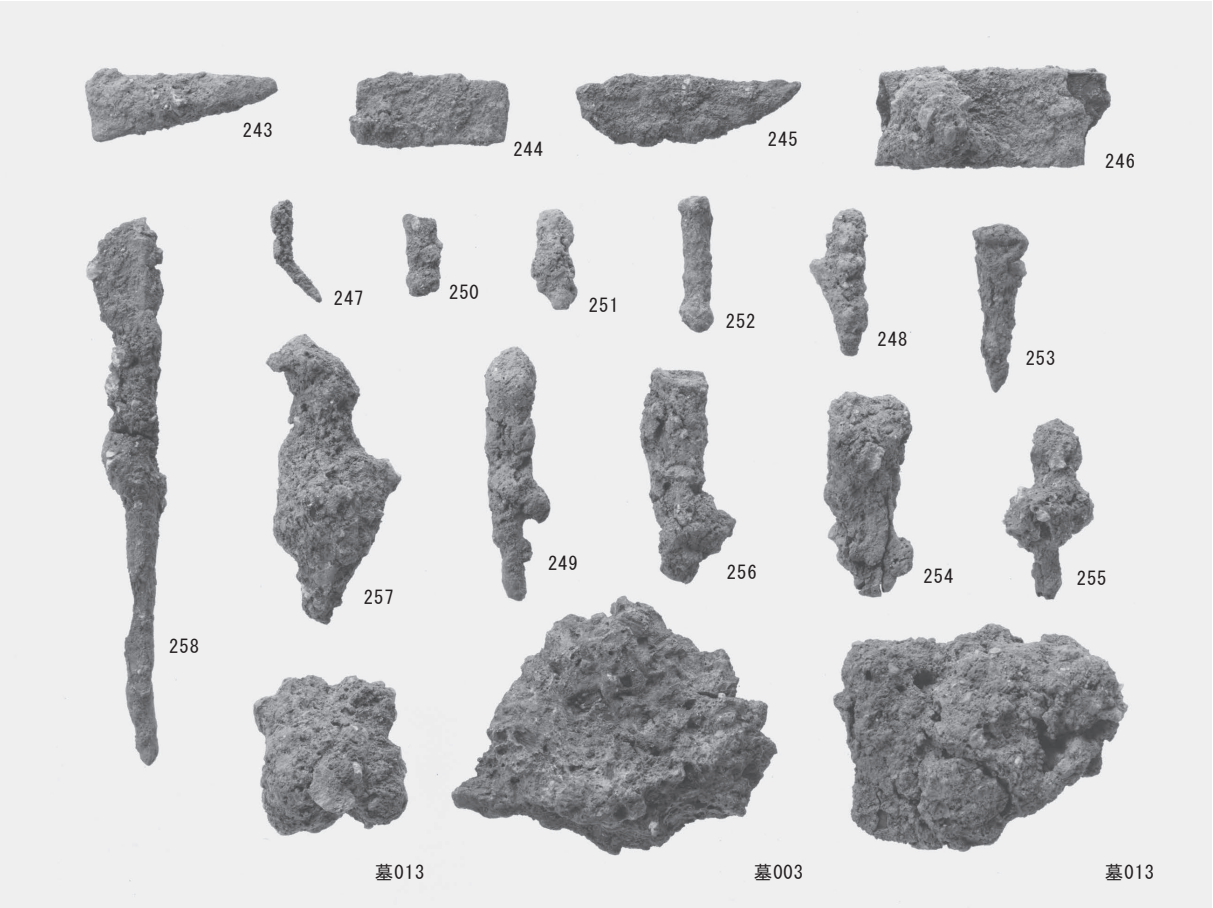
184

図版22　太井地区出土遺物6



図版23　太井地区出土遺物7




243
244
245
246
247
250
251
252
248
253
258
257
249
256
254
255
墓013
墓003
墓013

墓113
墓002
墓011

図版25　太井地区出土遺物９

墓010

墓009

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおいいせきはっくつちょうさがいよう・Ⅱ
書　　名	太井遺跡発掘調査概要・Ⅱ
副　書　名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小林義孝　西川寿勝　島津知子　大野薫
編集機関	大阪府教育委員会
所　在　地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　℡06－6941－0351（代）
発行年月日	2013年　３月　３１日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		(㎡)	
おおいいせき 太井遺跡	かわちながのし 河内長野市 こぶかちない 小深地内	27216	151	34° 24′ 55″	135° 37′ 32″	(小深地区) 2011.6.8～ 2011.9.6	320㎡	記録保存調査
	かわちながのし 河内長野市 おおいちない 太井地内	27216	151	34° 25′ 55″	135° 37′ 30″	(太井地区) 2011.９.１～ 2011.11.　18.	834㎡	

遺　跡　名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太井遺跡	集落跡	縄文時代中期後半		縄文土器 サヌカイト剥片	北白川Ｃ式
		鎌倉時代後期～ 南北朝時代	掘立柱建物 中世墓	土師質土器・瓦質土器・青磁・白磁	150基ちかくの中世墓（石組土壙墓・火葬墓など）
要　　約	太井遺跡小深地区の調査では南北朝時代の掘立柱建物跡と土器などが発見された。 太井遺跡太井地区の調査では鎌倉時代後期～南北朝時代の中世墓群が発見され、土器などが伴った。 太井遺跡小深地区・太井地区では縄紋時代中期後葉の土器が出土した。				

太井遺跡発掘調査概要・Ⅱ

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571　大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06-6941-0351（代表）
河内長野市教育委員会
〒586-8501　河内長野市市原町一丁目１番１号
TEL0721-53-1111（代表）

発行日　平成25年3月31日

印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所
〒537-0002　大阪市東成区深江南２丁目６番８号